# 南方熊楠　小兒と魔除

附　藪野直史注

［やぶちゃん注：本論考の初出は明治四二（一九〇九）年五月発行の『東京人類學雜誌』二百七十九号で、**初出原題は「出口君の『小兒と魔除』を讀む」**である（指示された先行する出口米吉氏の論考「小兒と魔除」は別にブログで電子化してある。出口論文は、『東京人類学会雑誌』の明治四二（一九〇九）年一月十二日発行の第二百七十四号に載ったもので、その初出は「J-STAGE」のこちらとこちら（PDF。後者は別画像で本文最終ページがある）で読める）。熊楠の本論考の初出は「J-STAGE」のこちら（PDF）で読める。本論考は大正一五（一九二六）年五月に岡書院から刊行された単行本「南方隨筆」に収録された。

底本は「南方隨筆」初版本を国立国会図書館デジタルコレクションの原本画像で視認して用いた。

段落に附した注の後は一行空け、前注の場合も前後を一行空けた。

なお、欧文書誌データの不審部分は平凡社「選集」に拠って修正した。但し、それは原則、注記していない。

**また、本篇では熊楠は外国の地名のカタカナ表記の場合に右傍線、同前の人名の場合、左傍線という区別をつけているのだが、そうなっていない部分もあり、これをいちいち注するのは五月蠅いだけなので、本電子化では総て下線で統一する。地名か人名かが判り難いものは、注で判るように附してある。**

本縦書版はブログ・カテゴリ「南方熊楠」で分割公開したそれを、一括版として加工したものであるが、全文を再検証し、ここだけで追加した注もあるので、これを決定版とする。

一部をルビ化したが、（　）表記の方が、読み取りを誤らず、よいと判断したもの、及び、引用でルビでないもの、リンク線と被るものは、ルビにしていない。また、そちらで老婆心で附したものの、今回、不要と判断したルビは除去した。

また、私の注の中で、分割版のそれをリンクさせた部分は、使い勝手が良いと思われるので、そのまま、残してある。

図はワードの使い勝手が判らず、一部で上手く挿入出来なかったため、総て、★印にブログ画像へのリンクとで示した。【二〇二一年一月二十二日　藪野直史】］

# 小兒と魔除

人類學會雜誌二七四號出口君の所篇を讀み、思ひ中りし事ども書き留て送呈すること左の如し、

（一三七頁人名を穢物もて附る事）瀧澤解の玄同放言卷三上、姓名稱謂の條に國史を引て、押坂部史毛屎、錦織首久僧、倉臣小屎、阿部朝臣男屎、卜部乙屎麿［やぶちゃん注：底本は「卜部」が「下部」となっている。原本と確認、特異的に訂した。まあ、下の話だからねぇ。］、節婦巨勢朝臣屎子、下野屎子等の名を列し、いとも異なる名なれども、時俗の習ひ亦怪むに足ずと云り、今案ずるに　Panjab Notes and Queries, vol. i. note 219, Allahabad, 1883　に云く、印度パンジヤブの俗、小神輩が兒童の美を嫉むを避けんが爲め、之に命ずるに卑蔑の意ある名を以てす、例せば一兒痘を病で死すれば、次に生まるゝ兒に名附るに、「マル」（惡）「ルブリア」（漂蕩人）「クリア」（掃除人）「チユラ」（探塵人）「チハジユ」（篩ホド賤キ奴）等の諸名の一を以てするなりと、吾國の丸の語に惡の意なければ、パンジヤプの「マル」と同原ならで、偶合ならんも、邪鬼を避けんがために、人名に屎、丸等の穢きを撰べりと云る消閑雜記の說は、件ん［やぶちゃん注：「くだん」。］の印度の例に因て强味を增すなり。

［やぶちゃん注：「人類學會雜誌二七四號出口君の所篇」出口米吉の論考。先だって『出口米吉「小兒と魔除」（南方熊楠「小兒と魔除」を触発させた原論考）』として電子化済み。「一三七頁人名を穢物もて附る事」上記リンク先及び初出の当該ページを参照されたい。

「瀧澤解の玄同放言」「瀧澤解」は「たきざはかい」で曲亭馬琴の本名。「玄同放言」は考証随筆。全三卷。瀧澤琴嶺（馬琴の長男）・渡辺崋山画。文政元年から同三年（一八一八年～一八二〇年）刊。天然・人事・動植物等に就いて和漢の書から引用し、考証を加えたもの。以下、所持する平凡社「南方熊楠選集」と、吉川弘文館随筆大成版と、「日本古典籍ビューア」の原本画像（当該部）によって読みを示す。後二者では読みの送り仮名の「ノ」を一部で本文に出した（読みを添えていない部分があるため）。

「押坂部史毛屎」「随筆大成」版及び原本では「押（オシ）坂ノ史毛屎（フヒトケソ）」。選集では「おしさかべのふびとくそ」。

「錦織首久僧」同前で「ニシコリノオホトクソ」。選集は「にしこりのおびとくそ」。

「倉臣小屎」同前で「倉ノ臣小屎（オミヲクソ）」。選集「くらのおみおくそ」。

「阿部朝臣男屎」同前で「阿部ノ朝臣男屎（ヲクソ）」。選集「あべのあそみおくそ」。

「卜部乙屎麿」同前で「卜部乙屎（ウラベノオトクソ）麿」。選集「うらべのおとくそまろ」。

「節婦」（節操を堅く守る）女性。

「巨勢朝臣屎子」同前で「巨勢ノ朝臣屎子（クソコ）」。選集「こせのあそみくそこ」。
「下野屎子」同前で「下野ノ屎子（クソコ）」。選集「しもつけのくそこ」。
「Panjab Notes and Queries」索引は「Internet archive」で見つけたが、原本を見出せなかった。
「印度パンジヤブ」インド北西部からパキスタン北東部に跨る地域。インド・パキスタンの分割の際にインド側とパキスタン側に分割されており、現在の行政区分ではパンジャーブ州（インド、パキスタン）・ハリヤーナー州・ヒマチャル・プラデーシュ州付近の広域に相当する。この付近（グーグル・マップ・データ）。
「篩ほど賤しき奴」「篩」は「ふるひ（ふるい）」。篩は穀物文化圏では大切な農具であるが、或いは、カースト制度の中では、塵を選別する道具であることから、前後の蔑称と類感するのであろうか？　或いは、それを製造する民が差別される階級に属したからであろうか？　篩には竹や馬の毛が用いられ、本邦でも古くは竹細工をする放浪民（サンカなど）や、動物に関わる職業が差別されてきた経緯があるのと、軌を一にする部分があるのか？　原文に当たれないので、詳しくは判らない。
「邪鬼を避けんがために、人名に屎、丸等の穢きを撰べりと云える『消閑雑記』の説」出口が冒頭で引いている「消閑雑記」は西山宗因門の談林の俳人岡西惟中（いちゅう）（寛永一六（一六三九）年～正徳元（一七一一）年：因幡鳥取生まれ。本姓は松永。名は勝。談林派の理論家として知られ、井原西鶴一門とともに宗因一門の双璧となったが、宗因没（天和二（一六八二）年没後は同門の反感を買い、俳諧自体から離れた。後、晩年には、明から来日した黄檗僧南源性派（しょうは）から漢詩を学んだり、儒者菊池耕斎に教えを受けたりし、若き日の俳論（「俳諧蒙求」等）以外にも多くの著作がある）の考証随筆。「新日本古典籍総合データベース」のこちらで原本の当該部が読める。」

又右に引るパンジヤプ隨筆質問雑誌 note 447 に、父母其子の爲に視害（ナザル）を豫防せんとて、「マラ」（死人）「サラ」（腐物）「ルラ」（不具）「チョツツ」［やぶちゃん注：底本は「チヨソツ」であるが、初出は「チヨツツ」であり、選集では「チョッツ」とするので、特異的に訂した。］（盗賊）、「ビカ」（乞丐）等の悪稱を以て之を呼ぶ由を載す、神代に、葦原醜男あり（書紀卷一）、延暦の頃美濃國人村岡連惡人（玄同放言三類聚國史を引く）あり、今日視害を懼るゝこと最も印度に行なわれ、邪視（Evil Eye）の迷信は極て南歐、西亞、北アフリカに盛んにて、本邦には此等に相當する詞すら存せずと雖も古書を閲し俚俗を察するに、二者の蹤［やぶちゃん注：「あと」。］と覺らるゝもの全く無きに非ざれば、醜男惡人等の名は、日本にもいと古く視害又邪視を避んとて、故らに子に惡名を命ずる風有りし跡を留めしものと思はる（今も厄年生れの兒に捨の字を名とする抔似ゆ）。
［やぶちゃん注：「視害（ナザル）」（しがい）「邪視（Evil Eye）」（じやし（じゃし））後者は「邪眼」とも呼ぶ。人や物に災いを齎す超自然的な力を目・視線に持つ人・鬼神・目のシンボルを持った対象物の存在、及びその邪悪な眼力を行使することやその作用を指す。ブラック・マジックに類するこの信仰は汎世界的に広く見られるものの、特に地中海地域・中近東・南アジアに多く、他に北ヨーロッパ・北アフリカ・東アフリカでも信じられ、新大陸では邪視地域からの移民の風俗として確認出来る。東アジア・東南アジア・オセアニアでは、

相対的に見ると、ごく稀である。邪視の力を持つとされる人間集団は社会によって様々であり、たとえば、インドでは王や聖職者らの地位の高い者、エチオピアのアムハラ族では低いカーストの者がこれを持ち、また、中東では人は誰でも邪視を持ち得ると考えられている（ここまでは平凡社「世界大百科事典」に拠った）。また、ウィキの「邪視」によれば、『世界の広範囲に分布する民間伝承の一つ。悪意を持って相手を睨みつけることにより、対象者に呪いを掛ける魔力。イーヴィルアイ(*evil eye*)、邪眼（じゃがん）、魔眼（まがん）とも言われる』。『様々な民族の間でこの災いに対する信仰は形成されている。また、邪視、邪眼はしばしば魔女とされる女性が持つ特徴とされ、その視線は様々な呪いを犠牲者にもたらす』。『邪視によって人が病気になり』、『衰弱していき、ついには死に至ることさえあるという』。『ちなみに邪視という言葉は博物学者南方熊楠による訳語であり、彼が邪視という概念を日本に紹介した』とある。『いくつかの文化では、邪視は人々が何気なく目を向けた物に不運を与えるジンクスとされる。他方では』、『それは、妬みの眼差しが不運をもたらすと信じられた。南ヨーロッパそして中東では、青い瞳を持つ人間には邪視によって故意に、あるいは故意ではなく呪いを人々にかける力があるとして恐れた』。『中東では、邪視に対抗するアミュレット』（英語：Amulet：お守り）『として青い円の内側に黒い円の描かれた塗られたボール（または円盤）が用いられた。同様のお守りとしてファーティマの手』（英語：Hand of Fatima。アラビア語「ハムサ」。主に中東やマグリブ地方（北部アフリカのエジプトを除いた地中海沿岸諸国とモロッコ・西サハラ・モーリタニア等）で使われる、邪視から身を守るための護符で手の形をしており、多くは五指のうちの中央の三本が山形を成し、親指と小指が同じ長さの手の形をしており、中央には目・ダビデの星・イクトゥス（ichtus：弧を成す二本の線を交差させて魚を横から見た形に描いたシンボル。初期キリスト教徒が隠れシンボルとして用いた）を配したものも多く見かける因みに「ファーティマ」とはイスラム教開祖ムハンマドの娘で、第4代正統カリフたるアリーの妻となった女性の名で、イスラーム圏に於ける理想の女性の象徴と見做されている）『がある。同様の目的で広くユーラシアでは天然石の虎目石や天眼石(縞瑪瑙)も利用される』。『ヨーロッパ人の間では、地中海沿岸が最も邪視の信仰が強い。邪視を防ぐ伝統的な方法として地中海沿岸の船の舳先に大きな目が描かれているのをしばしば目にする。また邪視の信仰は北ヨーロッパ、特にケルトの圏内へ広まった。古代ローマでは、ファリックチャーム』(phallic charm)『(陽根の魔除け）が対邪視に有効とされた』（本邦では「金精（こんせい）さま」として、また、古く『アイヌにも似た』信仰『があった』とする)。『同様に日本でも縄文時代に儀式に用いられたと考えられている男性器を模した石棒が出土している。同じく邪視から身を守る動作としてコルナ』(イタリア語：Gesto delle corna：「角の手振り」の和製略）『またはマノ・コルヌータ』（ラテン語：Mano cornuta：「角の手」）『(人差し指と小指を伸ばして後の指は握り込む動作)、マノ・フィコ』（ラテン語：mano fico：「無花果の手」）『(親指を人差し指と中指の間に挟んで握り込む動作）『で古代ローマでは男性器を表す）がある。また』、『今日』、『侮蔑の意味でつかわれるファックサインは』、『元来』、『古代ローマでは上記のサイン同様に邪視除けのサインであった』。『その一方で』、『プリアーポス』（ギリシア神話に於ける羊飼い・庭園及び果樹園の守護神にして生殖と豊穣を司る巨大なファルスを持った生殖男神のシンボルライズされたそれ）『は侮辱

の意味でも使われたことから』、『両面性を持ち合わせたサインでもある可能性が残る』。『ブラジルでは、マノ・フィコの彫刻を幸運のチャームとして常に持ち歩く。これらの風習は、邪視文様を』「ほと」（本邦の女性生殖器を指す古語）『として見たとき』、それ『に対応する男性器の象徴で対抗する、あるいは眼に対して先端恐怖症を想起させる事や、見るに堪えない見苦しいもので対抗する呪術の方法である』。『邪視の迷信はヨーロッパからアメリカ』『に持ち込まれた』。一九四六年、『アメリカ合衆国のマジシャン、アンリ・ガマシュ』（Henri Gamache（一八八九年〜?））『が出版した邪視についてのいくつかのテキストはアメリカ合衆国南部のヴードゥー医に影響を与えた』とある。**但し、最後に言っておくと、この後、熊楠はこの「邪視」を、またしても天馬空を翔けるが如く、延々とドライヴして語って行くことになるのであるが、そこで彼はインドの「視害」（ナザル）と「邪視」を、作用は同系統ながらも、別なものとして扱っていることが判ってくる。これは実にこの公開後も熊楠の中で燻り続け、大正六（一九一七）年二月に『太陽』に発表した「蛇に關する民俗と傳說」で、自分が本論考中で「邪視」と訳したこと、インドの「ナザール」は、当人が悪念を持たずして、何の他者を害する気もなく、逆に賞讃せんとして人や物を眺めただけで、眺められた対象が必ず害を受けるので、私は「視害」と訳しておいたが、調べた仏典の経文から見て、「見毒」（けんどく）という訳語にして「邪視」と区別するべきであると述べ、さらに燻りは続いて、遂に、昭和四（一九二九）年十月発行の『民俗学』（第一巻四号）で、短いながら、「邪視について」を再びものしているのである。**この拘りについて優れた論考がなされている姜竣（カンジュン）氏の論考「イメージとことばの近代」（日本口承文芸協会『口承文芸研究』第二十五号所収・二〇〇二年三月発行・PDF）を読まれんことを強くお薦めする。

「乞丐」「かたゐ」「かつたゐ」「こつがい」などの読みがある。乞食。古くはハンセン病患者を「かつたいぼ」と呼んだ差別史がある。

「葦原醜男あり（書紀巻一）」多様な別名を持つ大国主命の異名の一つ。但し、「日本書紀」巻之第一の「第八段」の「一書第六」に、

＊

一書曰。大國主神。亦名、大物主神。亦號、國作大己貴命。亦曰、葦原醜男。亦曰、八千戈神。亦曰、大國玉神。亦曰、顯國玉神。其子、凡有一百八十一神。

＊

と、この一箇所だけに出る。

「延暦」七八二年〜八〇六年。

「村岡連惡人（玄同放言三類聚國史を引く）」「選集」では『むらおかのむらじ』と振るが、「惡人」は読みを振っていない。「日本古典籍ビューア」の原本画像（当該部。左頁最終行）を見ても、やはり振っていない。「あくんど」と私は読みたくなるが、先に示した姜氏の論考では、この「惡人」を「マガヒト」と読んでおられる。「三」は「玄同放言」の第三巻の意。「類聚國史」は編年体である「六国史」の記事を、中国の類書に倣って、分類・再編集した歴史書。菅原道真の編纂により寛平四（八九二）年に完成した。写本を見つけたが、読みは一切振っていないので、調べるのをやめた。「玄同放言」は「類聚国史」の八十七巻の刑法部の引用と記し（訓読した）、

＊

桓武天皇延暦十七年、二月壬子の美濃國の人、村岡の連悪人を、淡路の國に配流す。群盗を停留め、百姓を侵犯すを以てなり。この悪人も、悪名を賜ひしにやあらざるか。おのづからなる名にしあらば、その謫罰、名詮自性ならずや。

＊

**以下、「悪」の字の名乗りを持った著名な人物を馬琴は挙げて、『その暴悪非義を憎（にく）みて、悪のを被（おは）せし』なんどと十把一絡げに言っているが、これは馬琴にして「何言いてけつかるッツ！？！」と突っ込みたくなる呆れた謂いである。悪源太義平や悪七兵衛（あくしちびょうえ）藤原景清、最上氏家臣で出羽国飽海郡朝日山城主であった名将池田悪次郎盛周（もりちか）でご存知の通り、この「悪」は「強い」の意であって、「悪い」の意ではない。自ら名乗り、同輩諸氏も親愛の意を込めてそう呼んだのだ。アホか？　馬琴！**

［やぶちゃん注：以下、邪視に関する考察は、底本では、全体が一字下げで始まり（「三五」ページ）、実にこの字下げの付随部分は「四八」ページまで続くのである。しかも、さらに邪視と邪害の考察は、その後も延々と続くのである。］

邪視のことは F. T. Elworthy, 'The Evil Eye,' 1895 に諸國の例を擧て［やぶちゃん注：底本は「譽て」であるが、初出で訂した。］詳說せり。予も屢ば讀みたれども、忘れ畢りたるを以て、只今身近く藏せる多少の書籍と、自分の日記手抄とに據て其の一斑を筆せんに、ブリチツシユ博物館人類學部長チヤーレスヘルキュルス、リード氏の直話に、氏の本國なる愛爾蘭［やぶちゃん注：「アイルランド」。］には、今も貪慾、憎惡、嫉妬等の邪念を以て人畜物件を見れば、見らるゝ者に害ありと信ずる輩多く、往古邪視の力よく高厦を燒き亡ぼすとさへ傳え［やぶちゃん注：ママ。］たれば、古寺觀［やぶちゃん注：「こじくわん」。］の前に女人陰を露せる像を立たる有り。こは一生懸命に其建物を睨み詰んとする中、女陰を見て、忽ち視力の過半を其方に減じ去らるべき仕組、恰も落雷の際避雷柱よく電力を導散して、災禍無からしむるに同じと（Ramusio, 'Navigationi et Viaggi,' Venetia, 1588, vol.i, fol.92 F. にレオ、アフリカヌスが、婦女山中に獅子に出くわせたる時、陰を示せば忽ち眼を低して去る、と云るも似たる事也）。ベーコンの說に、好事家あり、居常注意して調査せしに人盛勝なる時、最多く之を羨む者の邪視に害せらるると、蘇格蘭［やぶちゃん注：「スコツトランド」。］には十八世紀迄邪視を信ずる人多く、以爲く［やぶちゃん注：「おもへらく」。］、或る特殊の人邪視して、小兒牛畜之に中れば［やぶちゃん注：「あたれば」。］必ず病み、時として落命すと、其ハリス島に「モラスカ、ビーンス」と名くる果あり、白き者頗る巫蠱［やぶちゃん注：「ふこ」。］及邪視を防ぐの效有りとて、小兒の頸に懸るに、自ら其害を受引きて黑く變ずと云（W.C.Hazlitt, 'Faiths and Folklore,' 1905, i. 216-217）。鎌田榮吉氏歐州漫遊の間見聞せる所を予に話せしに、和蘭［やぶちゃん注：「オランダ」。］とかの一小島の俗、男兒を女裝する所有りと言り、そは、多分埃及［やぶちゃん注：「エジプト」。］と同く、女兒邪視に中てらるゝこと［やぶちゃん注：底本「こ」なし。初出を見ると、ここは「こと」の約物が用いられている（二九三ページ下段後ろから五行目）ことが判る。脱字と見なして訂した。］男兒より

稀なりとの觀念に出しならん（Lane, `Manners and Customs of the Modern Egyptians,`1871, p. 70）八犬傳に番作が、其子の安寧を冀ふて［やぶちゃん注：「ねがふて」。］、信乃を童時女裝せしめしは、これに類せり、J. T. Bent, `The Cyclades,` 1885, p. 15 に、希臘の一島にて、百歳許りの老嫗來訪せしに、さしも生き過ぎたる身のなほ生を貪りけむ、著者の邪眼を慮り、頻りに十字を畫せし由見ゆ。古え［やぶちゃん注：ママ。熊楠の書き癖。以降は注さない。］羅馬に此迷信有しは、ヴーギルの詩に明かにして、一八四六至七八年の間法王たりしピウス九世邪視の聞え高かりければ、其祝を受くる者、面を背け唾吐きて其害を防げり（Hazlit, I. 217; ii, 561.）。伊太利人今日、表面は基督教徒乍ら、邪視を惧るゝ風少しも非基督教徒たりし上世に異ならず、邪視の嫌［やぶちゃん注：「きらひ」。］ある者に逢ふ毎に、竊かに手を握り固めて、拇指を食指と中指の間に挾み露はす、之を「フイコ」（無花果）と呼び、「フイコ」を仕向けらるゝもの、大に怒りて仕向るものを殺すことすら有り、リード氏話しに、是れ陰嚢の間より男根の顯はれたるに象ると、思ふに此果未だ開かざるときの形狀、又其皮白汁に富る抔より、此稱呼を生ぜしか［やぶちゃん注：行末にて読点なし。］但し吾邦には、「フイコ」を男根ならで女陰に象ると、邪視に關する事と見ずして仕向らるゝものの好姪なるを意味する者とす、又思ふに、山岡明阿彌陀佛の戲作に係るてふ逸著聞集に、好色博士女陰の四具を說る中に、石榴に資て［やぶちゃん注：「よつて」。］名づけたる箇處有る如く、無花果の熟し裂て、多くの赤色瓤子［やぶちゃん注：「じやうし」。果実。］を露はせる姿に因み、之に女陰の意を寓せしこと、古歐州にも有りしならん、そは無花果は、ハールメス、プリアプス等の男神の好む所たりしと同時に、女神ジユノ、デメター等にも捧げられたればなり（A. de Gubernatis, `La Mythologie des Plantes,` 1882, tom. ii, pp. 138-140 參取）。アシユビー氏の說に、伊太利の民上下共、邪視を禦ぐ爲、護りを佩る［やぶちゃん注：「おぶる」。］事頗る盛んなれども、其事を話し、殊に外國人に說明するを不祥なりとする故、容易に知れ難し、ペルシアのベルツチ教授、最も廣く此事を研究せる其說に、此等護りの尤も古きは隕石なり、其中多く星及び點を具え［やぶちゃん注：ママ。］たるありて、その數定かならず、邪視する者之を算え［やぶちゃん注：ママ。］盡すの後に非れば其力利かず、故に最も珍とせらる、砂、穀粒を無數袋に盛れるを尊ぶも亦同理に出づと（Notes and Queries, Feb.22, 1908, PP. 145-146）。種彦の用捨箱卷上（九）守貞の近世風俗志廿三編に見えたる、二月八日籠を揭げて鬼を避るには、色々の理由も有るなんが、一つは鬼が籠目の數をよみ盡す中に、其邪力耗散すとの意もなきに非じ、土耳古［やぶちゃん注：「トルコ」。］人亦邪視の用心周到にして、家の外部に「コラン」の文を題し、天井よりは玻璃［やぶちゃん注：「はり」。玻璃に同じ。ガラス。］球を懸下し、又馬の息災の爲に、其飾具［やぶちゃん注：「ちよくぐ」。手綱などの制禦馬具。］を美にして之を防ぐ（Hazlitt, i . 217）。レヴント地方に、蠶を他人に見すれば、全く繭を成さずと信ずと云も、其眼力を怖るゝに由るなるべし（Hasselquist, `Voyages and Travels in the Levant,` 1766, p. 167）。西方亞細亞と北阿非利加［やぶちゃん注：「北アフリカ」。］に此迷信弘く深く行なはるゝは衆の知悉する所にして、アラビア夜譚にも鐵又拔刀を以て邪視を除く事あり、（Burton, `The Book of the Thousand Nights and a Night,` ed. 1894, vol.ii p. 209; vol. x , p. 105.）。又カイロの賈長［やぶちゃん注：「かちやう」。大商人か。］シヤムサツヂン其子の邪視に犯されんことを憂え［やぶちゃん注：ママ。この手の「く」も「え」と

熊楠は書きがちであるので、向後はこれも五月蠅いだけであるから、附さないこととする。不審に思われた方は、底本を確認されたい。]、七歳より成人近くなる迄地窖[やぶちゃん注：「ちこう」。穴倉。]中に育て、後始て相伴ふて外出するに及び、市人一同其親子たるを知ず、年甲斐もなく美童の艶色に惑溺せる者と心得、退職を強勸する話あり（vol. iii, pp. 157-165）カイロには近年も盛裝の富豪婦人、襤褸を絡ひ［やぶちゃん注：「まとひ」。］面に泥塗れる兒女を伴ひ歩むを見ること少なからず、是れ其生む所にして、家内に在ては錦衣玉食しながら、外出するご毎に、邪視に打たれざる樣にとて、故らに［やぶちゃん注：「ことさらに」。］相好を損ぜるなり（同上、百六十五頁注）。蓋し其害を受ること男兒は女兒より多く、兒童は成人より甚しといふ、現時埃及人及びスーダン人堅く回教を奉じて一神を尊信すと稱すれども實際沙漠を旅行するに當り、邪神の眼力を懼るゝこと甚く、種々に其馬を華飾して其災［やぶちゃん注：「わざはひ」。「災」に同じ。底本は「實」であるが、初出で訂した。］を薄くせんとす（Budge, 'The Gods of the Egyptians,' 1904, vol.i, pp. 13-14）。バートン曰く、邪視の迷信は古埃及に始つたらしいと（x. 393, note.）。是れ現存の文獻中此事を徵すべき者、埃及より舊きは無きを以てなり。問嘗［やぶちゃん注：「つねづね」。］、右に引けるバッチ氏の書を繙て［やぶちゃん注：「ひもときて」。］攷るに、吾國にも眼に緣［やぶちゃん注：「ちなみ」。底本では「綠」。初出で訂した。］して神を神明と呼び、佛像に性根入れるを開眼と稱し、神佛の精力威勢特に眼に集ると心得たる如く、埃及の古民、神の眼を恐れ敬ふ餘り、之に神自身と等しき力を附し、諸神はケペラ神の口より出で、人間は其眼より生ぜりなど、神の眼に造化の力を賦すると同時に、諸大神の眼又大破壞力を具せりと謂へるに似たり、例之に［やぶちゃん注：「これにれいするに」。］ホルスは日を右眼とし、月を左眼とす其眼力能くアペプの首を斬落す（アペプは大蛇にして神敵たり）又神怒りて其眼叢林を剿蕩す［やぶちゃん注：「さうたう（そうとう）す」。「掃討」に同じ。］、又ラー神の眼、魔を平ぐるに足る、諸神、ラーに申す、汝の眼をして進んで汝の爲に、汝の惡言する者を破滅せしめよ、汝の眼ハトール形を現ずる時、諸眼一つも之に抗し得ずと、是れ取も直さず、ラーの邪視異常に强きをいへるものなり、因に云ふ、紐育出板、ハムボルト文庫に收めたる、某氏の「ヒプノチズム」篇に、佛國の術士村女を睨んで、忽ち身を動かすこと能はざらしめ、輙ち［やぶちゃん注：「すなはち」。］就て姦姪し了れる由載たるを見し事あり、斯ること他にも聞及し例あり、こは、魅視とも譯すべき「フアツシネーシヨン」に屬し、理則の如何は扨置き、間々實事として在ることゝ承り及ぶ、人間に限らず、蛇が蛙鰻鱺［やぶちゃん注：二字で「うなぎ」。］などを魅視して逃去る能はざらしむと聞り、古え歐州人が信ぜる「バシリスク」の譚、吾國に今も殘存する牛鬼の誕［やぶちゃん注：「はなし」。］など、こんなことを大層にして傳えしに非ざるか、「バシリスク」一名「コツカトリス」は、蛇若くは蟾蜍［やぶちゃん注：「ひきがへる」。］が鷄卵を伏せ孵して生じ、蛇形にして翼と脚あり、鷄冠を戴くとも、單に白點を頂にせる蛇王なりともいふ、諸動物及び人之に睨まるれば死せざるなく諸植物も亦凋枯［やぶちゃん注：「てうこ（ちゅうこ）」。］せざるなきも、鼬と芸香［やぶちゃん注：「うんかう」。］のみ其害を受ず、古人これを獵りし唯一の法は、每人鏡を手にして之に向ふに、「バシリスク」の眼力鑑の爲に其身に返り、矢庭に斃れ畢るにあり（Hazlitt, i. p. 133; J. Scoffern, 'Stray Leaves of Science and Folk-lore,' 1870, pp. 342-346）牛鬼吾邦に存せしこと今昔物語東鑑

等に出れども、予が熊野地方にて聞けるは大に之と異なり、則ち一種の有蹄獣にて、山中、人に遭へば見詰て去らず、其人遂に疲勞して死す、之を影を呑まるといふ、爾［やぶちゃん注：「その」。］時、［石は流れる木の葉は沈む牛は嘶き馬吼る［やぶちゃん注：「ほゆる」。］］と、逆まごとを述べたる歌を誦すれば、其患を免る。而して牛鬼が草木の葉を食たる跡を見れば、箭羽頭［やぶちゃん注：「やばねがしら」。］の狀をなし、他の諸獣の食し跡に異なると、予至て不案内の事ながら、種々聞及し所を併せ考るに、或は無識の徒、本州唯一の羚羊（かもしか）［やぶちゃん注：以上はルビではなく本文。］を誤解して、件の怪談を生ぜしかとも思ふ、二年計り那智に僑居せし時、牛鬼出で吼るといふ幽谷へ、所謂逢ふ魔が時（神代に大まがつみの神あるを見れば大禍時［やぶちゃん注：「おほまがどき」。］の意か）を撰み、夜に入る迄其邊にたゝずみし事屢々なりしも、境靜かにして、小瀑布の深淵に落る音の、岩壁に響きて、異様に聽取らるゝ有りしのみ、他に何物をも見ること無りき。

［やぶちゃん注：「F. T. Elworthy, `The Evil Eye,` 1895」イギリスの言語学者で好古家のフレデリック・トーマス・エルワージー（Frederick Thomas Elworthy　一八三〇年～一九〇七年）の「*The Evil Eye : an account of this ancient and widespread superstition.*」（邪視――この古く、且つ、広く普及した迷信に就いての解説）。当該原本は「Internet archive」のこちらで読める。

「チャーレスヘルキュルス、リード」考古学者チャールズ・ハーキュリーズ・リード（Charles Hercules Read　一八五七年～一九二九年）。大英博物館で英国及び中世の骨董と民族学の管理者となり、イギリス王室の勅許を受けた学術機関「ロンドン考古協会」の会長も務めた。彼の生まれはイングランドのケント州であるが、家の出自がアイルランドなのであろう。

「高厦」大家。大きな屋敷。

「古寺觀」古い教会堂。

「陰」「いん」。陰部。女陰（歴史的仮名遣「ぢよいん」）。女性生殖器。

「Ramusio, `Navigationi et Viaggi,` Venetia, 1588, vol.i, fol.92 F.」ベネチア共和国の官吏（元老院書記官など）を務めた人文主義者で歴史家・地理学者のジョヴァンバティスタ・ラムージオ（Giovanni Battista Ramusio　一四八五年～一五五七年）が、先達や同時代の探検旅行記を集大成した、大航海時代に関する基本文献とされる「航海と旅行」（Delle navigationi et viaggi：全三巻。一五五〇年～一五五九年刊）のこと。

「レオ、アフリカヌス」レオ・アフリカヌス（Leo Africanus　一四八三年？～一五五五年？）の名前で知られる、本名をアル＝ハッサン・ブン・ムハンマド・ル＝ザイヤーティー・アル＝ファースィー・アル＝ワッザーンという、アラブの旅行家で地理学者。「レオ」はローマ教皇レオX世から与えられた名で、「アフリカヌス」はニック・ネーム。

「ベーコン」イギリスの哲学者フランシス・ベーコン（Francis Bacon　一五六一年～一六二六年）であろうが、出典は不詳。

「人盛勝なる時」「ひとさかりがちなるとき」。ある人が成功して世間で華々しく知られている折り。

「ハリス島」スコットランド西部に浮かぶ「ルイス（Lewis）島」の南部は「ハリス（Harris）島」と呼ばれている。二つの島名は同じ島にもかかわらず、併用されている（地図表記参照）。

ここ（グーグル・マップ・データ。以下同じ）。

「モラスカ、ビーンス」以下の原本に当たれないので綴り不詳。但し、熊楠の叙述からは「ビーンス」は「beans」（豆）ではあるまいか。

「W.C.Hazlitt, `Faiths and Folklore,` 1905, i. 216-217）」イギリスの弁護士・書誌学者・作家ウィリアム・カルー・ヘズリット（William Carew Hazlitt　一八三四年～一九一三年）著の「信仰と民俗学」。

「鎌田榮吉」（安政四（一八五七）年～昭和九（一九三四）年）和歌山県出身。紀州藩の家臣鎌田鍬蔵の子。和歌山藩校・同白修学校を経、明治七（一八七四）年、慶応義塾入学、卒業後に慶應義塾の教諭となった。その後、帰郷し、白修学校校長を経て、再び慶応教諭とある。明治十四年、鹿児島造士館教頭などを務めた後、明治十七年、内務省御用掛となり、その後、内務省御用掛・県治局・大分中学校長・同師範学校長を経て、明治二十七年、和歌山から衆院議員に当選した。明治三十年、欧米を巡遊し（この時、同郷であった熊楠に逢い、かの孫文とも、ともに接触し、孫文の訪日の端緒を作った。この辺りは私の南方熊楠の「履歴書」のこちらを参照されたい）、二年後に帰国し、慶応義塾長となった。高等教育会議議員・教育調査会委員を務め、明治三十九年には勅選貴院議員となっている。大正八（一九一九）年の「ワシントン第一回国際労働会議」の政府代表となり、大正十一年には加藤友三郎内閣の文相を務めた。昭和二（一九二七）年、枢密顧問官（日外アソシエーツ「20世紀日本人名事典」に拠った）。

「和蘭とかの一小島の俗、男兒を女裝する所有り」情報を得られない。オランダではない可能性もあるか。

「Lane, `Manners and Customs of the Modern Egyptians,`1871, p. 70」イギリスのアラビア学者エドワード・ウィリアム・レーン（Edward William Lane　一八〇一年～一八七六年）。**ページが違うが、「Internet archive」で原本を調べたところ、「58」の頭にこの内容と、後に書かれる汚れた姿で子を連れ歩くことが記されてあるのを発見した。**

**＊**

**I naturally inquired the cause of what struck me as so strange and inconsistent, and was informed that the affectionate mothers thus neglected the appearance of their children, and purposely left them unwashed, and clothed them so shabbily, particularly when they had to take them out in public, from *fear of the evil eye*, which is excessively dreaded, and especially in the case of children, since they are generally esteemed the greatest of blessings, and therefore most likely to be coveted. It is partly for the same reason that many of them confine their boys so long in the hareem. Some mothers even dress their young sons as girls, because the latter are less obnoxious to envy.**

**＊**

「八犬傳に番作が、其子の安寧を冀ふて、信乃を童時女裝せしめしは、これに類せり」馬琴の「南総里見八犬伝」では私は読んだことがない（妻は大ファンで既に三度以上、全篇を読んでいるが）。八剣士として最初に登場する犬塚信乃孝成（いぬづかしのもりたか）は、ウィキの「南総里見八犬伝の登場人物」によれば、長禄四（一四六〇）年七月『戊戌の日、武蔵大塚で生まれる。父は大

塚番作、母は手束（たつか）』。『番作夫婦には』三『人の子があったが、いずれも育たずに夭折している。手束が子を願って』、『滝野川の弁才天に参拝した帰り道で』、『神犬に騎乗した神女（伏姫神）に遭遇し』、『珠を授けられるが、この時は取りこぼしてしまい、代わりに傍らにいた仔犬（与四郎）を連れて帰る。その後』に『出産したのが信乃である。**元服まで』、『性別を入れ替えて育てると』、『丈夫に育つという言い伝えに』、『母が願いを託したため、女名をつけられ、女装されながら育てられた。**作中の番作の説明によれば、「しの」は「長いもの」を意味する古語であり、また』、『番作夫婦が出会った信濃国に通じる』とある（太字は私が附した）。

「J. T. Bent, 'The Cyclades,' 1885, p. 15」イギリスの探検家・考古学者・作家ジェームス・セオドア・ベント（James Theodore Bent　一八五二年～一八九七年）の「キクラデス諸島又は島内のギリシャ人たちの生活」（*The Cyclades; or, Life among the Insular Greeks*）。「Internet archive」で調べると、当該ページはここだが、熊楠の記載は面白いものの、どうもかなり翻案してあることが判る。

「ヴーギル」ラテン文学の黄金期を現出させたとされるラテン語詩人プーブリウス・ウェルギリウス・マーロー（Publius Vergilius Maro　紀元前七〇年？～紀元前一九年）。共和政ローマ末の内乱の時代から、オクタウィアヌスの台頭に伴う帝政の確立期にその生涯を過ごし、「牧歌」・「農耕詩」・「アエネーイス」の三作品によって知られる。ヨーロッパ文学史上、ラテン文学において最も重視される人物（同人のウィキに拠った）。私は彼の訳詩集も持たないので、当該内容を持つ詩篇は不明。

「ピウス九世」第二百五十五代ローマ教皇ピウスIX世（Pius IX　一七九二年～一八七八年）。在位は一八四六年六月から一八七八年二月。本名はジョヴァンニ・マリア・マスタイ＝フェレッティ（Giovanni Maria Mastai-Ferretti）。実に三十一年七ヶ月という最長の教皇在位記録を持つ。初めは自由主義的で、「イタリア統一運動」を支持したが、後に反意したため、一八四八年にイタリア軍によって教皇庁を追われた。一八七〇年にイタリア王国が成立しても、これと対立し、自ら、バチカン宮に幽囚の身となった。「第一バチカン公会議」の召集者であり、マリアの無原罪懐胎と教皇不可謬性の教義の採択でも知られる。

『手を握り固めて、拇指を食指と中指の間に挾み露はす、之を「フイコ」（無花果）と呼び』「南方熊楠　小兒と魔除　（1）」の私の「視害（ナザル）」「邪視（Evil Eye）」の注を参照されたい。

「リード氏話しに、是れ陰嚢の間より男根の顯はれたるに象ると、思ふに此果未だ開かざるときの形狀、又其皮白汁に富る抔より、此稱呼を生ぜしか」私は文句なく賛同する。

「山岡明阿彌陀佛」通常は「山岡明阿彌」（やまおか　みょうあみ）と表記する。既に注した旗本で国学者の山岡浚明（まつあけ　享保一一（一七二六）年～安永九（一七八〇）年）の通称。林祭酒から漢学を学び、その後、賀茂真淵から古学を学んだ。熊楠が盛んに引く江戸時代の類書（百科事典）の一つ「類聚名物考」を始めとして多くの著作を残した。

「逸著聞集」俗に「色道の三奇書」と称される一つ（他に黒沢翁満著「はこやのひめごと」・沢田名垂著「あなをかし」）。国立国会図書館デジタルコレクションのこちらに写本があるが、内容的に労多くしての感が私には強いので調べる気にならない。悪しからず。

「ヘールメス」ギリシア神話の青年神でオリュンポス十二神の一人、神々の伝令で、特にゼウスの使いとして知られ、旅人・商人の守護神であるヘルメース（ラテン文字転写：Hermēs）。

「プリアプス」既注であるが、引用途中に入れた注なので再掲しておくと、ギリシア神話に於ける羊飼いで、庭園・果樹園の守護神にして生殖と豊穣を司り、男性の生殖力の神プリアーポス（ラテン文字転写：Priāpos）。巨大なファルスを持つ。

「ジユノ」ローマ神話で主神ユーピテルの妻であり、女性の結婚生活を守護する女神で主に結婚・出産を司るユーノー（ラテン語：Juno）。ローマ最大の女神]。神権を象徴する美しい冠をかぶった荘厳な姿で描かれ、孔雀を聖鳥とする。ギリシア神話のヘーラーと同一視される。

「デメター」ギリシア神話に登場する豊穣神で、オリュンポス十二神の一柱にして穀物の栽培を人間に教えた女神デメテル（ラテン文字転写：Dēmētēr）。その名は古代ギリシア語で「母なる大地」を意味する。

「A. de Gubernatis, `La Mythologie des Plantes,` 1882, tom. ii, pp. 138-140」イタリアの文献学者コォウト・アンジェロ・デ・グベルナティス（Count Angelo De Gubernatis　一八四〇年～一九一三年）の「植物の神話」。

「アシユビー」後に記す「Notes and Queries, Feb.22, 1908, PP. 145-146」（後注参照）の記者「R. E. ASHBY」とある人物。事蹟不詳。

「ペルシアのベルツチ教授」同前記事に「Prof. Belucci, of Perugia」と登場する。

「隕石」原記事に「a meteoric stone」とある。

「Notes and Queries, Feb.22, 1908, PP. 145-146」「Internet archive」のこちら及び次のページで当該記事が読める。タイトルは「THE EVIL EYE IN ITALY.」で先の署名が最後にある。

「種彦の用捨箱」（ようしやばこ）「巻上（九）」「修紫田舎源氏」で知られる戯作者柳亭種彦（天明三（一七八三）年～天保一三（一八四二）年）の天保一二（一八四一）年の考証随筆。早稲田大学図書館「古典総合データベース」のこちらの原本の「天」（上巻・PDF）の「17」コマ目の「九」の「お事始」の中に、「江戸砂子」を引いて、

＊

事初【江府中にて籠をつるなり】

＊

とあり、その次のコマに、

＊

此日、目籠を出す由縁

＊

について、結論を言って、

＊

是は、参州・遠州の風俗の移りしなりとぞ。彼國にては、節分の日に出すを此日に誤りし

＊

ものだと断じ、

＊

昔より、目籠は鬼のおそるゝといひならはせり。是は、目籠の底にの角々は☆、此くのごとし。晴明九字【或いは晴明之判。】といふ者なればなり

＊

と記して、慶安三年の吟とされる、

＊

籠の目をあらあら作るは詮もなし
　悪魔いれじとつゝしめる門

＊

という句と付句を掲げた上で、

＊

籠の目を鬼のおそるゝといふ諺のありし証にあれ

＊

と擱筆している（原文はもっとねちっこく、ぐちゃぐちゃと書いているのだが、五月蠅いだけなので、私がカットして判り易くしてある。一部は訓読しておいた）。

「守貞の近世風俗志廿三編」江戸後期の風俗史家喜田川守貞（文化七（一八一〇）年〜？：大坂生まれ。本姓は石原。江戸深川の砂糖商北川家を継いだ）が天保八（一八三七）年から嘉永六（一八五三）年にかけての、江戸風俗や民間雑事を筆録し、上方と比較して考証、「守貞漫稿」として纏めた。この書は明治四一（一九〇八）年になって「類聚近世風俗志」として刊行された。但し、熊楠の編数は誤りで、「巻之二十六【春時】」で、新春の行事を記述した中に、「二月八日　御事始め」として絵入りで出る。私は岩波文庫版を所持するが、ここは国立国会図書館デジタルコレクションの写本の当該部を底本に電子化し（カタカナはひらがなに代え、句読点・記号を打った。読みは岩波版（ルビは新仮名）を参考にして歴史的仮名遣で添えた。文中に出る図形は画像からトリミングして差込んだ）、画像もそこからトリミングして補正（裏の映り込みがひどいので）して添えた。

＊

二月八日。御事始め。江戸士民、毎戸、竿頭に篭をつけ、栽つ。或書に曰、「籠目は、★如此。俗云、『晴明九字』也」。又、曰、「方相の眼に似たり」。又、一書に、篭と味噌漉とを檐に釣るの圖あり。味噌漉の目、★是、亦、道家の秘呪とする九字に似たり。［やぶちゃん注：「とも」の約物。］に邪を除［やぶちゃん注：「のぞく」。］の意なるべし。★

［やぶちゃん注：最後の挿絵のキャプションは、竿の右脇が、『竿頭に篭を捧く』（ぐ）『圖』、上野町屋の俯瞰図の上に添えてあるのが、『御事の日、鏑を栽つるの圖』。］

＊

「栽つ」は植え込むの意であろう。最初の引用は種彦の「用捨箱」の可能性が高い。「方相」は「方相氏」のこと。元は中国周代の官名であるが、本邦に移されて、宮中に於いて年末の追儺（ついな）の儀式の際に悪鬼を追い払う役を担う神霊の名。黄金の四ツ目の仮面をかぶり、黒い衣に朱の裳を着用して矛と盾を持ち、内裏の四門を回っては鬼を追い出した。見たことがない人のためにグーグル画像検索「方相氏」をリンクさせておく。

「レヴント地方」レヴァント（Levant）は東部地中海沿岸地方の歴史的名称。広義にはトルコ・シリア・レバノン・エジプト及び現在のイスラエルを含む地域を指す。

「Hasselquist, `Voyages and Travels in the Levant,` 1766, p. 167」はスウェーデンの旅行家にしてナチュラリストであったフレデリック・ハッセルキスト（Fredrik Hasselquist　一七二二年～一七五二年）。「Internet archive」のこちらであるが、英語の綴りが古く、熊楠の言っているような内容なのかどうか、私には判らなかった。

「Burton, `The Book of the Thousand Nights and a Night,`」一九世紀イギリスを代表する探検家にして、軍人・外交官・人類学者・作家（翻訳家）としても知られたリチャード・フランシス・バートン（Richard Francis Burton　一八二一年～一八九〇年）の訳した「バートン版千夜一夜物語」（アラビアン・ナイト）。

「カイロには近年も盛装の富豪婦人、襤褸を絡ひ［やぶちゃん注：「まとひ」。］面に泥塗れる兒女を伴ひ歩むを見ること少なからず、是れ其生む所にして、家内に在ては錦衣玉食しながら、外出するご毎に、邪視に打たれざる様にとて、故らに相好を損ぜるなり」「**Lane, `Manners and Customs of the Modern Egyptians,`1871, p. 70」に私が引用した英文を見られたい。同じことが書かれてある。**

「Budge, `The Gods of the Egyptians,` 1904, vol.i, pp. 13-14」イギリスの考古学者エルネスト・アルフレッド・トンプソン・ウォーリス・バッジ（Ernest Alfred Thompson Wallis Budge　一八五七年～一九三四年：古代エジプト・アッシリア研究者として大英博物館の責任者を長く務めた）の原本の当該部は「Internet archive」のこちら右ページから、次のページにかけてである。

「開眼」老婆心乍ら、この狭義にあっては「かいげん」と読むのが正しい。

「ケペラ神」「ケプリ」或いは「ケペラ」。エジプト神話に於ける太陽神「ラー」の形態の一つであり、「日の出」を表わす。男性の体にスカラベ（彼らが聖なる虫と限定して指したのはヒダリタマオシコガネ（昆虫綱 Coleopterida 上目コウチュウ目コガネムシ科ダイコクコガネ亜科 Scarabaeini 族タマオシコガネ属ヒジリタマオシコガネ *Scarabaeus sacer* ）とされる）の頭を持つ姿で表現される。これはスカラベが丸めた獣糞を自分の前で転がしながら運ぶ姿が、太陽の運行を象徴すると考えられたことによる。また、その糞の玉からは、スカラベが生み付けた卵が孵って生命が出てくることから、スカラベは自分自身を創造する太陽神を象徴するものと見做されたのである。ラーは、夜の間に冥界を渡り、この姿で東の方向に天空の女神「ヌト」の腿の間から地上に姿を現わすと考えられていた（概ねウィキの「ケプリ」に拠った）。

「ハトール形」不詳。神名とならば、ラーを父と配偶神に持つ愛と美の女神ハトホル或いはハトル（Hathor）がいるが、当該ウィキを読んでも眼力のことは出ていない。

「紐育」老婆心乍ら、ニュー・ヨークのこと。

「ハムボルト文庫」不詳。

「ヒプノチズム」hypnotism。「催眠術」の意。音写するなら、「ヒプニティズム」である。

「フアツシネーシヨン」fascination。「魅惑」・「魅力」・「うっとりした状態」・「蛇が蛙などを竦ませること」等の意がある。

「バシリスク」バジリスクとも。ラテン語「basiliscus」・英語「basilisk」。古代ヨーロッパ以来の想像上の妖獣。名称はギリシア語で「小さな王」の意に由来する。「全ての蛇の上に君臨する蛇の王」を指す。蜥蜴・蛇・鶏（にわとり）がハイブリッド化したような姿で、王冠の鶏冠（とさか）を持ち、睨んだり、息を吹きかけただけで人を殺すことが出来るとされた。因みに、後にリンネによって中南米に棲息する蜥蜴、有鱗目トカゲ亜目イグアナ下目イグアナ科バシリスク亜科 Corytophaninae バシリスク属 *Basiliscus* Laurenti, 1768）の属名に当てられている。同属種の成体の♂が頭頂部・背面・尾に鶏冠や帆状突起が発達することに由来する。

「牛鬼」現行でも「うしおに」「ぎゅうき」二様に読まれる。主に西日本に伝わる妖獣的妖怪である。主に海岸に現れ、浜辺を歩く人間を襲うとされている。海辺や河川の淵に出没することが殆どで、圧倒的に獰悪にして残忍で、毒を吐き、人を食い殺すことを好むと伝える（祭祀されて神となっているケースもあるにはあるが、これは原祖型の零落からの先祖返りか、或いは御霊信仰の変形であろうと思われる）。一般には、頭が牛で、首から下は獣類或いは鋭い爪を持った昆虫型の奇体な「鬼」の胸腹部で描かれる。資料として牛鬼と認め得るもので、第一級レベルに属する記載は、「吾妻鏡」で、建長三（一二五一）年三月六日に浅草寺に出現したそれである。

＊

丙寅。武藏國淺草寺。如牛者忽然出現。奔走于寺。于時寺僧五十口計。食堂之間集會也。見件之恠異。廿四人立所受病痾。起居進退不成。居風云々。七人卽座死云々。

＊

丙寅（ひのえとら）。武藏國淺草寺に、牛のごとき者、忽然と出現し、寺に奔走す。時に、寺僧、五十口（ばか）計り、食堂（じきだう）の間（ま）に集會（しふゑ）するなり。件（くだん）の恠異を見て、廿四人、立所（たちどころ）に病痾（びやうあ）を受け、起居・進退、成らず。「居風（きよふう）」と云々。七人、卽座に死ぬと云々。

＊

この病名の「居風」というのは判らない。私は牛頭天王や地獄の獄卒牛頭から派生的に生じた妖怪であり、娘の頭に牛体とする「件（くだん）」も、その直系親族の成れの果てと考えている。『「バシリスク」一名「コツカトリス」』コカトリス（英語：Cockatrice／フランス語：Cocatrix（音写するなら「コケトゥリ」））は雄鶏と蛇とを合わせたような姿の伝説上の妖獣。ウィキの「コカトリス」によれば、『雄鶏の産んだ卵から生まれるという』。『雄鶏は』七『歳で、卵はヒキガエルが』九『年間温める、などという民話も生まれた』。『同じく伝説の生物であるバジリスクから派生したとされているが、そのきっかけは』十四『世紀にジェフリー・チョーサーの『カンタベリー物語』において』、『バジリスクがバシリコック（Basilicok）という名前で登場したことである。その名はやがてコカトリスに変化していき』、『その名が指す生物の外観も、元々は蛇であったものが、首から上と下肢は雄鶏、胴と翼はドラゴン、尾は蛇というふうに、複数の生き物が混合した姿に変貌していった』。『能力はバジリスクと同じようなものを持ち、人に槍で襲われるとその槍を伝って毒を送り込んで逆に殺したり、水を飲んだだけでその水場を長期間にわたって毒で汚染したり』、『さらには、見ただけで相手を

殺したり』**（邪眼の特徴である）**、『飛んでいる鳥さえ』、『視線の先で焼いて落下させたりする』『とされた』。『中世の聖書のさまざまな版のいくつかにコカトリスが登場したため、当時の多くの人がコカトリスが本当に存在すると信じていたという』。『ウィリアム・シェイクスピアの『十二夜』の中でも、登場人物がコカトリスについて言及している』とある。なお、ウィキの「バジリスク」の方には、『コカトリスとは雌雄関係にある（どちらが雄か雌かは不明）とも言われ、「バジリスク」の別称として「コカトリス」が用いられるようにもなった』とあっさりしている。

「凋枯」しぼんで枯れること。

「芸香」**以下に示す香草を指す「芸」（音「ウン」。他に「盛んなさま」・「草を刈る」或いは「木の葉が枯れかけて黄ばむ」の意などがある。正しくは（くさかんむり）の間が切れたもの）と「藝（新字「芸」）」は全くの別字である**ので注意されたい。バラ亜綱ムクロジ目ミカン科ヘンルーダ属ヘンルーダ *Ruta graveolens*。常緑小低木。地中海沿岸地方原産。葉に山椒を少し甘くしたような香りがある。本邦には江戸時代に渡来し、葉に含まれる「シネオール」（cineole：ユーカリ（フトモモ目フトモモ科ユーカリ属 *Eucalyptus*）の精油の主成分）が通経剤・鎮痙剤・駆虫剤などに利用され、料理の香りづけにも使われていたが、ウルシのように、接触すると、かぶれるなどの毒性があるとされ、現在は殆んどそうした薬剤としては使用されていない。精油はグラッパなどの香り付けに使われている。古くは書斎・書庫を「芸室」とも称したが（日本最初の公開図書館とされる奈良末期に石上宅嗣によって平城京に設けられた「芸亭」も有名）、漢名「芸香」としては、草体を栞に使うと、本の虫食いを防ぐとされた。また、古くから「眼鏡のハーブ」と呼ばれるほど、視力を高める効果があると信ぜられていたため、古代ローマでは画家がこれを大量に食べたという（以上は主に当該ウィキに拠ったが、冒頭や一部はオリジナルに記したものである）。**最後の部分は邪視との対抗性が判る話**のように思われる。

「牛鬼吾邦に存せしこと今昔物語東鑑等に出れども」「東鑑」は既に引用して出した。「今昔物語集」のそれは、恐らく**巻第十七にある、「於但馬國古寺毘沙門伏牛頭鬼助僧語第四十二」（但馬國の古寺に於いて、毘沙門、牛頭の鬼を伏して僧を助くる語第四十二）**かと思われる。以下に電子化する。所持する複数の諸本を校合した。□は原本の欠字で、それは小学館の「日本古典文学全集」に従った。読みも小学館版を参考にした。なお、この話は典拠があり、「大日本国法華験記」（平安中期に書かれた仏教説話集。著者は比叡山の僧鎮源（伝不詳））の「中」の「第五十七　鬼の害を遁れたる持経者法師」（原本は本文ともに総て漢文表記）である。

＊

今は昔、但馬の國の□□郡の□□の郷に、一つの山寺有り。起ちて後、百餘歳を經にけり。而るに、其の寺に、鬼、來り住みて、人、久しく寄り付かず。

而る間、二人の僧、有りけり。道を行くに、其の寺の側を過ぐる間、日、既に暮れぬ。僧等、案内を知らざるに依りて、此の寺に寄りて、宿りぬ。一人の僧は、年若くして、法花の持經者也。今一人の僧は、年老いたる修行者也。夜に入りぬれば、東西に床の有るに、各々、居ぬ。

夜半に成りぬらむと思ふ程に、聞けば、壁を穿ちて、入る者、有り。

其の香、極めて臭し。
其の息、牛の鼻息を吹き懸くるに似たり。
然れども、暗ければ、其の體をば、何者と見えず。
既に入り來りて、若き僧に、懸かる。
僧、大きに恐ぢ怖れて、心を至して「法花經」を誦して、
「助け給へ。」
と念ず。
而るに［やぶちゃん注：「すると」の意。］、此の者、若き僧をば、棄てて、老いたる僧の方に寄りぬ。
鬼、僧を颯み、刻みて、忽ちに噉らふ。
老いたる僧、音を擧げて、大きに叫ぶと云へども、助くる人、無くして、遂に噉はれぬ。
若き僧は、
「老いたる僧を噉らひ畢てば、亦、我れを噉はむ事、疑ひ有らじ。」
と思ひて、逃ぐべき方、思えねば、佛壇に搔き登りて、佛の御中に交はりて［やぶちゃん注：複数の仏像の中に紛れ込んだのである。］、一の佛の御腰を抱きて、佛を念じ奉り、經を心の内に誦して、
「助け給へ。」
と念ずる時に、鬼、老いたる僧を、既に食ひ畢てて、亦、若き僧の有りつる所へ來たる。
僧、此れを聞くに、東西、思ゆる事無くして、尙、心の内に「法花經」を念じ奉る。
而る間、鬼、佛壇の前へに倒れぬ、と聞く。
其の後、音も爲ずして、止みぬ。
僧の思はく、
「此は、鬼の、『我が有り所を伺ひ知らむ』と思ひて、音を爲ずして聞くなめり。」
と思へば、彌、息・音を立てずして、只、佛の御腰を抱き奉りて、「法花經」を念じ奉りて、夜の曙くるを待つ程に、
「多くの年を過ぐす。」
と思ゆ。更に、物思えず。
辛くして、夜、曙けぬれば、先づ、我が抱き奉る佛を見れば、毘沙門天にて、在ます。
佛壇の前を見れば、牛の頭なる鬼を、三段に切り殺して置きたり。
毘沙門天の持ち給へる鉾の崎に、赤き血、付きたり。
然れば、僧、
「我を助けむが爲めに、毘沙門天の、差し殺し給へる也けり。」
と思ふに、貴く悲しき［やぶちゃん注：「悲しき」は感涙するさまである。］事、限り無し。
現はに知りぬ、此れ、「法花」の持者を加護し給ふ故也けり。
「令百由旬内　無諸衰患」の御誓、違はず。［やぶちゃん注：「令百由旬内　無諸衰患」句意は『「法華経」を奉じて心から信ずる者の周囲は遙かな彼方まで諸々の患いや災いはこれ全く無い』の意。］
其の後、僧、人鄕に走り出でて、此の事を人に告ぐれば、多くの人、集まり行きて見れば、

實(まこと)に僧の云ふが如し。

「此れ、希有の事也。」

と、口々に云ひ喤(ののし)る事、限り無し。

僧は、泣々(なくなく)、毘沙門天を禮拜(らいはい)して、其所(そのところ)を過ぎぬ。

其の後、其の國の守□の□□と云ふ人、此の事を聞きて、其の毘沙門天を□□［やぶちゃん注：ここは破損。他本「以て」とする。］奉りて、京に向へ奉りて、本尊として供養し、恭敬(くぎやう)し奉りけり。

僧は、彌(いよい)よ、「法花經」を誦して、怠る事、無かりけり、となむ、語り傳へたるとや。

＊

「羚羊（かもしか）」哺乳綱鯨偶蹄目ウシ科ヤギ亜科ヤギ族カモシカ属ニホンカモシカ *Capricornis crispus* 。本邦固有種で京都府以東の本州・四国・九州に棲息し、本州では東北地方から中部地方にかけて分布し、京都府北部・鈴鹿山脈・紀伊半島などに隔離分布し、九州では大分県・熊本県・宮崎県に分布する。されば、熊楠の謂いは問題ない。］

「ナザル」Nazar （今假りに視害と譯す）は、コックバーン氏の說に、其義邪視（「イヴル、アイ」）より廣し、乃ち何の惡意邪念なくて、若くは最も愛敬［やぶちゃん注：「あいぎやう」。］親切に、人及び有生無生の物を、心足り意滿つる迄視るにより、視られたる人物に害惡を惹起すことなり。パンジヤブ隨筆質問雜誌（前出）より要を撮で［やぶちゃん注：「つまんで」。］述べんに、コックバーン氏、印度アグラ地方にて、此迷信の原因を調査して報ずらく、人慾故意に出ざるもの多し、たとへば、眇人［やぶちゃん注：「すがめのひと」。］いかに寡欲の天稟［やぶちゃん注：「てんりん／てんぴん」。生まれつきのもの。］なりとも、双眼優麗なる人を見れば、何心なく之を羨望し、忽ち視害を双眼の人に加へて其身を損ずるに及ぶ、今、雙眼いかに美なりとも、其瞼に「カジヤル」を塗て黑汚し、或は瘢痕を眉邊に留め、又白糸を懸下して其貌を傷つけたるを見れば、之を瑕［やぶちゃん注：「きず」。］とするの念、不知不識［やぶちゃん注：「しらずしらず」。］、之を羨むの念と相剋して視害起らず、殊に「カジヤル」を付たる眼は、眼力爲に減障せられて、視害を他人に及ぼすの嫌［やぶちゃん注：「きらひ」。］を免るゝの利を兼ぬとて此地方の男女好で之を用ゆ、エジプトの婦人が「コール」粉を眼の緣に塗て黑くするも、裝飾の爲とはいへ、實は同理に基くならん、と、蓋し婦人は成女期に達せる後視害を受ず視害を他に加へ得と信ぜらるればなり、父母其兒の初めて片言いひ、又歩み出すを見て、滿足せば、必ず其兒に視害を及すを以て、額の一側、又匍匐中ならば、左足底に煙墨（「カジヤル」）を塗て之に備ふ、不具六指等の兒は視害を受る事なければ、大吉として親に悅ばるとは餘程變な事也、肥健の壯年は、瘦男の視害を防んとて、左臂に赤布を絡ひ［やぶちゃん注：「まとひ」。］、頸に靑糸を卷き付けなどし、甚だしきは其疑ひある場合に臨み、突然卒倒痙攣の眞似して、瘦男の執念を擾す［やぶちゃん注：「みだす」。］に力む［やぶちゃん注：「つとむ」。］、文人は其筆跡見事にして人に羨れん事を憂ひ、わざと一字を汚點して邪視を避く、但し巧みに仕組んで汚點せりと知れる樣では、是又人にほめらるゝの惧あり、故に一枚書き畢りて、最後の字の墨汁まだ乾かぬ中、急に之を卷きて、汚點は實に不慮の過失に出しと見するを要すとは、呆れ返つた次第と言ざるを得

ず、又布帛の模様なども、一ケ所をわざと不出來にして邪視を防ぐ、黄金珠玉は人の欲する所なれば、最も邪視を避るに功あり、小王（ラジヤ）［やぶちゃん注：ルビではない。］輩の書翰に、金箔をちらせるも、飾りとせるに非ずして、これが爲めなり、兒童が盗に遭ひ命を失う迄も、珠璣［やぶちゃん注：「しゆき」。丸い玉と角ばった玉。大小様々の美玉。］を飾れる、亦是が爲なり、凡ての海産物、殊に珊瑚、この故に重んぜられ、之を買ふ能はざる貧民は、銀の楊枝或は環を佩ぶ、又安物店に、三角或は金剛石形に金箔を切て韋［やぶちゃん注：「なめしがは」。］に貼じて［やぶちゃん注：「てふじて（ちょうじて）」。］賣る、是れ正三角形に靈妙の力ありと信ぜらるゝに出づ、甚しきは三角形の小さき羅紗袋を小兒の頸に懸けて護りとす、而して金剛石形は正三角形を二ツ底を攝して生ずるを以て、又護身の功有りとす云々、用捨箱卷上（九）二月八日、目籠を出すことをいひて、昔より目籠は鬼の懼るゝところと云習はせり、是は目籠の底の角々［やぶちゃん注：「すみずみ」。］は☆如此、晴明九字（或曰晴明の判）といふものなればなりといひ、又方相の目になぞらへ、邪氣を攘ふ事也といへりと雖ども、類を以て推すに、是れも印度あたりに、古く邪視を防ぐに用ひたるを傳習したらしく思はる（柳亭の考證に、件の日、目籠を出す江戸の風は、もと遠州三州にて節分の日出すを摸し誤る也と、東京の俗、除夜に金箔もて飾れる籠を長竿頭に掲げて戸前に樹て、鬼を追ふと、F.de Marini, `Historia et Relatione del Tunchino e del Giappone,` Roma, 1665, p. 133 に出ず、古今要覽稿卷七十一に、昔し追儺は除夜に限り行はわれしを、後世、節分の豆撒と同事と心得たるを辨ぜるを參考するに、遠參の俗も、もと東京のと同源に出でたるが如し）吾邦の事歴に關係最［やぶちゃん注：「いと」。］厚き支那に、視害及邪視の迷信の有無は、予從來指を染ざるを以て一言も出し得ず、其猓玀［やぶちゃん注：「から」。］間に邪視（Evil ege を十の九まで Evil eye の謬刊として）の信有るは、貴學會雜誌三月の分、二一六頁に於いて纔かに知り得たり、今案ずるに、歴代の本草、諸品の藥效を序して、**［やぶちゃん注：以下、底本の漢文引用は不全。初出及び「選集」を參考にしてつつ（それらにも誤りと思われる箇所がある）、正しいと思われる表記に代えた。］**狼皮辟邪、狼牙佩之辟邪、狼尾繫馬胸前辟邪氣、令馬不驚、羚羊角辟邪氣不祥、辰砂殺鬼魅、雄黄辟百邪抔ぃひ、酉陽雜俎續集八に衞公言、鵞警鬼云々孔雀辟惡交廣志に西南夷、土有異犀、三角云々王者貴其異、以爲簪、能消除凶逆と筆せる、邪といひ惡といへるは、主として邪氣の義に解せらるれども、遠き世には邪視を意味せしもあるべし、英國のサー、トマス、ブラウン（一六〇五－八二）すら、「コツカトリセ」（上出）が睨むばかりで能く人物を殺すと、人間同士觸れざるに疾を傳染し、傳鱣［やぶちゃん注：「選集」は『でんふん』と音を附すが、私は「しびれえひ」と訓じておく。］が身外に電氣を及ぼすを同似の例として、此爬蟲の眼、極微の毒分子を現出して、之に對せる人物の眼より、其腦次に其心を犯し、命を致さしむるに外ならずと謂たれば、上古の支那人、邪視と邪氣を混同したればとて怪むに足らず（Hazlitt, i. 133 參照）、其西南夷が犀角を以て凶逆を消除すといへるは、疑ひなく印度阿非利加邊に行はるゝ邪視の事と見ゆ、但し支那の古史に、孟賁［やぶちゃん注：「まうほん」。］項籍の瞋て［やぶちゃん注：「いかりて」。］恐しき伍子胥の執念深き眼盧杞［やぶちゃん注：「ろき」。］の忌はしき顔相など多く擧たるに、視害、邪視の俗傳すら見當らず、范雎［やぶちゃん注：「はんしよ」。］の列傳に、睚眦［やぶちゃん注：「がいさい」。ちょっと睨まれること。］の怨をも必

ず報ずとて、人に視らるゝを至て些細な事とせるを見れば、邪視の信餘程古く亡びて邪氣の觀念早く之に代りしを知る、貝子は、今も土耳古、アラビア、スビア等にて廣く邪視を避るに用ひられ（Elworthy, op. cit, p. 250）、吾國にも子安貝と稱し、産婦に握らせて其難を防ぐ（男色大鑑卷四第一章）是れ古希臘人が之を女神アフロジテの印しとせし如く、其形甚女陰に似たる故、最も人と鬼の邪視を避るに效ありとせるに基くならん（Otto Jahn, ``Uber einige griechischen Terrcottengefäss des archaeologischen Museums in Jena,`` Berichte über die Verhandlungen der Königlich-Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften zu Leipzig, Phhilologisch-Historische Classe, I, S. 18, Leipzig, 1853 參照）　支那に臂足類［やぶちゃん注：「ひそくるゐ」。現在の腕足類。］の介化石を石燕と呼び、産婦に握らせて平産を助け、歐州諸地に燕窠［やぶちゃん注：「えんくわ」。ツバメの巣。］中の石を持てば幸福ありといひ、竹取物語に赫耀姫、燕の子安貝をくれなん人に妻たるべしと望める抔合せ攷ふべし（予未刊の著、燕石考、師友 F. V. Dickins, `Primitive and Mediaeval Japanese Texts,` Oxford, 1906. p. 361 に抄出さる）　而して漢の朱仲作というなる相貝經に、一種の貝子を産婦に示せば流産せしむるとあるより推して、支那の古え、亦之を安産の助けとせるを知り、それから遠廻りながら、一層古え、邪視の信ありしを知る、Forlong, `Short Studies in the Science of Comparative Religions,` 1897, p. 108 に錫蘭［やぶちゃん注：「セイロン」。］暹羅［やぶちゃん注：「シヤム」。］等の佛場に、足と眼を岩に彫れるは、實は陰陽の相に形れる［やぶちゃん注：「かたどれる」。］にて、邪視の防ぎなりとあるを參するに、支那に佛仙の足跡多きは、吾邦にて門戸に元三大師の手形を貼ると共に、根源は邪視に備へたるにやあらん（予の〝Foot-print of Gods, etc.,〟 Notes and Queries, 1900 及び去年四月の東洋學藝雜誌「ダイダラホウシの足跡」參看）又酉陽雜俎卷十四に、晉の大始中、劉伯玉の妻、夫が洛水の女神の美を稱せるを恨んで水死し、後七日、夢に託して伯玉に語て、君本と神を願ふ、吾今神たるを得たりといひければ、伯玉終身復た水を渡らず、美人此津を渡る者は、皆衣を壞り［やぶちゃん注：「やぶり」。］粧を枉げて敢て濟る［やぶちゃん注：「わたる」。］、然［やぶちゃん注：「しか」。］せずんば風波暴發す、醜婦は粧飾すとも、神妬まざれば無難に渡り得、婦人此妬婦津を渡るに、風浪なき者は不器量故、水神怒らざると心得、皆な自ら形容を毀て［やぶちゃん注：「こぼちて。」］嗤笑［やぶちゃん注：「ししやう」。］を塞がざるなし、故に齊人［やぶちゃん注：「せいひと」。］の語に、欲求好婦、立在津口、婦立水傍、好醜自彰とあるも、いはゞ妬神の邪視を畏れて、貌を損ぜしに歸す、同書卷八に、百姓の間に面に青痣を戴くこと縣［やぶちゃん注：「いれずみ」。底本「點」。初出で訂した。］の如きあり難産にて妻に死なれたる夫の面に墨を點ぜるなり、かくせずんば、後妻に不利なる由言るは、矢張り死靈の邪視を怖れしに基くか、

**［やぶちゃん注：やっとここで「邪視」の全体一字下げの附記が終わる。但し、邪視の考証はまだ続く。**

『「ナザル」Nazar　（今假りに視害と譯す）』今、思い出した。二十年余り前、トルコに旅行した際に貰ったお守りが、トルコ語で「nazarboncuğu」（ナザールボンジュウ）で、今も目の前の書棚にガラス製のそれがぶら下がっていた。「邪悪な目」から保護することを目的とした伝統的なガラス製のお守りである。「nazar」は「邪悪な目」、「boncuğu」で「お守り」

を表わす。フランス語の「Nazar boncuk」のウィキを見ると、アラビア語で「nazar」は「凝視」を意味するとあり、ギリシャ語ではラテン文字転写で「Matiasma」とあった。

「コックバーン氏」下記雑誌記事に当たれないので不詳。綴りは「Cockburn」であろう。

「パンジャブ隨筆質問雑誌（前出）」（1）の冒頭部参照。

「カジャル」『煙墨（「カジャル」）』「選集」は『カジャル』と表記。ギー（インドを中心とした南アジアで古くから作られている食用に用いるバター・オイル）にココナッツオイル等のオイルから出る煤（すす）を混ぜたもの。これを指で目の下（目蓋の縁）や額に塗布する。目に爽快感が生ずるという実利的効果もあるが、子供や女性のそれは魔除けとしての目的が主である。サイト「アーユルヴェーダ」のこちらと、こちらを参照した。但し、コックバーンの熊楠の要約では、自身の持つ視害を減衰させるとあって、利他的な魔除けということになる。

『「コール」粉』古代エジプトでは硫化アンチモンや硫化鉛などを原料とした黒い粉で眉やアイラインを描いていた。これを「コール」（khol）と呼んでいた（平凡社「世界大百科事典」の「眉墨」に拠った）。

「布帛の模様なども、一ケ所をわざと不出來にして邪視を防ぐ」トルコで未婚の少女の織った買った絨毯が居間に掲げてあるが、端の縁部分にある、順に変わった楕円形の模様が、一つだけ、同じものなっている。

「小王（ラジヤ）」「選集」は『ラジャ』。ラージャ或いはラージャー（Raja・Rajah・漢音写「羅闍」）とはサンスクリット語の語彙で、「君主号」または「貴族称号」である。強大な権勢を持つラージャが、知られた「マハーラージャ（Maharaja）」である。日本語に訳せば、「王」、意訳するなら「豪族」の意である。インドのみでなく、その影響を強く受けたヒンドゥー教時代の東南アジアにも伝播し、王又は王族・貴族の称号として定着した。日本では「閻魔大王」が「閻魔羅闍」と訳されたことがある（ウィキの「ラージャ」に拠る）。

「用捨箱巻上（九）二月八日、目籠を出すことをいひて、……」以下総て（2）の私の注で原本から引用済み。

「方相の目になぞらへ、邪氣を攘ふ事也といへり」これは「用捨箱」ではなく、喜田川守貞の「近世風俗志」の記載の誤り。同じく（2）の私の「守貞の近世風俗志廿三編」注の原文を参照されたい。「除夜に金箔もて飾れる籠を長竿頭に掲げて戸前に樹て、鬼を追ふ」という図も「近世風俗志」のそれで、リンク先に掲げておいた。

「F.de Marini, `Historia et Relatione del Tunchino e del Giappone,` Roma, 1665, p. 133」南方熊楠の「本邦に於ける動物崇拜（13：鳩）」の私の注「東京で鳩を殺さしめて、キリスト教徒か否を檢定せる（Marini, `Historia del Tunchion` Roma, 1665, p. 7）」を参照。

「古今要覽稿巻七十一に、昔し追儺は除夜に限り行はわれしを、後世、節分の豆撒と同事と心得たるを辨ぜる」「古今（ここん）要覽稿」は幕命により屋代弘賢が編集した類書（百科事典）。全五百六十巻。文政四（一八二一）年から天保一三（一八四二）年の三十年をかけて完成した大著。自然・社会・人文の諸事項を分類し、その起源・歴史などを古今の文献を挙げて考証解説してある。国立国会図書館デジタルコレクションの画像を視認したが、七十一巻は「姓氏部」で、どうも巻数が違うように思われる。一応、他巻も探してみたが、諦め

た。

「猓玀」（から）は中国の少数民族の一つである彝族のこと。ウィキの「イ族」によれば、『民族名の自称は「ノス」「ラス」「ニス」「ノポス」など様々な地域によって異なった呼び方をする。中国の古典文献に登場するこの民族の民族名は「夷」「烏蛮」「羅羅」「倮倮」など多様に存在し、蔑称の「夷」が通称であったのを、中華人民共和国成立以降に同じ音である「彝」の字に統一した。彝は「祭器」転じて「道徳」などを意味する雅字。「ロロ族」という呼称もあり、かつては自称であったが現在は中国側では蔑称である。「ロロ」とは、イ族自身が先祖崇拝のために持つ小さな竹編み。当て字の「玀猓」では、部首にけものへんを付け加えるなど、多分に蔑視的な要素を含んでいる。但し、漢字を全廃したベトナム側では今日でも差別的な意味合いはなく』、『ロロ族』『と呼ばれている』とある。

「貴學會雜誌三月の分、二一六頁」「J-STAGE」の『東京人類學雜誌』明治四二（一九〇九）年三月発行の「雜錄」に載る「西支那に於ける及び其他の種族」（PDF）で、イギリスの『人類学雑誌』に発表された、A. Henry 氏の論考を、本邦の人類学・考古学の黎明期を代表する研究者の一人である鳥居龍蔵（明治三（一八七〇）年～昭和二八（一九五三）年）が和訳したもの。当該ページ（論考の最後。「15」コマ目）に僅かに、「Evil ege」はママ。

＊

巫人、Evil ege 幸福の日、幸福ならざる日等は、彼等によく信仰せらる、而して巫婆の死を招くことに就ての長き祈禱存在す、これに因て鬼は爲めに皮膚粉碎し、其肉は食はれ、呼吸を止めらる。

＊

とある。原著者はアイルランドの園芸家で中国研究家でもあったオーガスティン・ヘンリー（Augustine Henry　一八五七年～一九三〇年）と考えてよい。彼には「雲南省西部のロロ族と非漢民族に関する人類学的研究」（*Anthropological work on Lolos and non-Han Chinese of Western Yunnan*）があるからである。

「歴代の本草、諸品の藥效を序して、狼皮辟邪、狼牙佩之辟邪、狼尾繫馬胸前辟邪氣、令馬不驚、羚羊角辟邪氣不祥、辰砂殺鬼魅、雄黃辟百邪抔いひ」漢文部を訓読しておく。

＊

狼の皮は邪を辟く。狼の牙は之れを佩ぶれば、邪を辟く。狼の尾は馬の胸の前に繫がば、邪氣を辟け、馬をして驚かしめず。羚羊の角は邪氣不祥を避く。辰砂は鬼魅を殺し、雄黃は百邪を避く。

＊

これ、恐らくは李時珍の「本草綱目」辺りの諸箇所を繋げたもののように見受けられる。例えば、「狼」の記載は同書を元として記述した寺島良安の「和漢三才圖會卷第三十八　獸類　狼（おほかみ）　（ヨーロッパオオカミ・ニホンオオカミ・エゾオオカミ）」（リンク先は私の電子化注。以下同じ）の記載とよく一致する。また、「和漢三才圖會卷第三十八　獸類　麤羊（かもしか・にく）・山驢　（カモシカ・ヨツヅノレイヨウ）」にも、「角」の条の末尾に『辟邪氣不祥』とある。「辰砂殺鬼魅」は明代の医書で龔信と子の龔廷賢の著した「古今醫鑑」に載り、他でもしばしば見かけるし、「雄黃辟百邪」は同義の文字列が清の張璐作の臨

床実用本草書「本經逢原」に出る。後者は非常に古くからこれを浸した酒がそうした効果を持つことが言われていた。

「酉陽雜俎續集八に衞公言、鵞警鬼云々孔雀辟惡」原本に「衞公言鵞警鬼、鵁鶄壓火、孔雀闢惡」（衞公の言はく、「鵞は鬼を警め、鵁鶄は火を壓へ、孔雀は惡を辟く」とある。「鵁鶄」はゴイサギの異名。

「交廣志に西南夷、土有異犀、三角云々王者貴其異、以爲簪、能消除凶逆と筆せる」「交廣志」不詳。「後漢書」巻百十六「西南夷傳」の、京牢夷の条にある、唐の李賢の注に引かれている「廣志」のことと思われる。但し、「中國哲學書電子化計劃」にある複数の「後漢書」を調べたが、この文字列に出逢えなかった。そこで別に探したところ、「太平御覽」巻第七百九十一の「四夷部」の「南蠻」の冒頭「西南夷」に（訓読は自然流）、

＊

西南夷

梁祚「魏國統」曰、『西夷土有異犀。三角、夜行如大炬、火照數十歩。或時解脫、則藏於深密之處、不欲令人見之。王者貴其異、以爲簪札、消除凶逆。』。

（梁祚が「魏國統」に曰はく、『西夷の土に異犀有り。三つ角にて、夜行するに大いなる炬のごとく、火、照らすこと、數十歩。或る時、解脫せば、則ち、深密の處に藏し、人をして之れを見しむを欲せず。王者、其の異らしきを貴び、以つて簪札と爲して、凶逆を消除す。』と。）

＊

とあるのを見出せた。「梁祚」（りょうそ　四〇二年～四八九年）北魏の学者で官吏。「簪札」は笄（こうがい・かんざし）のこと。

「サー、トマス、ブラウン（一六〇五－八二）」十七世紀のイングランドの著作家サー・トーマス・ブラウン（Sir Thomas Browne　一六〇五年～一六八二年）。彼のウィキによれば、医学・宗教・科学・秘教など、さまざまな知識に基づいた著作で知られるが、特に『フランシス・ベーコンの自然史研究に影響を受け、自然界に深い興味を寄せた著作が多い。独自の文章の技巧で知られ、作品に古典や聖書の引用が散りばめられており、同時にブラウンの独特な個性が現れている。豊かで特異な散文で、簡単な観察記録から極めて装飾的な雄弁な作品まで様々な作風を操った』とある。

『「コツカトリセ」（上出）』（2）を参照。但し、そこでは熊楠は「コツカトリス」と音写している。「選集」もそう訂してある。

『傳鱭［やぶちゃん注：「選集」は『でんふん』と音を附すが、私は「しびれえひ」と訓じておく。］』軟骨魚綱板鰓亜綱シビレエイ目 Torpediniformes に属する二科十二属六十種を含むシビレエイ類。防御・捕食（一部の種群は未確認）のための発電器官を持つことで知られ、その電圧は八～二百二十ボルトに達する。タイプ種はヤマトシビレエイ科 Torpedininae 亜科ヤマトシビレエイ属 ヤマトシビレエイ *Torpedo tokionis* 。

「孟賁」（もうほん　？～紀元前三〇七年）は戦国時代の衛又は斉の出身で秦の将軍。武王に仕えた。またの名を孟説とも言う。彼のウィキによれば、『武王に仕えた任鄙・烏獲や夏育、成荊、呉の慶忌と並ぶ大力無双の勇士』『と知られ、孟賁は』、『生きた牛の角を抜く程

の力を持って』『おり、勇士を好む秦の武王に取り立てられ』て『仕えた』。しかし、紀元前三〇七年八月、『武王と洛陽に入り、武王と力比べで鼎の持ち上げを行った際、武王は脛骨を折って亡くなってしまった。その罪を問われ、孟賁は一族と共に死罪に処されたと言う』とある。

「項籍」項羽の本名。

「伍子胥の執念深き眼」司馬遷の「史記」の「列傳」巻六十六の第六　伍子胥列傳」で知られる、暗愚な春秋時代の呉王夫差に従った名臣伍子胥（？～紀元前四八四年）。佞臣であった宰相伯嚭の讒言により、自害を命ぜられた。私の好きなシークエンスで、漢文の教科書にあれば、必ずやった。よく採られていた「十八史略」版を以下に引く。

＊

夫差乃賜子胥屬鏤之劍。子胥告其家人曰、必樹吾墓檟。檟可材也。抉吾目、懸東門。以觀越兵之滅吳。乃自剄。夫差取其尸、盛以鴟夷、投之江。吳人憐之、立祠江上、命曰胥山。

＊

夫差、乃ち、子胥に屬鏤の劍を賜ふ。

子胥、其の家人に告げて曰はく、

「必ず、吾が墓に檟を樹ゑよ。檟は材とすべし。吾が目を抉りて、東門に懸けよ。以つて越兵の吳を滅ぼすを觀ん。」

と。

乃ち、自剄す。

夫差、其の尸を取り、盛るに鴟夷を以つてし、之れを江に投ず。吳人、之れを憐れみ、祠を江上に立てて、命じて「胥山」曰ふ。

＊

「屬鏤の劍」名劍の名。臣下が主君から劍を与えられるとは、「その劍を用いて自害せよ」と命ぜられたことを意味する。「檟」はキントラノオ目トウダイグサ科エノキグサ亜科エノキグサ連アカメガシワ属アカメガシワ *Mallotus japonicus* 。昔、棺桶の材料とした。ここは夫差のそれであることに注意されたい。「東門」呉の都の東の門。越は呉の東方にあった。「自剄」自分で自分の首を刎ねること。「鴟夷」馬の皮革で作った酒を入れる袋で、下品なみすぼらしいものである。「鴟」は梟、「夷」は「鵝」でペリカンのことで、袋の形が梟の腹やペリカンの嘴に似ていたところからの呼称である。「江」長江。ちなみに「河」は黄河を指す。而して十年後、子胥の予言通り、越は呉を攻めた。呉は連戦連敗し、夫差はおぞましくも和睦を乞う。越王勾践受け入れようとしたが、名臣范蠡が聞き入れなかった。

＊

夫差曰、吾無以見子胥。爲幎冒乃死。

（夫差、曰く、「吾れ、以つて子胥を見みる無し。」と、幎冒を爲りて、乃ち、死す。）

＊。

言わずもがなであるが、「無以見子胥」は「私はあの世で子胥に合わせる顔がない」の意。「幎冒」死者の顔を覆う布のこと（これ自体が死者の邪眼からの防衛装置と私は見る。なお、「鬼」という漢字は私の尊敬した故吹野安先生によれば、死者にこの幎冒を被せて取れぬよ

うに十字に紐で縛った形に基づくと説明されたのをよく思い出す）。死ぬ前に自らそれを被って自殺したのである。

「盧杞」「選集」もそうなっているが、これは盧杞（ろき）（七三四年？～七八五年）でよい。唐の徳宗に取り立てられて宰相となったが、非常な奸臣として知られる。優れた改革者であった宰相楊炎を失脚させて政務を専断し、賢能の人士を忌み遠ざけ、酷刑を濫用したので吏民の恨みを買った。「李懐光の乱」で罪を得て、新州司馬に流され、さらに吉州長史に貶された後、別に流謫された任地で没した。

「范雎」（はんしょ　？～紀元前二五五年？）は戦国時代の秦に仕えた政治家。秦の昭襄王に対して、遠交近攻策を進言して、秦の優勢を決定的なものとした。人物として知られる。ウィキの「范雎」によれば、王の信任を得て、『権力を確保した范雎は』『領地を貰』って『応侯と名乗った』。『この頃、魏では秦が韓・魏を討とうとしているとの情報を掴み、須賈』（しゅか）『を使いに出した』（彼は実は若き日、魏の中大夫であった須賈に仕えていたが、恐ろしくおぞましい扱いをされて恨みを持っていた。その辺りはリンク先を読まれたい）。『須賈が秦に来ていると知った范雎は、みすぼらしい格好をして須賈の前に現れた。須賈は范雎が生きていたことに驚き、范雎にどうしているのかと聞いた。范雎は「人に雇われて労役をしている」と答えた。范雎のみすぼらしさを哀れんだ須賈は絹の肌着を范雎に与え、「秦で宰相になっている張禄という人に会いたい」と告げた。范雎は主人が』、『つてを持っているので会わせることができると言い、自ら御者をして張禄の屋敷（すなわち自分の屋敷）へと入った。先に入った范雎がいつまでも出てこないので、須賈は門番の兵に「范雎はどうしたか」と聞くと、「あのお方は宰相の張さまである」との返事が返ってきた』。『驚いた須賈は大慌てで范雎の前で平伏し、過去の事を謝った。范雎は須賈にされたことを』挙げて『非難したが、須賈が絹の肌着を与えて同情を示したことで』、『命は助け、「魏王（安釐王』（あんきおう）『）に魏斉』（ぎせい：魏の公子で政治家）『の首を持って来いと伝えろ。でなければ大梁（魏の首都。現在の開封）を皆殺しにするぞ」と言った』。『帰国した須賈は魏斉にこのことを告げ、驚いた魏斉は趙の平原君の元へ逃げた』。『その後、范雎を推挙してくれた王稽が范雎に「自分に対して報いが無いのでは」と暗に告げた。范雎は内心不快であったが、昭襄王に言って王稽を河東（黄河の東）の長に任命した。更に鄭安平を推挙して秦の将軍にし、財産を投げ打って自分を助けてくれた人に礼をして回った。この時の范雎は、一杯の飯の恩義にも睨み付けられただけの恨み（睚眦の恨み）にも必ず報いたと言う』という部分を指す。

「貝子」（ばいし）はタカラガイ（腹足綱直腹足亜綱 Orthogastropoda Apogastropoda 下綱新生腹足上目吸腔目高腹足亜目タマキビ下目タカラガイ超科タカラガイ科 Cypraeidae のタカラガイ類）の別名。貝貨幣としても知られる。

「ヌビア」（Nubia）はエジプト南部のアスワン附近からスーダンにかけての地方の名称。古代エジプト語の「ヌブ」（金）から古代ギリシア・ローマ人がそう呼んだのが始まり。アラビア語では「ヌーバ」。ウィキの「ヌビア」で位置を確認されたい。

「Elworthy, op. cit, p. 250」イギリスの言語学者で好古家のフレデリック・トーマス・エルワージー（Frederick Thomas Elworthy　一八三〇年～一九〇七年）の「*The Evil Eye : an account of this ancient and widespread superstition.*」（邪視――この古く、且つ、広く普及した迷信に就

いての解説）。当該原本は「Internet archive」のこちらで読め、左中央部分に「cowries have always been distinct amulets against the evil eye,」とある。「cowrie」（ケリィー）が「タカラガイ」の意。

「男色大鑑」（なんしょくおおかがみ：現代仮名遣）は井原西鶴の浮世草子。貞享四（一六八七）年板行。この宝貝の安産のお守りは日本中で非常に古くから知られているものであるから、わざわざ西鶴の若衆道のそれを引くまでもない。南方熊楠はわざと面白がって（性的な話の裾野をずっと大風呂敷に開けっ広げるため）確信犯でこれを選んでいる点に気づかねばなるまい。

「Otto Jahn, ‘Über einige griechischen Terrcottengefäss des archaeologischen Museums in Jena,’ Berichte über die Verhandlungen der Königlich-Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften zu Leipzig, Phhilologisch-Historische Classe, I, S. 18, Leipzig, 1853 参照」ドイツの考古学者・文献学者で美術や音楽に関する著作もものしたオットー・ヤーン（Otto Jahn　一八一三年～一八六九年）の「イエナの考古学博物館の幾つかのギリシャのテラコッタについて」か。

「臂足類」動物界真正後生動物亜界冠輪動物上門腕足動物門 Brachiopoda に属する、一見、貝に似ているが、全く異なる（貝状部分は貝類のような体幹の左右ではなく、前後に存在する）「生きている化石」と称してもよい原始的な生物群である。本邦には舌殻綱シャミセンガイ目シャミセンガイ科シャミセンガイ属ミドリシャミセンガイ *Lingula anatina* ・ウスバシャミセンガイ *Lingula reevii* ・ドングリシャミセンガイ *Lingula rostrum* ・オオシャミセンガイ *Lingula adamsi* の四種が、シャミセンガイ目スズメガイダマシ科 Discinidae のスズメガイダマシ *Discradisca stella* ・スゲガサチョウチン *Discradisca sparselineata* の二種が棲息しているものの、彼らは潮間帯に分布するため、個体数が急激に減少しており、日本における絶滅は最早、不可避となってしまっている。化石種は非常に多く、古くは古生代カンブリア紀初期（約五億四千二百万年前）の地層からも出土している。因みに、私が電子化注を終わっている「日本その日その日」（*Japan Day by Day*：原本は一九一七年刊）の作者で、「お雇い外国人」として進化論を日本に初めて紹介し、大森貝塚を発見したエドワード・シルヴェスター・モース（Edward Sylvester Morse　一八三八年～一九二五年）は、この腕足類の研究が専門であった。

「赫耀姫」「選集」は『かぐやひめ』とルビしているが、私は清音で「かくやひめ」と読むべきであると考えている。

「燕の子安貝をくれなん人に妻たるべしと望める」かくや姫に求婚した五人の貴公子の殿（しんがり）の最もついていなかった不幸な男中納言石上麻呂（いそのかみのまろたり）。私が教師時代に作った「竹取物語」完全ダイジェスト版から、その部分を引用しておく。

＊

中納言いそのかみのまろたりは、生きた燕を殺して体内を探してみても貝が見つからないので、こりゃ、卵を産む時にいっしょに出て来るのであろうと、忠実な家臣を屋根に登らせて、燕の巣を見張らせます。しかし、人がいては燕は巣にさえ寄り付きません。ある人の言を入れて、燕が卵を産みそうな時を見計らって、人が入った大きな籠（かご）をつり上げて探ることにします。上手くその時期が来て、人に探らせますが、見つかりません。苛立ったまろた

りは、自らかごに乗ります。すると、巣に差し入れた手が何かをつかみました。「ヤッタ！こやす貝や！　はよおろさんかい！」と叫ぶ彼。その声に部下たちは慌てたのでしょうか、かごは見事に墜落し、助け起こした部下に、……「物は少しおぼゆれども、腰なん動かれぬ。されど、子安貝をふと握りたれば、うれしくおぼゆる也。まづ、紙燭（しそく）さして來（こ）。この貝、顔（かほ）、見ん。」と御髪もたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまりおける、ふる糞を握り給へるなりけり。それを見たまひて、「あな、かひなのわざや」とのたまひけるよりぞ、思ふにたがふ事をば、「かひなし」とは言ひける。ここは「貝無し」と「甲斐無し」が掛けてあるのは判りますね。恐らくはしかし、「腕（かひな）」（通常は二の腕であるが、腕全体をも指す）で糞を握ったという洒落にもなっているのかも知れません）……遂にまろたりの腰は折れてしまいました。これを聞いたかくや姫は、見舞いの手紙を送ります。まろたりは、返事にと、やっとの思いで、「かひはかく有りける物をわびはててしぬる命をすくひやはせぬ」（貝はありませんでしたが、あなたからお手紙を頂けたので、腰の骨を折った甲斐は、この通り、ありました。でも、思い悩んで死に行くこの私の命を、その「かい」ついでに、どうして結婚して救って下さろうとはなささらないのですか。）という歌を書き終えるや、息を引き取ってしまいました。……『これを聞きて、かくや姫、すこし「あはれ」と思しけり。それよりなむ、すこしうれしきことをば、「かひある」とは言ひける。』……

＊

**五人の貴公子中、最後に確かに死んでしまうのは彼だけである。正直、かくや姫、マジ、残酷だわ！**

「予未刊の著、燕石考、師友 F. V. Dickins, 'Primitive and Mediaeval Japanese Texts,' Oxford, 1906. p. 361 に抄出さる」「南方熊楠　本邦に於ける動物崇拜（14：燕）」で既注。フレデリック・ヴィクター・ディキンズ（Frederick Victor Dickins　一八三八年～一九一五年）はイギリスの日本文学研究者・翻訳家。彼のウィキによれば、当初はイギリス海軍軍医・領事館弁護士として来日し、帰国後はロンドン大学の事務局長（副学長）を務めた。初の本格的英訳とされる「百人一首」を始め、「竹取物語」・「忠臣蔵」・「方丈記」などを英訳、日本文学の海外への紹介に先駆的な役割を果たした人物として知られる。駐日イギリス大使ハリー・パークスや親日派として「日本学」の基礎を築いたアーネスト・サトウと交流があり、**南方熊楠も、熊楠が翻訳の手助けをする代わりに、イギリス留学中の経済的支援を受けるなど、深い交流があった**、とある。

「漢の朱仲作というなる相貝經」早稲田大学図書館「古典総合データベース」の大枝流芳著「貝盡（かひづくし）浦の錦」の下巻（寛延四（一七五一）年刊・PDF）の巻末に附録されてあり（短い）、その「28」コマ目二行目に（訓点を除いて示し、後にそれに従って（一部補足した）訓読した）、

＊

瞬貝使胎消勿以示孕婦赤帶通背是

（瞬貝は胎を消せしむ。以つて孕める婦に示す勿（なか）れ。赤き帶、通背せる、是れなり。）

＊

「瞬貝」の「瞬」は「瞋」と同じで「目を怒らす」の意があるから、邪眼と親和性があり、

眼のように見える紋はタカラガイの中になんぼでもある（タカラガイ自体の形が眼玉っぽい）。殻の上部に赤い筋があるとなれば、示せぬことはないが、これは中国の記載であるから、差し控える。それにしても、この江戸の貝類の博物古書、なかなか素敵！

「Forlong, `Short Studies in the Science of Comparative Religions,` 1897, p. 108」イギリスの土木技師・軍人にして比較宗教学者でもあったジェームス・ジョージ・ロッシェ・フォーロング（James George Roche Forlong　一八二四年～一九〇四年）の「比較宗教学小考」。当該部は「Internet archive」のこちらの左ページ上の以下。

＊

Most Bud or Bod rocks and symbols are marked with the euphemistic "Foot," "Eyes," or circles, as infallible charms against evil. Hence the *Prā-Bat* of Siam and similar " Sacred Feet" on the Buds of Akyāb and Ceylon, and the oval or Yoni charm on Kaiktyo.

＊

幾つかの単語がよく判らないものの、「Yoni」はリンガ（男根）である。

「元三大師」「がわんざんだいし（がんざんだいし）」と読む。私の居間の飾り棚の中に鎮座ましましている。但し、熊楠の言う「手形」というのは不審。「角大師（つのだいし）の図（参考にした同人のウィキの「角大師」の図（右側））を手形と勘違いして書いているように思われる。平安中期の天台僧良源（延喜一一（九一一）年～永観三（じんかん）（九八五）年）。「元三」は永観三年正月三日に没したことに因む呼称で、正しい諡号は「慈恵（じえ）」で大師号はないが、一般には通称の方で専ら知られる。第十八代天台座主で、延暦寺中興の祖とされる。「元三大師縁起」などの伝説によれば、良源が自ら修羅の夜叉の姿に化し、疫病神を追い払った時の像であるとされる。二本の角を持ち、骨と皮とに痩せさらばえた夜叉像と、眉毛が角のように伸びたものの二種がある（私の家を守護するそれは後者）。これは中世以降、民間に於いて「厄除け大師」などとして、独特の信仰を集めて現在に至っている。三峰の狼の御札と並ぶ私偏愛のお札である。

『予の“Foot-print of Gods, etc.,” Notes and Queries, 1900 及び去年四月の東洋學藝雜誌「ダイダラホウシの足跡」「Internet archive」で英文記事を探したが、見当たらない。ところが、幸いなことに、南方熊楠を調べておられる大和茂之氏のブログ「南方熊楠のこと、あれこれ」の『足跡関連の熊楠の文章３：「ダイダラホウシの足跡」』で電子化されていて、全文を読むことが出来る。そこに示された、「南方熊楠と『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌――`Foot-print of Gods, etc.,`から「ダイダラボウシの足跡」へ――」（PDF）も甚だ有益で、特にその第三章で英文の原記事の内容が記されてある。必見。

「酉陽雜俎巻十四に、晉の大始中、劉伯玉の妻、夫が洛水の女神の美を稱せるを恨んで水死し、……」「酉陽雜俎」（ゆうようざつそ：現代仮名遣）晩唐の官僚文人段成式（八〇三年～八六三年）撰の荒唐無稽な怪異記事を蒐集した膨大な随筆。八六〇年頃の成立。その巻十四諾皐記上（だくこうき）」の一節に（原文は「中國哲學書電子化計劃」のものを少し漢字を入れ替えた）、

＊

妒婦津、相傳言、晉大始中、劉伯玉妻段氏、字明光、性妒忌。伯玉常於妻前誦「洛神賦」、語其妻曰、「娶婦得如此、吾無憾焉。」。明光曰、「君何以水神善而欲輕我。吾死、何愁不爲水

神。」。其夜乃自沉而死。死後七日、托夢語伯玉曰、「君本願神、吾今得爲神也。」。伯玉寤而覺之、遂終身不復渡水。有婦人渡此津者、皆壞衣枉妝、然後敢濟、不爾風波暴發。醜婦雖妝飭而渡、其神亦不妒也。婦人渡河無風浪者、以爲己醜、不致水神怒。醜婦諱之、無不皆自毀形容、以塞嗤笑也。故齊人語曰、「欲求好婦、立在津口。婦立水旁、好醜自彰。」

＊

妒婦津あり。相ひ傳へて言ふ。晉の大始中、劉伯玉が妻、段氏、字は明光、性、妒忌たり。伯玉、常に妻の前に於いて「洛神賦」を誦し、其の妻に語りて曰はく、

「婦を娶るに此くのごときを得ば、吾、憾み無し。」

と。明光曰はく、

「君、何ぞ水神を以つて善として、我を輕んぜんと欲す。吾、死し、何をか愁へて水神と爲らざるや。」

と。

其の夜、乃ち、自から沉んで死す。

死後七日、夢に托して伯玉に語りて曰はく、

「君、本、神を願ふ。吾、今、神と爲るを得たり。」

と。

伯玉、寤より、之れ、覺めて、遂に、終身、復た水を渡らず。

婦人有りて此の津を渡る者は、皆、衣を壞り妝を枉め、然る後、敢へて濟る。爾ざれば、風波、暴發す。醜婦は妝ひ飭くすと雖も、渡れたり。其の神、亦、妒まざるなり。婦人の、河を渡るも風浪の無き者は、以爲らく「己の醜ければ、水神の怒を致さず。」と。醜婦、之れを諱み、皆、自から形容を毀たざる無く、以つて嗤笑はるるを塞ぐなり。故に齊人、語りて曰はく、

「好婦を求めんと欲さば、津口に立ち在れ。水旁に婦の立たば、好醜は自から彰かなり。」

と。

＊

・「妒婦津」は現在の山東省聊城市臨清市。所持する東洋文庫訳注（今村与志雄訳。**上の訓読は今村氏の現代語訳を参考にして独自に読んだものである**）の注を参考にすると、恐らく同市の西南端を南北に流れる衛河と、東からの運河が合流する附近に、この渡しはあったものと思われる。

・「晉の大始中」今村氏注に、晉代には大始、或いは太始の年号はないとされ、晉の武帝司馬炎の代に、秦始（二六五年～二七四年）があり、これか、とされる。

・「洛神賦」魏の曹植（一九二年～二三二年）の代表作の一つ。二二二年作。洛神は洛水（黄河の支流洛河の古名）の女神洛嬪。本来は伝説の帝王伏羲の娘であったが、洛水を渡渉する際に溺れて亡くなった。洛嬪の美貌を仔細歌い上げて華麗にして優雅。

「同書巻八に、百姓の間に面に青痣を戴くこと黥の如きあり……」「酉陽雜俎」の巻八の「黥」のパートの一節に（同前の仕儀）、

＊

**百姓間有面戴青志如黥。舊言婦人在草蓐亡者、以墨點其面、不爾則不利後人。**

＊

百姓、間（まま）、面（おもて）に青き志（しるし）を戴（いただ）ける有りて、黥のごとし。舊（ふる）く言ふ、「婦人の草蓐（さうじゆく）にして亡（な）くなれる者の在（あ）れば、墨を以つて、其の面に點ず。爾（しか）せざれば、則ち、後人（のちぞへ）に利あらず。」と。

＊

さても。今村氏の現代語訳を見ても、『むかしから、婦人が出産で亡くなった場合、墨でその顔にしるしをつける』。『そうしないと、後継ぎの人に不吉だから』であって、「難産にて妻に死なれたる夫の面に墨を點ぜるなり」等とは訳されていない。強いて別に訓読するなら、「婦人を草蓐にして亡くせし者、在らば」で、そういう意味にはなりそうだが、どうもそんな読み方は出来そうもない（と私は思う）。だいたいからして、後妻を迎えた男がみんな顔に大きなほくろ見たような点を描いて一生を過ごすというのは、とても考え難いことではないか？伝奇や志怪小説はかなり読んできたが、そんな面相の男の出てくるのを読んだことは一度たりともない。これは、則ち、難産で亡くなった婦人の遺体の顔に大きく「墨で点を打つ」の意であろう。恐らくは難産死（二つの魂が一つの人体内にあるというのは、霊的には非常に異常な状態である）の場合、妻の魂がこの世に遺恨を持って残り、夫が後妻を迎えると、死霊が復讐にくるといった伝承が、まず、その大元に考えることができ（これは本邦に普通に見られる風俗迷信である）、そうした墨で点を描いて醜い顔にしておくと、妻の亡霊は恥ずかしくて後妻に災難を齎すために墓から出ることが出来ない（落語の「三年目」みたようなものである）ということなのではなかろうか？　私は、これ、邪視とは、ちょっと関係がないように思うのだが、如何？］

讀者予に、何を以て日本にも邪視と視害との蹤［やぶちゃん注：「あと」。］有りといふかと問はゞ、予は答て言ん、書紀皇孫天降の條に一書を引て［やぶちゃん注：以下、底本には錯字がある。初出で訂した。］、先驅者還曰、有一神天八達之衢、其鼻長七咫背長七尺云々且口尻明耀、眼如八咫鏡、而赩然似赤酸醬也、卽遣從神往問、時有八十萬神、皆不得目勝相問、天鈿女乃露其胸乳、抑裳帶而臍下、咲噱向立、其名を問て猿田彦大神なるを知り、天鈿女復問曰、汝將先我行乎、將抑我先汝行、對曰吾先啓行云々因日發顯我者汝也、故汝可送我而致之矣とて、伊勢の狹長田五十鈴川上に送られ行くとあるは、前出埃及のラー神同様、猿田彦の邪視、八十萬神の眼の堪え能ざる所なりしを、天鈿女醜を露して之に打勝ち、之をして皇孫の一行を避て自ら遠地に竄れ［やぶちゃん注：「かくれ」。］しめたる也、今は知らず三十年ばかり前迄、紀州那賀郡岩手の大宮の祭禮、神輿渡御の間、觀者例として閉眼せしは、原と印度人と同く、神も邪視を忌むと思ひしを示す（Dubois, 'Hindu Manners,' 1897, p. 151）、而して此等にも優りて、邪視の信、曾て我邦に存ぜしを證する最好例は、近松門左の戲曲「大織冠」に、忠臣山上次官有風、逆臣入鹿と眼力を角る［やぶちゃん注：「すまへる」。］を述て、前者睥めば一雙の鴉、念力の眼に氣を打たれ落て死し、後者睨めば南門の棟瓦、作り据たる赤銅の唐獅子搖ぎ鎔け湯と成り、軒に滴り流れしは恐しかりける眼力也と作られ、予も幼時常に、不文至極なりし母が、入鹿大臣能く人を睨み殺せりと語るを聞たれば、かゝる俗話古く行はれし事なりやとおぼし、又柳原紀光の閑窻自語に、裏辻公風少將、姿艶

に、男女老若悉く之を慕ひ、參内の日を計りて街に出て待ち見る人も有けるが、漸く二十歳にて元文三年四位にも陞らず［やぶちゃん注：「のぼらず」。］死せり、戀したる人々の執念付るにやと人言りとあるは、詞こそかわれ［やぶちゃん注：ママ。］、視害に中て［やぶちゃん注：「あたりて」。］早世せりと謂るに非ずや、印度の禮、いかに壯健の友に逢ふも、之をほめず、反て卿は一向瘦せて來た、餘程惡いんぢやないか、氣の毒千萬でござる抔いふが常式にて、他人の子供、邸苑、牛羊の美にして繁榮するを見るも、其人の仕合せよきを知るも、一言なりとも譽たが最期卽座に妬念及視害の嫌疑を受くるを參考せよ（Dubois, p. 331）　さればちと故事附けならんも、西鶴の胸算用卷四に載る、祇園殿にて、除夜に詣衆左右に分れて惡口言合ひ、松浦侯の武功雜記に出る、同夜千葉寺に諸人集り、執權奉行等の邪儀を云出て哄笑せるなど、詮じ詰れば、言はるゝ者の幸福を增進せん爲にて、結局其人に邪視を避しめん爲、傷を付るものに非るを保し難しとやいはまし、然し乍ら、支那の邪氣、釋敎の執念の思想到來してより、判然たる邪視、視害の迷信は蚤く［やぶちゃん注：「はやく」。］殆ど消失しと見え、一汎俗傳に大澤主水、又佐久間盛政、人馬共に秀吉の眼光に敗られしとか（片廂後篇、懲毖錄に秀吉容貌矮陋、面色黧黑、無異表、但微覺目光閃々射光とありと聞）、和田賢秀を斬し湯淺某、其末期の眼ざしを怖れて、病付き死んだとか（太平記廿六）、眼其物よりも、專ら其人の威勢、怨念の强大なるを指せる樣也、降て［やぶちゃん注：「くだつて」。］、本町二丁目の糸屋の娘、姉が二十一妹が廿、此女二人は眼元で殺すといふ唄文句は、支那の蛾眉伐性之斧の類で、譬辭［やぶちゃん注：「ひじ」。比喩。］なり、別嬪共の爲に累をなすに足らず、是より邪視と視害を予防する本意に起れりと思はるゝ本朝風習を列示せんに、先づ嬉遊笑覽卷八云、「中古陰陽家の說行はれて、物忌を付る事有、男子は烏帽子、女房は頭に付し事、古物語に往々有、拾芥抄に、迦毘羅國に桃林有、其下に一人の鬼王有、物忌と號す、其鬼王の邊に他の鬼神寄ず、鬼王誓願して云々我名を書持ん人には、如願守護すべしと儀軌に出たりと有、此物忌二字を細紙に書て付る也、河海抄に昔は忍草に物忌を書て、御簾にも冠にもさしける、事無草と云に付て也、又柳の枝三寸許り簡［やぶちゃん注：「ふだ」。］に作りて、物忌と書て御冠の纓［やぶちゃん注：「えい」。］に付られ、又白紙に書て付らるゝ事有、是は禁中の事也と有」類聚雜要抄三「五節の童女頭物忌付事、二所に有之、左は耳の上程、右は頰後に寄て付之云々、物忌の薄樣は弘三分に切之（紅一重、短手をば後に結之）、云々」、滿佐須計裝束抄一に筆せるは之より詳にて、末に「本は物忌は左を先として［やぶちゃん注：初出も「左」だが、「選集」は『右』とする。そこで、原本に当たったところ（国立国会図書館デジタルコレクション。草書写本。ここの左頁五行目以下）、これは明らかに「左」である。］、後にも付け、三つ付たれども、此家の習にてかく二を附る也、左の前に寄て、物忌の首の差出たるを、くゝり［やぶちゃん注：「選集」は『ひねり』。原本（同前左頁八行目末）も「ひねり」である。］反して赤く見せて付る人あり云々されども今は白かしらに成りにたり云々常に人知ず、幼なからん者の額髮抔透きなどしたらんに、物忌を附ん折隱すべし、人知ず祕すべし」、是にて、或は顯著なる色を用て邪視を惹き、其力を消すこと、印度の田園に外を白く塗れる大碗を高竿に揭げて、專ら惡眼力を吸收せしむる如くせると（Dubois, p. 152）、或は前述パンジヤブの文人紙を卷て字を汚す如く、故らに［やぶちゃん注：「ことさらに」。］辟邪の具を設けたるを悟られて、更にその備えの巧なるを羨まるゝを避んとて、却

て之を目立たぬ様に裝しと、二風倶に並び行はれたるを見るべし、又笑覽卷八に、嘘る［やぶちゃん注：「はなひる」。］時結ぶ糸（産所記に長一尺三寸許と云りと）を長命縷の類ならんと云、今小兒の衣の背に守り縫とて付る是にやと云り、熊楠案ずるに、酉陽雜俎卷一、「北朝婦人五月云々又長命縷、宛轉繩、皆結爲人像帶之」とあれば大に守縫と異なる［やぶちゃん注：行末で句読点がないが、ここで文は切れている。初出は「り、」で、「選集」は『異なり。』であるが、思うに、どちらもこれは「異（ことな）れり」の脱字で文が切れていると断ずるべきで、どちらの仕儀も不全であるのに対して、底本は口語で「異（こと）なる」で終わって抵抗がないように読めてしまう、不幸中の幸いと言うべき、珍しいケースである。］守り縫此邊（紀州田邊）にて背縫ひ、背紋などいひ、衣に固著して結び得る物ならず、近世風俗志十二編に、何とも名をいはずに之を記せり、云く、「兒服に一つ身四つ身と云有、一幅を身として左右を兼るを一つ身と云、背縫目なき故に一つ身といふ、衣と異色の糸を以て縫之、或は［やぶちゃん注：図は底本はこちら（右ページ四行目）で、初出では「12」コマ目（上段中央二行）であるが、「選集」の図も、これら皆、どれも図のタッチが微妙に異なる。国立国会図書館デジタルコレクションの「近世風俗志」の当該部（同書は刊期によって巻数に異同が生じており、そこでは確かに十二巻なのだが、私の所持する岩波文庫版では巻十三である）はここ（右ページ下段後部）である。最終的に熊楠の模写したものに基づく図ではなく、原拠のものを掲げるのが最良と考え、最後の国立国会図書館デジタルコレクションの画像を最大でダウン・ロードして、以下にトリミング（汚損も除去した）して示した。次の図も同じ仕儀で挿入した。］★如此類を縫も有、又江戸は緋縮緬等の小裁［やぶちゃん注：「こだち」。］を以て袷にくけ★如此結び背に付るも有、共に定紋の座に付る也、漸［やぶちゃん注：「やうやく」。］長じて四つ身を著す、四つ身は背の縫目有故に不製之」此邊の俚傳に、一つ身は縫目なくて不祥なれば、その厭勝［やぶちゃん注：「まじなひ」。］に背紋を縫付る、菊桐松葉鶴兜などを衣と異色の絲もて、女兒十二男兒十三針にぬひ付く、又舌と稱し、長方形の切れを背紋の代りに縫ひ付け、一端自在に動き得ること舌の如くす、今は色々なれども、予の幼時は主として赤を尚べり［やぶちゃん注：「たつとべり」。］、古老謂ふ、小兒躓き倒れんとするを、神此舌を援て［やぶちゃん注：「ひきて」。］起立せしむるに便せるとは、何かで見たる、後印度の民、頭頂に長髪束を留るは、地獄に墮ちかゝる時、神に牽上もらう爲といふと同規にて、隨分面白いが、中古歐州諸名族の紋章に、諸獸舌を出す像多きは邪視を避くるため（E. Peacock, in Notes and Queries, March 14, 1908）なると支那に赤口日凶神百事不宜用（倭漢三才圖會五）抔いふを參して、背縫も邪視を防がんとて創製せりと見るが優れり、又佛教入て後、印度の神も邪視に害せらるとて、其予防具を捧ぐる風を輸入しながら、原意を忘却せりと思はるゝは庚申、淡島等の神前に美しき浮世袋を掛る事にて、印度の王公、「アラツチ」（不幸の義）とて避邪視式を行んが爲、特に妓女を蓄え、神廟にも一日二度、妓女神の爲に此式を行ふなど思合すべし、用捨箱中卷（十三）に、「友人曰、眞云の檀門の金剛橛［やぶちゃん注：「こんがうけつ」。］（四方の柱也）に掛る金剛寶幢［やぶちゃん注：「こんがうはうとう」。］と云物有、錦を以て火形を象り、三角に縫ひ、裏［やぶちゃん注：「うち」。］に香を入るゝ、又入れざるも有、浮世袋其形に似たる故、寶幢になぞらえて［やぶちゃん注：ママ。］神佛に捧るなるべしと云々」上に云える、パンジヤブで三角袋を小兒の守りとする事參看すべし、また下卷（四）

に、「昔は遊女に戯るゝを浮世狂ひと云し也、傾城の宅前には云々布簾を掛、それに遊女の名を書て、下に三角なる袋を自分の細工にして付し也、是を浮世袋と云習したる也と載せられたり、是れ匂ひ袋なるべし云々、昔は云々遊女は云々伽羅を衣に留ざるはなき様なれば、斯る餘情も成たるにや有ん、其れが云々後には香類を入れず、布簾の縫留と成しなるべし」妓女に縁多き印度神より轉化せる金剛の爲に、邪視を防がん本意もて捧げし三角袋が、吾邦遊女屋の裝飾と成たる也、推古帝の時、支那に摸して始て行える藥獵に伴ゐりてふ、續命縷卽ち藥玉（久米氏日本古代史八一五頁）は、歐州諸民も之を仲夏の式事とし、邪氣を除き古病を癒し好夢を招き牛畜を安んず（Lloyd, 'Peasant Life in Sweden,' 1870, p. 267 seqq.; Gubernatis, tom.i, p. 181 seqq.）と云ば、多分は例の邪視の用心に發端せるならん、此邊の若き男女、不慮に煤など飛び來たり、顏を汚すを戀墨と名け、艶福の兆とするも、もとは邪視、邪害の迷信より出たるにて、奴の小萬が、顏に墨ぬり、痣作りて、貌を見盡されぬ樣計ひしと、趣は歸一す、

［ここでやっと「邪視・邪害」の話が終わる。

「書紀皇孫天降の條に一書を引て」「先驅者還曰、有一神天八達之衢、其鼻長七咫背長七尺云々且口尻明耀、眼如八咫鏡、而赩然似赤酸醬也、卽遣從神往問、時有八十萬神、皆不得目勝相問、天鈿女乃露其胸乳、抑裳帶而臍下、咲噱向立、其名を問て猿田彦大神なるを知り、天鈿女復問曰、汝將先我行乎、將抑我先汝行、對曰吾先啓行云々因曰發顯我者汝也、故汝可送我而致之矣とて、伊勢の狹長田五十鈴川上に送られ行くとある」猿田彦が天孫の降臨を迎える以下のシークエンス。訓読は国立国会図書館デジタルコレクションの昭和八（一九三三）年岩波書店刊黒板勝美編「訓讀　日本書紀　上卷」を参考にした。

＊

已而且降之間。先驅者還白。有一神。居天八達之衢。其鼻長七咫。背長七尺餘。當言七尋。且口尻明耀。眼如八咫鏡、而赩然似赤酸醬也。卽遣從神往問。時有八十萬神。皆不得目勝相問。故特敕天鈿女曰。汝是目勝於人者。宜往問之。天鈿女乃露其胸乳。抑裳帶於臍下。而笑噱向立。是時、衢神問曰。天鈿女、汝爲之何故耶。對曰。天照大神之子所幸道路。有如此居之者誰也。敢問之。衢神對曰。聞天照大神之子、今當降行。故奉迎相待。吾名是猿田彦大神。時天鈿女復問曰。汝將先我行乎。將抑我先汝行乎。對曰。吾先啓行。天鈿女復問曰。汝何處到耶。皇孫何處到耶。對曰。天神之子則當到筑紫日向高千穗槌觸之峯。吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上。因曰。發顯我者汝也。故汝可以送我而致之矣。天鈿女還詣報狀。皇孫、於是、脫離天磐座。排分天八重雲。稜威道別道別、而天降之也。果如先期。皇孫則到筑紫日向高千穗槌觸之峯。其猿田彦神者。則到伊勢之狹長田五十鈴川上。

＊

已にして降り且さんとする間に、先驅者還りて白さく、

「一つの神、有り。天八達之衢に居り、其の鼻の長七咫［やぶちゃん注：手の親指と中指を開いた際の長さ単位。一メートル二十六センチメートル。］、背の長七尺餘り。當に七尋［やぶちゃん注：両手を左右に伸ばした際の長さ単位。十一～十二メートル。］と言ふべし。且、口、尻れ、明り耀れり。眼、八咫鏡のごとくにして、赩然けること、赤酸醬［やぶちゃん

注：熟した酸漿の実。」に似れり。」
と。卽ち、從の神を遣し、往いて問はしむ。
時に八十萬の神、有り。皆、目勝ち**［やぶちゃん注：相手の持つ眼力が激しく、眼が眩んでしまって相手を見ることが出来なくなることを指す。］**にて、相ひ問ふことを得ず。
故、特に天鈿女に敕して曰はく、
「汝は、是れ、人に目勝つ者なり。宜しく往いて之に問ふべし。」
と。
天鈿女、乃ち、其の胸乳を露はかきたて、裳帶を臍の下に抑れて、笑噱ひて向ひ立つ。
是の時、衢の神、問ひて曰はく、
「天鈿女、汝、之く爲るは何の故ぞや。」
と。對へて曰はく、
「天照大神の子の幸す道路に、此くのごとくにして居り有るは誰ぞ。」
と、敢へて之れを問ふ。衢の神、對へて曰はく、
「天照大神の子、今、當に降行すべしと聞きまつる。故、迎へ奉りて相ひ待つ。吾が名は、是れ、猿田彦大神。」
と。時に天鈿女、復た問ひて曰はく、
「汝、將に我に先ちて行かんや。將抑、我れ、汝に先ちて行かんや。」
と。對へて曰はく、
「吾、先ちて啓き行かむ。」
と。天鈿女、復た問ひて曰はく、
「汝は何處に到りまさんぞや。皇孫、何處に到りまさんぞや。」
と。對へて曰はく、
「天神の子は、則ち、當に筑紫の日向の高千穗の槌觸の峯に到りますべし。吾は、則ち、應に伊勢の狹長田の五十鈴の川上に到るべし。」
と。因りて曰はく、
「我を發顯しつるは、汝なり。故、汝、以つて我を送りて致るべし。」
と。
天鈿女、還りて詣で、報狀す。
皇孫、是に、天磐座を脫し離ち、天八重雲を排し分け、稜威［やぶちゃん注：神の威光。］の道別きに道別きて、天降ります。
果に先の期のごとく、皇孫、則ち、筑紫の日向の高千穗の槌觸の峯に到りまし、其の猿田彦神は、則ち、伊勢の狹長田五の十鈴の川上に到ります。

＊

「紀州那賀郡岩手の大宮の祭禮、神輿渡御の間、觀者例として閉眼せし」**和歌山県岩出市宮にある大宮神社（グーグル・マップ・データ）。和歌山県企画部企画政策局文化学術課作成の「和歌山県ふるさとアーカイブ」の「大宮神社のよみさし祭」に、地元では「よみさしまつり（齋刺祭）」「ヨミサシ」「イミサシ」と呼ばれ、十月に今も行われている。そこに、『昔は、深夜渡御の御榊（ミサキ）は、直接見てはいけない、見ると目がつぶれるといわれ、その枝をい**

**ただくと、東の枝は、上半身の、西の枝は下半身の病が治ると言われている』とあった。**

「Dubois, `Hindu Manners,' 1897, p. 151」作者はインドで布教活動に従事したフランスのカトリック宣教師ジャン・アントワーヌ・デュボア（Jean-Antoine Dubois　一七六五年～一八四八年）。

『近松門左の戯曲「大織冠」』室町後期に成立した作者未詳の幸若舞の一曲で、藤原鎌足が、八大竜王に奪われた宝珠を海士（あま）を使って取り返すという「玉取伝説」に取材したものなどを素材とし、近松門左衛門が書いた浄瑠璃「大織冠」（歴史的仮名遣「たいしよくわん」。正徳元（一七一一）年大坂竹本座初演）。鎌足の蘇我入鹿討伐に玉取伝説を配して脚色してある。

**第一部の終曲部で、サイト「音曲の司」内のこちら（PDF。「有朋堂文庫　近松浄瑠璃集　下」（昭和五（一九三〇）年刊）の当該外題全篇）の「一一」から「一二」頁で当該部が読めるる。**

「柳原紀光の閑窻自語」江戸時代中・後期の公卿柳原紀光（やなぎわらのりみつ／もとみつ　延享三（一七四六）年～寛政一二（一八〇〇）年）の随筆（成立は寛政五～九年）。ネットで写本を見つけ、探してみたが、当該話は見つけられなかったものの、この本、かなりの量の怪奇談を載せており、なかなか面白そう。

「裏辻公風少將」正五位下右近衛少将であった羽林家の当主裏辻公風（享保四（一七一九）年～元文三（一七三八）年）。事実、確かに享年二十歳で若死にしている。

「西鶴の胸算用卷四に載る、……」井原西鶴作の全二十章の短編から成る浮世草子町人物の代表作の一つ「世間胸算用（せけんむねさんよう）」。元禄五（一六九二）年に京の板行。当該部は巻四の「一　闇の夜のわる口」の一節。岩波古典文学大系版と新潮日本古典集成を参考に、正字で示す。

＊

又都の祇薗殿に、大年の夜、「けづりかけの神事」とて、諸人詣でける。神前のともし火、くらふして、たがひに人の見えぬとき、參りの老若男女、左右にたちわかれ、惡口のさまざま云ひがちに、それはそれは、腹かゝへる事也。

「おのれはな、三ケ日の内に餅が喉につまつて、鳥部野へ葬禮するわいやい。」

「おどれは又、人賣（ひとうり）の請（うけ）でな、同罪に粟田口へ馬にのつて行わいやい。」「おのれが女房はな、元日に氣がちがふて、子を井戸へ、はめおるぞ。」

「おのれはな、火の車でつれにきてな、鬼のかうのものになりをるわい。」

「おのれが父は、町の番太をしたやつぢや。」

「おのれがかゝは、寺の大こく［やぶちゃん注：坊主の隠し妻。］のはてぢや。」

「おのれが弟はな、衒云（かたりいひ）の挾箱（はさみばこ）もちじや。」

「おのれが伯母は子おろし屋をしをるわい。」

「おのれが姉は、襠（きやふ）［やぶちゃん注：腰巻。］せずに味曾買ひに行くとて、道でころびをるわいやい。」

いづれ口がましう、何やかや取まぜていふ事、つきず。中にも廿七、八なる若い男、人にすぐれて口拍子よく、何人出ても云すくめられ、後には相手になるもの、なし。時にひだりの方の松の木の陰より、

「そこなおとこよ、正月布子（ぬのこ）［やぶちゃん注：晴着用の木綿の綿入れ。］したものとおなじやうに、口をきくな。見れば此寒きに、綿入着ずに何を申ぞ。」

と、すいりやうに云ひけるに、自然と此男が肝にこたへ、返す言葉もなくて、大勢の中へかくれて、一度にどつと笑はれける。

＊

この「けづりかけの神事」というのは、現在の八坂神社の新年の行事。新潮版の松原秀江氏の頭注によれば、『おけら祭とも。大晦日の夜、子の刻に神前以外のすべての灯を消し、参詣人は暗闇の中でお互に悪口を言い合い、丑の刻になると、係の者が読経』し、『東西の欄に立て』置かれてあった各『六本の削掛の木を焼き、煙の』立つ方向から、丹波・近江『両国の豊凶を占う』神事を指す。但し、現在は悪口を言い合うそれは行われていないようで、実につまらぬ。

「松浦侯の武功雑記」肥前平戸藩第四代藩主松浦鎮信（重信・天祥）が記した天正から元和年間に活躍した諸将の武勲を記した武辺咄集。元禄九（一六九六）年頃成立。恐らくは現在の千葉市中央区千葉寺町にある真言宗海上山千葉寺（せんようじ／ちばでら：グーグル・マップ・データ）の特異行事である。同寺のウィキによれば、『開始年代は不明であるが、江戸時代には名の知れた行事として千葉寺で行われていた奇習』で、『類似の風習が「悪口祭」「悪態祭」として全国各地に存在する』。『毎年の大晦日の深夜から元日の未明まで、面や頬かむりなど素性が分からないように仮装をして千葉寺に集い、権力者の不正や人の良くない行いなどを罵り合い、笑って年を越すという風習』で、『徳川家康が黙認して「声の目安箱」として意見を取り入れていたともされている』。『この習俗を題材にし』て『小林一茶が』、

千葉寺や隅に子どもゝむり笑ひ

の一句を残している（文政六（一八二三）年の句帳所収）。『千葉笑い復興会・千葉笑い実行委員会ではこの伝統ある地域文化を継承するために、笑い納めや初笑いとして』二〇一〇年『度より活動している』とある。

「大澤主水」「太閤記」によれば、美濃の斉藤家の忠臣大澤主水（もんど）正之。信長を刺殺せんとして、秀吉と槍の大試合をしたとされるが、怪しい。

「佐久間盛政」（天文二三（一五五四）年〜天正一一（一五八三）年）は織田信長及びその嫡孫秀信の家臣。官途及び通称は玄蕃允。勇猛さから「鬼玄蕃」と称された。ウィキの「佐久間盛政」によれば、『尾張国御器所（現名古屋市昭和区御器所）に生まれ』、『「身長六尺」』（約一メートル八十二センチメートル）『とあり（『佐久間軍記』）、数値の真偽は別としてかなりの巨漢であったことが窺える』。永禄一一（一五六八）年の「観音寺城の戦い」『（対六角承禎）で初陣』し、いろいろな戦闘に参加して『戦功を挙げた』。天正三（一五七五）年、『叔父柴田勝家が越前一国を与えられた際にその与力に配され、柴田軍の先鋒を務めた』。『以後、北陸の対一向一揆戦などで際立った戦功を挙げ、織田信長から感状を賜った』。天正四年には『加賀一向一揆勢に奪取された大聖寺城の救援に成功』し、翌五年に『越後の上杉謙信が南下してきた際には』、『信長の命令で加賀に派遣され、御幸塚（現在の石川県小松市）に砦を築いて在番した』。天正八（一五八〇）年、『加賀一向一揆の尾山御坊陥落により、加賀金沢城の初代の城主となり、加賀半国の支配権を与えられた』。しかし、『柴田勝家は清洲会議以後、羽柴秀吉との対立を深め』、天正一一（一五八三）年の「賤ヶ岳の戦い」で激突し、一時は賤ヶ岳砦を陥落手前まで追い詰めたが、丹羽長秀の増援と秀吉の「美濃大返し」

に『よって盛政は敵中に孤立してし』まい、『前田利家らの部隊が撤退したため、盛政の部隊と勝家の本陣の連絡が断たれた』。『結果的に勝家軍は秀吉軍に大敗し、盛政は再起を図って加賀国に落ち延びようとした』が、『落ち延びる途上、盛政は越前府中付近の中村の山中で郷民に捕らえられた』。『命運の尽きたことを悟った盛政は、自ら直接秀吉に対面したいので引き渡すよう言った（盛政を引き渡した郷民は直ちに処刑された）。引き渡されたとき、浅野長政に「鬼玄蕃とも言われたあなたが、なぜ敗れて自害しなかったのか」と愚弄されたが、「源頼朝公は大庭景親に敗れたとき、木の洞に隠れて逃げ延び、後に大事を成したではないか」と言い返し、周囲をうならせたという』。『秀吉は盛政の武勇を買って』、『九州平定後に肥後一国を与えるので家臣になれと強く誘った。しかし盛政は信長や勝家から受けた大恩を忘れることはできず、秀吉の好意を感謝しながらも』、『「生を得て秀吉殿を見れば、私はきっと貴方を討ちましょう。いっそ死罪を申し付けて下さい」と願った。秀吉は盛政の説得を諦め、その心情を賞賛して』、『せめて武士の名誉である切腹を命じたが、盛政は敗軍の将として処刑される事を望んだ。そのため、秀吉に「願わくば、車に乗せ、縄目を受けている様を上下の者に見物させ、一条の辻より下京へ引き回されればありがたい。そうなれば秀吉殿の威光も天下に響き渡りましょう」と述べた』という。『秀吉はその願いを聞き届けて盛政に小袖二重を贈るが、盛政は紋柄と仕立てが気に入らず、「死に衣装は戦場での大指物のように、思い切り目立ったほうがいい。あれこそ盛政ぞと言われて死にたい」と大紋を染め抜いた紅色の広袖に裏は紅梅をあしらった小袖を所望し、秀吉は「最後まで武辺の心を忘れぬ者よ。よしよし」と語って希望通りの新小袖』二『組を与えた』。『盛政は秀吉により京市中を車に乗せられて引き回されたが、その際に「年は三十、世に聞こえたる鬼玄蕃を見んと、貴賤上下馬車道によこたわり、男女ちまたに立ち並びこれを見る。盛政睨み廻し行く」とある（『佐久間軍記』）。その後、宇治・槙島に連行されて同地で斬首された』。『秀吉は盛政の武辺を最後まで惜しみ、せめて武士らしく切腹させようと連行中に密かに短刀を渡す手配もしたが、盛政は拒否して従容と死に臨んだという』。**私は大の秀吉嫌いで盛政好き**である。

「片廂」（かたびさし）「後篇」国学者斎藤彦麻呂の考証随筆（嘉永六（一八五三）年自序）。古来の制度・風俗・古言古歌その他の考証的記事に及ぶも、学問的な内容を扱った条は杜撰な説が多いとされ、後に岡本俊孝によって「片廂糾謬」が書かれるに至っている。吉川弘文館随筆大成版を参考に、漢字を恣意的に正字化して示す。

＊

○秀吉公の御目のひかり

秀古公いまだ木下藤吉といふ時に、大澤主水と鎗合せし給ひしに、主水、眼くらみて、向ふ事、能はず。うつぶしたる事、又、羽柴筑前守の時に、志豆が嶽にて、佐久間玄蕃允をにらみ給へば、人馬ともに、まばゆくて、跡じさりしつる事など、人のしりたる事なり。「懲毖錄」［やぶちゃん注：誤字誤読。次注参照。］に、『秀吉、容貌矮陋、面色、黧黑、無二異表一［やぶちゃん注「いへう、なし」：］）。但、微、覺二目光閃々射一レ人［やぶちゃん注：「めのひかり、ひかひかとして、ひとをいるを、おぼふ」。］』とあり。

＊

「懲毖錄」（ちょうひろく：現代仮名遣）は十七世紀前後に書かれた李氏朝鮮の史書で、著者は同王朝の宰相柳成龍。「文禄・慶長の役」を記録したもの。

「和田賢秀を斬し湯淺某、其末期の眼ざしを怖れて、病付き死んだとか（太平記廿六）」「楠正行最期の事」の一節。和田賢秀（和田賢快　？～正平三／貞和四（一三四八）年）は楠木正成の甥。「四條畷の戦い」で敗れ、正行らが自刃した後、高師直の陣に潜入していたところを、嘗て味方であった湯浅本宮太郎左衛門に討たれた。討死の際、敵将の首に噛み付き、睨んで放さず、本宮太郎左衛門はそれが元で病んで死んだとされており、土地の人々は賢秀の霊のことを「歯噛様」「歯神様」として祭っている。

＊

和田新發意［やぶちゃん注：賢秀の異名。］如何して紛れたりけん、師直が兵の中に交りて、武藏守［やぶちゃん注：師直。］に刺し違へて死なんと近付きけるを、この程、河内より降參したりける湯淺本宮太郎左衛門と言ひける者、これを見知つて、和田が後へ立ち回り、諸膝切つて倒るるところを、走ろ寄つて首を搔かんとするに、和田新發意、朱をそそぎたる如くなる大の眼を見開いて、湯淺本宮を、

「ちやう」

ど、睨む。その眼、終に塞がずして、湯淺に首をぞ取られける。大剛の者に睨まれて、湯淺、臆してやありけん、其日より、病ひつきて、身心、惱亂しけるが、仰けば、和田が怒りたる顏、天に見え、俯けば、新發意が睨める眼、地に見へて、怨靈、五體を責めしかば、軍散じて七日と申すに、湯淺、あがき死にぞ死にける。

＊

「本町二丁目の糸屋の娘、姉が二十一妹が廿、此女二人は眼元で殺すといふ唄文句」サイト「大垣つれづれ」の『星巖は「糸屋の娘」で起承転結を説いたか』が本邦域内での考証として面白い。

「蛾眉伐性之斧」（ばつせいのふ（ばっせいのふ））は「呂氏春秋」（戦国末の秦の呂不韋が食客を集めて共同編纂させた書。紀元前二三九年完成。天文暦学・音楽理論・農学理論などの論説が多く見られ、自然科学史上、重要な書物とされる）の「孟春紀」の「本生」が出典。

＊

貴富而不知道、適足以爲患、不如貧賤。貧賤之致物也難、雖欲過之奚由。出則以車、入則以輦、務以自佚、命之曰招蹙之機。肥肉厚酒、務以自彊、命之曰爛腸之食。靡曼皓齒、鄭、衛之音、務以自樂、命之曰、「伐性之斧」。三患者、貴富之所致也。故古之人有不肯貴富者矣。由重生故也、非夸以名也、爲其實也。則此論之不可不察也。

＊

「伐性」は「人としての心身を害すること」で、熊楠が「蛾眉」と添えた如く、女性・淫乱なる音楽に溺れたり、たまたま起こったに過ぎない良い出来事に過度に期待する悪弊を諌めたもの。

「嬉遊笑覽卷八云、……」国学者喜多村信節（天明三（一七八三）年～安政三（一八五六）年）の代表作。諸書から江戸の風俗習慣や歌舞音曲などを中心に社会全般の記事を集めて二

十八項目に分類叙述した十二巻付録一巻からなる随筆で、文政一三（一八三〇）年の成立。以下、当該部（「忌諱」のパート内）を所持する岩波文庫版第四巻（長谷川強他校注・二〇〇九年刊・新字）を基礎データとし、国立国会図書館デジタルコレクションの成光館出版部昭和七（一九三二）年刊の同書の下巻（正字）の当該部で校訂し、読点・記号等を変更・追加し、一部の漢文脈を訓読した。また、送り仮名を増やして、歴史的仮名遣で推定の読みを添えた。熊楠の引用は省略がある。

＊

中古陰陽家の説、行はれて、物いみを付る事あり。男子は烏帽子、女房は頭に付けし事、古物語に往々あり（又、物いみとて、家に籠り居て深くつゝしみてある事もあり）「拾芥抄」、「物忌」の條に、『迦毘羅國に桃林あり、其の下に一人の鬼王あり、「物忌」と號す。其の鬼王の邊に、他の鬼神、寄らず。鬼王、誓願して、「六趣有情を利益す云々、我名を書きて持たむ人には、願のごとく、守護すべし」と、「儀軌」に出たり』と有る。この「物忌」二字を細紙に書きて著くる也。「河海抄」に、『昔は忍草に「物忌」を書きて、御簾にも冠にもさしける也。「事無草」と云ふに就いて也。又、柳の枝、三寸許り、簡に作りて、「物忌」と書きて御冠の纓に著けられ、又、白紙に書きて付けらるゝこと有り。是は、禁中の事也』といへり。

＊

・「拾芥抄」（しゅうかいしょう）鎌倉中期に原型が成立し、南北朝期に改訂編纂された類書（百科事典）。

・「迦毘羅國」現在のインド・ネパール国境付近に存在した国で、釈迦の出身地として知られる。

・「六趣有情」六道を輪廻せねばならない有情の衆生。

・「儀軌」バラモン教・仏教などに於いて、神々や仏・菩薩を対象に行う儀式や祭祀の法式を規定した書。

・「河海抄」室町初期に四辻善成が著した「源氏物語」の注釈書。

・「纓」冠の付属具で、背後の中央に垂らす部分。古くは、髻を入れて巾子（「こんじ」の撥音無表記。冠の頂上後部に高く突き出ている部分。髻を入れ、その根元に笄を挿して冠が落ちないようにするもの。元来は、これをつけてから、幞頭（上部前頭を覆う部分）を被ったが、平安中期以後は冠の一部として一体型の作り付けとなった）の根を引き締めた紐の余りを後ろに垂らした。後には、幅広く長い形に作って巾子の背面の纓壺［やぶちゃん注：頭部全体を平面的に覆う部分の後頭部の中央にある纓を差し込むための溝状の部分。］に差し込んで付けた。時代により、形状が異なる。なお、**平凡社「選集」はこれに「よう」と振っているが、「瓔」と誤ったものか、甚だしい誤りである。**

「類聚雑要抄三……」平安時代に書かれた寝殿造の室礼と調度を記した古文献「類聚雑要抄」は摂関家家司であった藤原親隆が久安二（一一四六）年頃に作成したと推定されているもの。国立国会図書館デジタルコレクションの写本画像のこちらで当該部（「五節の童女頭物忌付事、二所に有之、左は耳の上程、右は頬後に寄て付之云々、物忌の薄様は弘三分に切之（紅一重、短手をば後に結之）、云々」）が読める。「一　同頭物忌付事」

の条の抄出である。

「滿佐須計裝束抄」（まさすけしょうぞくしょう：現代仮名遣）は平安後期の貴族で有職家であった源雅亮（生没年不詳：醍醐源氏。従五位下伊賀守。平清盛の長男重盛と次男基盛とは親戚筋）作の仮名文の平安装束の有職故実書。甲斐守・源雅職の子。本文内注で原本写本にリンクさせた。

「笑覽卷八に、嚏」（はなひ）「る時結ぶ糸（産所記に長一尺三寸許と云りと）を長命縷」（ちやうめいる）「の類ならんと云」「方術」のパートの冒頭。同前の国立国会図書館デジタルコレクションのここ。「嚏の頌」の中の一節。かなり長いが、重要なので、同前の仕儀で引く。但し、漢文部は底本通り、白文で示し、後に岩波版の訓点を参考に訓読したものを添えた。なお、万葉仮名訓読部は切れ目が判らなくなるので、ルビ化していない。

＊

「萬葉集」十一、「眉根（マユネ）掻鼻火（カキハナビ）紐解待八方（ヒモトキマテリヤモ）何時毛（イツカモ）將見蹟（ミント）戀來吾乎（コヒコシワレヲ）」。集中、はなひることをよめる歌、この外にもあり。「詩」、「邶風」に、「寤言不寐、願言則嚏」（寤て言ふに寐れず、願ひて言ふに、則ち、嚏る）といへると同じくて、人におもはるれば、はなひる、となり。後には、其意、うつりて、我事を後言［やぶちゃん注：陰口を言う。］ものあれば、嚏るとて、わろき事とす。又、天竺には、もとよりよからぬ事とするにや、「四分律」に、「世尊嚏。諸比丘呪願言長壽」（世尊、嚏す。諸比丘、呪願して「長壽」と言ふ）とあり。「古今集」雜、「出て行む人をとゞめむよしなきにとなりのかたにはなもひぬかな」。「袖中抄」に、「はなひる事、いかにもよからぬこと也。年の始に鼻ひりつれば、祝ひごとをいひて、祝ふ也。されば、人の所へゆかんずる初めに、隣の人、嚏らむを聞きても、くせぐぐせしからん人は、立ちどまるべき也」と有り。「枕草子」、「にくき心の、はなひて誦文する人云々」。又、宮に初めて參りたる頃といふ條、「物など仰られて、我をば思ふやと問はせ給ふ御いらへに、いかにかは、と、けいするにあはせて、臺盤所のかたに、はなを、たかく、ひたれば、『あな、心う。そらごとするなりけり』云々（こは、清少が我をおもふといひしは僞ならん、隣に、はなをひつれば、との御戯なり）。わが願ふこと・おもふことある時、人のはなひるだに、そのこと、かなはず、とする習ひ、と、みゆ。「徒然草」、くさめくの段、「文段抄」に云、「乳母がたのならはしに、其兒の嚏る時、かたはらの人、『はなを合す』とて、又、『くさめ』といふ也。もし、はなを合せざれば、其嚏したる兒に害あり、といひ習はせり。其故に、今も、守り刀などに、「鼻の糸」とて、青き糸をつけて、兒の嚏る時、かのはなを合す代りに、其糸をむすぶなり」とあり。伊勢守貞陸が「産所記」、『御はなのむすび糸、長さ一尺三寸許り、かずをとるもの也」と、云へり。糸は「長命縷」の類ひなるべし**［やぶちゃん注：岩波版には熊楠が引くこの大事な『糸は「長命縷」の類ひなるべし』の部分がない。］**。今、小兒の衣の背に、「守り縫」とて付くる、是にや。「拾芥抄」、『嚏時頌、休息萬命急々如律令』（嚏る時の頌、「休息萬命急々如律令（きふそくばんめいきふきふによりつれい）」と有り。この頌文は、佛家に「呪願言長壽」と、いへるより出しなるべし。「袖中抄」に「四分律」の文を引きて、「今俗、正月元日、若早旦嚏、卽稱曰千秋萬歲急々如律令是緣也。何只在元日哉、尋常禱之」（今、俗、正月元日若しくは早旦、嚏れば、卽ち、稱して、「千秋萬歲急々如律令」

と曰ふ。是れ、縁なり。何ぞ、只だ、元日のみに在らんや、尋常、之れを禱る）といへり。

「帝京景物略」、『正月元旦五鼓時、不臥而嚏。々則急起、或不及衣曰、臥嚏者病也。不臥而語言、或戸外呼、則不應曰、呼者鬼也云々』（正月元旦の五鼓時、臥しては嚏せざるに、嚏するときは、則ち、急ぎ、起きて、或いは、衣るに及ばすして曰はく、「臥して嚏る者、病ひなり。臥して語り言せず」と。或いは戸外に呼ぶあらば、則ち、應ぜずして曰はく、「呼ぶ者、鬼なり。」と［**やぶちゃん注：私はこの辺り、岩波の訓点（送り仮名）に大いに不審を持っているそのままでは意味が通るように到底思えないからである。されば、かなり自由に訓じた（後も同じ）。なお、以下、岩波では別な引用がかなり入る。岩波を少しだけ使用してジョイントする。**］）。今兒女など、くさめをすれば、「徳萬歳」といひ、下賤は「くそをくらへ」といへり。「休息萬命」のひゞきに似たるも、おかし。「寛永發句帳」、『くつさめや徳萬歳のはなの春』（志滿）。「鷹筑波集」、『人々や我身の上をそしるらんひたものはなをひる刀鍛冶」「嬾眞子錄」に、『俗說以人嚏噴、爲人說。此蓋古語也。終風之詩曰云々。漢藝文志、雜占十八家三百一十卷内、嚏耳鳴雜占十六卷。然則嚏耳鳴皆有吉凶。今則此術亡矣』（俗說に「以つて、人、嚏り噴れば、人、說を爲す」と。此れ、蓋し、古語なり。終風の詩に曰はく、云々。漢の「藝文志」に、「雜占十八家」三百一十卷の内、嚏・耳鳴の雜占は十六卷あり。然れば、則ち、嚏・耳鳴、皆、吉凶有り。今、則ち、此の術、亡ぶ）。」

＊

以上の私の引用に語注を附し始めると、またまたエンドレスになるので附さない。悪しからず。熊楠の引用している部分の以下の二つだけに注する。

・「産所記」は室町中期から戦国にかけての有職家にして山城守護で政所執事を務めた伊勢貞陸（さだみち　寛正四（一四六三）年～永正一八（一五二一）年）が書いた「産所之記」。産所で用いられる用具についての解説書。「国文学資料館」の写本の最後（三行目）に引用された原文が見える。

・「長命縷」古代中国以来、端午に飾る五色の糸飾りで、長寿を祈る祭具である。本邦の祝儀の薬玉は、その流れを汲んだものである。

『酉陽雜俎巻一、「北朝婦人五月云々又長命縷、宛轉繩、皆結爲人像帶之」』巻一「禮異」の一条に、

＊

北朝の婦人、常以冬至日進履襪及靴。正月進箕帚長生花、立春進春書、以青繪爲※、刻龍像銜之、或爲蝦蟆。五月進五時圖、五時花、施帳之上。是日又進長命縷、宛轉繩、皆結爲人像帶之。夏至日進扇及粉脂囊、皆有辭。

［やぶちゃん注：「※」＝「革」＋「識」の（つくり）のみ。］

＊

北朝の婦人、常に冬至の日を以つて、履襪［やぶちゃん注：現在の靴下相当のもの。］及び鞾［やぶちゃん注：靴。］を進ず。正月は箕帚［やぶちゃん注：塵取りと帚。］と長生花［やぶちゃん注：花持ちのよい生花のアレンジ物の謂いと思われる。］を進ず。立春は春書［やぶちゃん注：春を言祝いだ色紙であろう。］を進じ、以つて青繪で※を爲り［やぶちゃん注：この一句は意味不明。］、龍の像を刻みて、之れを銜はす。或いは蝦蟆に爲る。五月は、

「五時圖」・「五時花」を進じ、帳の上に施す。是の日、又、長命縷・宛轉繩を進ず。皆、人の像に爲りて結び、之れを帶ぶ。夏至の日は、扇及び粉脂の囊を進ず。皆、辭有り。

＊

段成式の書いた「酉陽雜俎」は晩唐の作品であるが（八六〇年）、**これはずっと前代の隋の前の南北朝期の記録を引っ張り出して言っている特異点の記載であることに注意する必要がある。**則ち、少なくとも、**ここの書かれた習俗は、同書の完成の遙か二百八十年も前の、中国北部の習俗の古記録である**ということである。**熊楠が「大に」日本の「守縫」（まもりりぬひ）「と」中国のそれは「異なる」と言う時、その記載の時間差を理解しているようには、私には思われないし、況や、読者も無批判に「中国と日本は全然、違うね」と思うのは、これまた、早計であると私は思うからである。**

「近世風俗志」（2）で既出既注。

「兒服に一つ身四つ身と云有」幼児用の「一つ身」とは乳児から二歳位までの幼児用の着物で、並幅の布を使い、背縫いをぜずに仕上げる。特に乳児の間は肩揚げや腰揚げをせずに衿に付け紐をして、帯の代わりにする。手を動かし始めたら肩揚げを施し、歩き始めればm腰揚げをする。「四つ身」は四歳から十二歳までで汎用された子供用の着物で、並幅の反物の、身長の四倍の長さの布を裁断して作る。子供の成長に合わせ、肩揚げ・腰揚げにより、丈や幅を調整する。七歳程度までの子供であれば、一反の布から長着と羽織の対を作ること可能である。なお、他に「三つ身」と呼ぶ両者の中間型のもの（二歳から四歳の子供用着物）があり、これは並幅の反物の半反を使って仕立てる。乳児用の「一つ身」に比して、全体のバランスが取れているものの、身幅が、多少、狭いので、着られる期間は短くなる。この「三つ身」は三歳児の祝い着として用いられることが多い（以上はサイト「着物買取ガイド」のこちらの解説を参照した）。

「E. Peacock, in Notes and Queries, March 14, 1908」「Internet archive」の原本のここの左ページ右下から右ページ左上にある EDWARD PEACOCK 氏の投稿「THE EVIL EYE IN ITALY」に書かれてある。

「支那に赤口日凶神百事不宜用（倭漢三才圖會五）」巻第五「暦占類」の「赤口日（しやつくにち）」。所持する原本から電子化する。図は阿呆臭いので（私は一切の占いに関心がないため）、早稲田大学図書館「古典総合データベース」の原本の当該部の画像をリンクさせるに留める。

＊

按赤口日凶神百事不宜用而三才圖會亦不出圖今以圖備便覽順廻六宮照月正與七相合【余月亦如圖】三月上起朔日逆廻六宮照日則知

＊

按ずるに、赤口日は、凶神にして、百事。用ふるに宜しからず。「三才圖會」にも亦、圖を出ださず、今、圖を以つて便覽に備ふ。順に六宮を廻して、月を照す［やぶちゃん注：各月に照応させるの意。］。正と七とは相ひ合す【余月、亦、圖のごとし。】。三月の上に、朔日を起し、逆に六宮を廻る。日と照らせば、則ち、知る。

＊

「庚申」庚申信仰に基づく庚申堂や庚申塔。
「淡島」淡島神。和歌山県和歌山市加太の淡嶋神社を総本社とする全国の淡島神社や淡路神社の祭神。神仏習合期の名残から同神を祀る淡島堂を持つ寺も各地にある。参照したウィキの「淡島神」によれば、『婦人病治癒を始めとして安産・子授け、裁縫の上達、人形供養など、女性に関するあらゆることに霊験のある神とされ、江戸時代には淡島願人（あわしまがんにん）と呼ばれる人々が淡島神の人形を祀った厨子を背負い、淡島明神の神徳を説いて廻った』ことから、『信仰が全国に広がった』。しかし、明治の神仏分離によって、多くの神社では祭神を少彦名神などに勝手に置き変えられてある。こういう子供でさえ鼻白む馬鹿げたことをするから、近代神道はダメだ。
「浮世袋」近世初期に流行したもの（袋）で、絹を三角に縫って中に綿を入れ、上の角（かど）に糸を附けたもの。遊女屋の暖簾に飾として附けたり、匂い袋にしたり、針仕事の縁起物などにしたが、早くに廃れてしまい、後には単なる子供の玩具となった。正月の屠蘇袋はこれに由来するとされる。
『印度の王公、「アラツチ」（不幸の義）』不詳。識者の御教授を乞う。
「用捨箱中巻（十三）に、「友人曰、眞云の檀門の金剛橛（四方の柱也）に掛る金剛寶幢と云物有、錦を以て火形を象り、三角に縫ひ、裏に香を入るゝ、又入れざるも有、浮世袋其形に似たる故、寶幢になぞらえて神佛に捧るなるべしと云々」上に云える」「用捨箱」は（2）で既出既注。早稲田大学図書館「古典総合データベース」のこちらの原本の「地」（中巻・PDF）の「七色賣（なないろうり）」（この前の部分も庚申信仰との関係があって非常に興味深い）の最後の「18」コマ目八行目以下に出現する。また、**同コマの二～四行目の部分には、中目黒（私は大学時代そこに三年下宿した）の庚申塔の青面金剛（原本には「青面金剛」で「かうしん」とルビしてある）の石像が狭苦しい雨覆いに入れられてあるものに、「浮世袋にくゝり、猿を釣たるが納めありしを十年ばかり前に実たり」とあって、案外、この記載が熊楠の前述の謂いの本来の震源地ではないかと読める（熊楠の本篇執筆時には庚申信仰も淡島信仰も神社合祀に向けて急速に廃れていたからである。或いは、それに大反対者として立ち向かった彼にして、これは言っておくべき信仰の形だったのかも知れない）。**
『下巻（四）に、「昔は遊女に戯るゝを浮世狂ひと云し也、傾城の宅前には云々布簾を掛、それに遊女の名を書て、下に三角なる袋を自分の細工にして付し也、是を浮世袋と云習したる也と載せられたり、是れ匂ひ袋なるべし云々、昔は云々遊女は云々伽羅を衣に留ざるはなき様なれば、斯る餘情も成たるにや有ん、其れが云々後には香類を入れず、布簾の縫留と成しなるべし」同前の下巻で「8」コマ目に、「四　蚊帳に香袋を掛」の条の「9」コマ目に、

＊

「赤鳥の巻」に大嶋求馬の説なりとて、「昔は、遊女にたはるゝを『浮世狂ひ』と云ひしなり。傾城の宅前には柳を二本植て横手をゆひ［やぶちゃん注：籬を拵えることか。］、布簾をかけ、それに遊女の名を書て、下に三角なる袋を、自分の細工にして付しなり。是を『浮世袋』といひならはしたるなり」といふ事を載られたり。是、「匂袋」なるべし。風にあふつて［やぶちゃん注：「煽つて」。煽られて。］自然、香を散さん料なれば、蚊帳へ掛るも同事

のやうにおもえる。昔は太夫ととなへし遊女は更なり、格子などいひて、それに次者(つぐ)も伽羅(きやら)を衣(きぬ)に留(とめ)ざるはなきさまなれば、かゝる餘情(よぜい)もなしたるにやあらん。其れが彼誰袖(かのたがそで)の如く、後には香類(かうるゐ)を入れず、布簾(のうれん)の縫留(ぬひとめ)となりしなるべし。

＊

とある。

「推古帝の時、支那に摸して始て行える藥獵に伴ゐりてふ、續命縷卽ち藥玉（久米氏日本古代史八一五頁）」元佐賀藩士で近代日本の歴史学における先駆者である久米邦武（天保一〇（一八三九）年～昭和六（一九三一）年：明治政府に出仕して、明治四（一八七一）年の特命全権大使岩倉使節団の一員として欧米を視察、一年九ヶ月後に帰国して太政官吏員となり、独力で視察報告書を執筆。明治一一（一八七八）年、四十歳の時、全百巻から成る「特命全権大使　米欧回覧実記」を編集、太政官の修史館に所属して「大日本編年史」などの国史の編纂に尽力した。明治二一（一八八八）年、帝国大学教授兼臨時編年史編纂委員に就任したが、明治二十五年に雑誌『史海』に転載した論文「神道ハ祭天ノ古俗」の内容が問題となり、両職を辞任した。三年後、大隈重信の招きで、東京専門学校（現在の早稲田大学）で教壇に立ち、大正一一（一九二二）年の退職まで、歴史学者として日本古代史や古文書学を講じた）が明治三八（一九〇五）年に早稲田大学出版部から刊行した「日本古代史」。国立国会図書館デジタルコレクションの画像で当該部が読める。視認して以下に示した。

＊

物部氏大連敗滅し、蘇我大臣一派の改府となり、法興寺を建立したるを第一着として、多年潛養したる禮制を興隆し、二十餘年を經て隋使韓使の接待にて略成功しければ、十九年五月五日に兎田野の藥獵を擧行したり。其時諸臣の服色は冠色に隨ひ冠に髻華を着け、德は金、仁は豹尾、禮以下は鳥尾を用ゐ、雞鳴に藤原上池に集まり、黎明を以て兎田【郡の足立村】に往く。栗田細目前部領たり、額田部比羅夫後部領たり。重五の藥獵は荆楚歳時記に、五月五日、雞未レ鳴時、采艾似二人形一者、攬而取レ之、用レ多有レ驗、是日競採二雜藥一とあれば、支那中部に居住する南人種(クスダマ)の風俗にして、日本にも早く行はれたるべし、後世菖蒲船(ショウブフネ)を献ずる例は是に起る。又、藥玉は延喜式に出づ、藤原明衡往來に、今朝自二或所一、給二藥玉一流一、作以二百草之花一、貫以二五色之縷一、模二草蟲形一、棲二其花房一、芳艶之美、有レ興有レ感、古人云、此日懸二續命縷一、則益二人命一、とある、續命縷は卽ち藥玉にて、是も藥獵より起りたる物なり。集解に太平御覽田夏正曰、五月、此月畜レ藥、蠲二除毒氣一とあれど、夏小正には畜蘭［やぶちゃん注：フジバカマのことか。］とあり、傳に爲二沐浴一とある。蘭湯は北部の俗にて畜藥は南部の俗なり、大平御覽に畜藥の文あるとは疑はし。是まで貴族尙武の習氣は、山野の獸獵を最快樂の事となし、男女相會して肉を割て宴飲したる風俗は浸潤の久しき、止むべからざるものあらん。佛敎は殺生を戒しめ、慈悲を宗とす、欽明帝の時に醫藥曆筮を佛敎の前驅となして智識を聞き、三寶の崇敬始まり、天王寺は敬田の外に施藥療病悲田の四院にて成る等、傳道の初め僧徒の民衆に心を竭す［やぶちゃん注：「つくす」。］信切なりと謂べし。是に於て藥獵を始めて山野に會集し、藥草を採て鳥獸獵に代たるは、亦野民麁暴の風を去りて禮文溫和の品行を誘くの意なり、毎年々五月五日に藥獵を行ふこと是より例となれり。

＊

「Lloyd, 'Peasant Life in Sweden,' 1870, p. 267」作者はイギリス（ウェールズ）生まれでスウェーデンに二十年以上住んだナチュラリストのルウェリン・ロイド（Llewelyn Lloyd　一七九二年〜一八七六年）。主にスカンジナビア地方の民俗習慣・農民生活及びその自然（特に鳥類学と狼）についての叙述が多い。

「奴の小萬が、顔に墨ぬり、痣作りて、貌を見盡されぬ様計ひし」浪華の女侠客「奴の小万」（生没年不詳（亨和三（一八〇三）年没とも））。大阪長堀の豪商三好家の娘「お雪」で、婿取り娘であったが、望みあって二十歳の時、長局［やぶちゃん注：宮中や江戸城大奥などで、長い一棟の中を幾つもの局（女房の部屋）に仕切った住まい。また、そこに住む女房をも指す。］に奉公する女祐筆となったが、父の死去にあって、禁中を去って、遺産を相続し、「お亀」と「お岩」という召使を抱えて、「女伊達」となり、その侠気を以って知られた。後に尼となって「正慶」と号し、「関白秀次二百年忌大追善」を天王寺で営み、折からの俄雨には雨傘五千本を集めて、参詣人を濡らさせなかったという。その居を「月江庵」と称し、生前はそこの門頭に棺桶を掛け、人を集めては宴を催し、また、遺産金を「京都大仏」に喜捨して、徳川家を憚ることなく、「豊太閤の冥福を修する」と触れるなど、その奇行で世間を大いに驚かせた（以上はウィキの「奴の小万」に拠った）。］

［やぶちゃん注：以下冒頭のページ数は出口米吉の論文（前のリンクは私の電子化）の以下の当該譚の初出ページ（PDFの「7」コマ目上段）を指す。そこで出口は「鬼車鳥」のことを、民間の国学者で狂歌師・随筆作者であった梅園静廬（明和二（一七六五）年〜嘉永元（一八四八）年：和漢の書を読破してその博識を謳われた）の「梅園日記」から引いている。「日本古典籍ビューア」のこちらの「七草」に「鬼車鳥」が語られてある。以下に電子化しておく。句読点や記号を打ち、漢文部は訓読し、推定で一部の読みや送り仮名を添えた。

＊

七草　十五

「世説故事苑」に七草を搥つ事、「事文類聚」に歳時記を引きて曰はく、『正月七日、鬼車鳥の度ること多し、家〻、門を搥ち、戸を打ち、燈燭を滅し、之れを禳ふ。和俗、七種の菜を打つ唱に、「唐土の鳥、日本の鳥、渡らぬさきに」と云へるは、此の鬼車鳥を忌む意なり。板を打ち鳴すは、鬼車鳥、止まらざるやうに禳ふなり』といへり。按ずるに、此の説、是なり。「桐火桶」【定家卿の作と稱す】に、『正月七日、七草をたゝくに、七づゝ、七度、四十九、たゝく也。七草は七星なり。四十九たゝくは、七曜・九曜・廿八宿・五星合せて、四十九の星をまつる也。唐土の鳥と日本の鳥と、わたらぬさきに、七草なづな、手につみいれて、亢觜斗張』とあり。「亢觜斗張」は、廿八宿の中の星の名なり。【また、「旅宿問答」に、『七日の七草は、天に在る七星、地に在る七草』とあり。】星の名を書きて、鬼車鳥の類の夭鳥［やぶちゃん注：妖鳥。］を逐事は、「周禮」の「秋官」に、『哲族氏、夭鳥の巣を覆ひ掌ちて、方を以つて【注に「方は版なり」と。】十日の號・十有二辰の號・十有二月の號、十有二歳之號・二十有八星の號を書き、【注に「角より軫に至る」と。［やぶちゃん注：星座の位置情報を指す。］】其の巣の上に縣れば、則ち、之れ、去れり』と云へり。夭鳥は鬼車の類ひなり。元の陳友仁が序ある

無名氏の「周禮集說」に、『劉氏曰はく、「夭鳥は陰陽の邪氣の生ずる所、故に、妖怪、人間をして不祥せんと欲し、夜、則ち、飛騰し、至る所、害を爲す。鬼車の類のごとき、皆、是れなり」』【「書錄解題」に、『「周禮中義」八卷、祠部員外郎長樂劉彝執中撰』とあり。劉氏は、これにや。】と見えたり。三善爲康の「掌中歷」に、永久三年【「三年」の二字、「拾芥抄」に據りて補ふ。】七月の比、都鄙に鵺ありしに、十日・十二辰・十二月・十二歳・廿八星の號を、方に書きて、懸けたる事、見えたれば、こゝにも「周禮」の說、行れたるを知るべし。後世の書にも、「淸異錄」に、『梟は見聞く者、必ず殃禍に罹る。急に梟に向ひ、連〇て唾る、十三口。然る後、靜坐し、北斗を存すること、一時許り、禳ふべし。また、「埤雅」の「釋鳥」に、『傳へ曰ふ、「梟、星の名を避く」』と。これ亦、星の惡鳥を禳ふ事を知るべし。彼の鳥、夜中、飛行すといへる故に、六日の夜より、七日の朝まで、七草を打つなり。「七草雙紙」に、『七草を柳の木の盤に載せて、玉椿の枝にて、六日の酉の時に芹をうち、戌の時に薺（なづな）、亥の時にごげう、子の時にたびらこ、丑の時に佛の座、寅の時に鈴菜、卯の時にすゞしろをうちて、辰の時に七草を合せて、東の方より、岩井の水をむすびあげて、「若水」と名づけ、此水にて、はゝが鳥［やぶちゃん注：「はくが鳥」かも知れぬ。］かも知れぬ。孰れにせよ不詳だが、流れからは、鬼車鳥を指している。鬼車鳥は姑獲鳥の別名とされることも多く、さすれば「うぶめ」は「産女」と書き、これは「母が鳥」と親和性があると言えるように思う。］のわたらぬさきに、服するならば、一時に十年づゝの齡をへかへり［やぶちゃん注：「經返り」で、時間が戻る・若返ることであろう。］、七時には七十年のとしを忽に若くなりて』云々、此の「はゝが鳥」の事は、いふにもたらぬ作りごとなれど、今も、六日の酉の時よりたゝく也。【亦、根芹の謠にも云へり】「桐火桶」に、『七度たゝく』とある、證とすべし。

＊］

（一四一頁）（鬼車、小兒を害する事）酉陽雜俎十六に云、鬼車鳥、相傳此鳥昔有十首、能收人魂、一首爲犬所噬、秦中天陰有時聲、聲如力車鳴、或言是水鷄過也、水鷄［やぶちゃん注：「すいけい」。何故、「くひな」と読まないかは、後注を参照されたい。］は Vanellus cristatus Mey. et Woif. (Möllendorff,ﾐ The Vertebrata of the Province of Chichi;ﾐ The Journal of the North China Branch of the Royal Asiaic Society, New Series XI, Shanghai,1877, p. 97) 其鳴聲怪きより斯る訛語を生ぜしこと、吾邦の鵺［やぶちゃん注：「ぬえ」。］の如きにや、錫蘭［やぶちゃん注：「セイロン」。］にも似たる話有るは Knox,`An Historical Relation of the Island of Ceylon,` 1681, p. 78 に、島の高地部に魔鳴く事有り、低地には無し、其聲、犬の鋭く吠るが如く、忽ち一方にあると思へば、忽ち他方に聞ゆること常の鳥類に異なる、故に魔の所行たるを知る、此聲聞ゆるすぐ又後に、王人を刑死するを奇とす、犬之を聽ば戰慄す、シンガリー人之を聞く毎に、惡言を放て罵れば、暫く止め遠く去るものゝ如しと云り、一三三〇年頃の書 Fr.Jordanus,`Mirabilia descripta,` trans.Yule, 1863, p. 37 にも、錫蘭にて夜屢ば魔人と語ると云り、ユール之を其地に只今所謂魔鳥に充て、褐色の梟なりと云れども、ミトフヲードは、魔鳥は夜鷹の一種、其聲童子が經せられて息絶ゆるまで苦吟する如く、悽愴極りて聞くに堪ずといひ、テンネントは、村近く之を聞ば不祥の兆とて、民之を惱むと云り、(Tennent,`Sketches of Natural History of Ceylon,` 1861, pp.246-8)、而して古え錫蘭を虐治せし兄王キスツアカン、

鬼車と同く十頭ありしと云は奇遇頗る妙也」（James Low,in the Jouynal of the lndian Archipelago and Eastern Asia, vol.iv. p. 203, Singapore, 1850）、ミンチラ人が信するハンツ、サブロ（獵師鬼）は、湖及川の淵に棲み、體黑く、黑口と名たる三犬を隨ふ、此犬人家に近けば、住人は木片を打ち大噪ぎしてこれを驅り、小兒を緊く抱いて其去るを俟つ、マレー人が傳ふるソコム鬼、行くときは「ゞリゞリ」鳥先づ飛ぶ、此鳥、家に近くとき、家内聲限りに喧呼して之を厭す［やぶちゃん注：「まじなひす」。］（Ibid.,vol. v , p. 308）、是れ鬼車と事は酷だ［やぶちゃん注：「はなはだ」。］相肖たり［やぶちゃん注：「にたり」。］、姑獲が事は、倭漢三才圖會に本草綱目を引て、一名夜行遊女、又天帝少女鬼神類也云々荆州多有之、衣毛爲鳥、脫毛爲女人、是産婦死後化作、故胸前有兩乳、喜取人子、養爲己子、凡有小兒家、不可夜露衣物、此鳥夜啼、以血點之爲誌、兒輙病云々謂之無辜癎也、蓋此鳥純雌無雄、七八月夜飛害人、而して著者寺島氏之を西國海濱に多しとふ「ウブメドリ」に宛て、九州人謂云、小雨闇夜、不時有出、其所居必有燐火、遙視之狀如鷗而大、鳴聲亦似鷗、能變爲婦、携子、遇人則請負子於人、怕之辿則有憎寒、壯熱甚至死者、强剛者諾負之、則無害、將近人家、乃背輕而無物、未聞畿内近國狐狸之外如此者と述ぶ、吾國には例無き事なれど、實際梟族が嬰兒を殺すことと世にあると見る［やぶちゃん注：ママ。］ Hasselquist, op. cit., p. 196 に據ばシリアの鵂鶹［やぶちゃん注：「きうりう」。底本では「鶹」の部分は活字が無く、「◀」というひどい処理となっている（右ページ五行目）。初出・選集に従ったが、「鶹」の（くん）は「留」が正しい。］ Strix otus 貪戾［やぶちゃん注：「たんれい」。欲深かにして人の道に背くこと。］にして、夜窻を閉るを遺れたる［やぶちゃん注：「わすれたる」。］に乘じ、室に人て孩子［やぶちゃん注：「をさなご」。］を殺す、婦女之を怖るゝこと甚し、梟の巣に時として羽毛を混ぜる異樣の塊物あるを G. White, `The Natural History and Antiquities of Selborne` に記せるを見れば、其成分等は別に研究する事として、兎に角倭漢共、梟が土を化して其子と成す（陸佃爾雅新義一七、古歌にも「梟の暖め土に毛がはえて、昔の情今の寇也」）と云るに、核子［やぶちゃん注：「たね」。］なきに非ず、鳥の形色を以て容易に雌雄を別つ可らざるや多し、故に一種の夜鳥、胸前の斑紋兩乳に似て、多少女人の相有るを純雌無雄とするも尤もにて（歐人「ヂュゴン」を遠望して海女となし Tennent, p. 68 兎の陰部異常なるより悉く兩性を兼ぬとし C. de Pauw, `Recherches Philosophiques sur les Americaines,` Cleves, 1772, p. 92 異物志、靈猫一體、自爲陰陽と謂ふ抔見合すべし）、之に件の鵂鶹嬰兒を食ふ事、土梟粕塊爲兒の語抔を和して、姑獲養人子の迷信を生ぜるやらん、邦土により、鳥が毛羽を人家中庭に落し、兒の衣中に置く位の事は屢なるべく、家外に露せる衣布、忽ち黴菌等を生じて、血點に酷似せる斑を生ずるは予も親く見たり、夜啼點血爲誌の語も、爪哇［やぶちゃん注：「ジャワ」。］に、男女の魑魅、檳榔噬し［やぶちゃん注：「かみし」。］赤唾を人の衣に塗り汚す（Ratzel, `History of Mankind,` trans. Butler, 1896, vol. i, p. 474）といふも之に基くならん、兎に角、支那の鳥類の精査遂られん日、必ず此誕［やぶちゃん注：「はなし」。］の由來を明知すべしと信ぜらる、ダイヤック人、カミヤック魔、鳥の如く飛で孕婦を害し子生まるゝを妨げ、クロアー魔は、胸の正中に一乳房のみ有り、兒産まるゝや否、來て其頸を摑み、之を不具にすと信ぜるも似た事なり（T. F. Beeker, “ The Mythology of the Dyaks,” The Journal of the lndian Archipelago and Eastern Asia, vol. iii, pp. 106, 113, 1849）、而して、鬼物が人の子を隱し養ひ、或は之を不具に

し、或は醜くし、或は痴にするは此他例多し、蘇格蘭［やぶちゃん注：「スコットランド」。］等のフユヤリース希臘のネレイヅ（Hazlitt, vol.ⅰ, p.102 ； Bent, p. 14）、本邦の天狗（老媼茶話十七章、著聞集アコ法師の事）等也、惟ふに［やぶちゃん注：「おもふに」。］婦女が産褥に苦むは、所謂宍食た［やぶちゃん注：「ししくふた」。］報いで、誰を怨みん様なしとは申せ、人間繁殖てふ大義務の爲に粉骨するものなれば、たとひ事遂ずとも、其社會の爲に盡すの功は、たしかに燦爛たる勳章を値す、以是、苗氏コラヴンバスクの諸民、産毎に夫「クーヴード」して、妻と苦樂を俱にするの意を示し、北ボルネヲには、産死の女、極樂え［やぶちゃん注：ママ。］直ぐ通りとす（Ratzel, ii, p.479）、但し男の身は苦まずして女のみ生死の境に出入すとは、至て割の悪い儀なれば、之が爲に命を殞せる［やぶちゃん注：「おとせる」。］者姑獲となり、「ウブメドリ」となり、啾々として夜哭し、他の安く子を擧たる婦人を羨んで、其母子に禍せんと欲すとは、理の詰んだ所も有る也、パンジヤブにて産死の女、チユレル魔となり、顔は女ながら甚怖しく、乳長くして肩上にかゝげ、反踵黒衣、長くて黒き兩牙あり、廢壘墓塚に住み、小兒を食ふ（Panjab Notes and Queries, vol. i, note 334）と傳え［やぶちゃん注：ママ。］、安南にて、吾兒を續け亡ひ、第六兒産んとて死せる女、白衣にして樹上に死兒を抱き、他の産室に入て流産せしむ（Landes, "Notes sur less Mœurs et Superstitions Populaires des Annamites," Cochinchine Francaise, vol.ⅰ, p. 448, Saigon, 1880）と信ず、吾國又古くより産女靈の迷信ありしは、今昔物語卷十三、平季武之に値ふ［やぶちゃん注：「あふ」。］話あり、倭漢三才圖會卷六十七、鎌倉産女寶塔の談あり、耳袋中編に、産後死せる女、人に預たる嬰兒を抱きに來りし事を載す、肥後の人に聞けば、其地に「安からう」といふ怪あり、産婦の靈にして、雨夜に安かろうと呼ぶとこは難産を心配せし執念の殘りしと云ふ意か、蒼鷺など夜燐光を放つを、上に引ける倭漢三才圖會の文とくらぶるに、何にか、九州には夜燐光有て鳴聲宜しからぬ鳥あるを、産死の女靈に附會して「うぶめ」鳥の話を生ぜるにや有ん、小兒の衣類、何なりとも戸外に遺るゝときは、夜其兒安眠せず、又それに鳥糞掛るときは、出世を妨ぐとは、此邊にもいふことにして Bent, op.cit, p. 181 にも希臘のシキノス島にて、夜戸外に乾せし衣は、香爐にて薫べし［やぶちゃん注：「ふすべし」。］後ならでは、決して産婦と嬰兒に着せず、此島濕氣甚ければ、全く無稽の冗談に非じ、と云り、［やぶちゃん注：底本はここで珍しく改行されている。これは初出でも同じである。但し、次の頭の字下げはご覧の通りないし、話として、ここで敢えて改行すべき理由も、私は見出せない。敢えて言うなら、話が夜泣きの 咒（まじない） に少しずれるからであろう。パートとしては独立しているわけではないので、電子化は一緒にする。］

此邊にて小兒夜驚き啼くを防がんとて、今も玄米を撒く人あり、豆粒樣とて、甲冑着たる小き者來り襲ふが米を畏れて去ると也、昔よりの風と見えて、今昔物語二十七卷三十章［やぶちゃん注：底本は「卷十四十七章」であるが、全くの誤認であるので、「選集」で訂した。］に、「今は昔、ある人方違え［やぶちゃん注：ママ。］に、下京邊に幼兒を具して行けり、其家に靈有しを彼人は知ざりけり、幼兒の枕の上に火を近くとぼして、側に二三人計り寢たり、乳母は目をさまして、兒に乳を含めて居たりけるに、夜半計りに塗籠の戸を細目に開て、長［やぶちゃん注：「たけ」。］五寸許の男の裝束したるが、馬に乘て十人計り、枕の邊を渡りければ、乳母怖しと思乍ら、打撒［やぶちゃん注：「うちまき」。］の米を摑んで擲懸［やぶ

ちゃん注：「なげかけ」」けるに、此渡る者共颯と［やぶちゃん注：「さと」。］散て失けり、打撒の米毎に血付けり、幼き兒どもの邊りには、必打まきを置事也となん、語り傳たると也」と見ゆ、御伽草子の「一寸法師」に、一寸法師「或時みつ物のうちまきとり、茶袋に入れ、姫君の臥しておはしましけるに［やぶちゃん注：底本「おはじましける」。初出で訂した。］、謀［やぶちゃん注：「はかりごと」。］を運らし［やぶちゃん注：「めぐらし」。］、姫君の御口にぬる」ことあり、みつ物の打ちまきとは、姫君の父の領分より收むる貢米の落散たるをいひしにて、今俗にいふ「つゝを」米を指すか、然ば、米を打ちまきと云に、「つゝを」米と鬼に擲ち［やぶちゃん注：「なげうち」。］撒く二原意有りと思はる、豆穀を擲て鬼魅を奔らす事 Frazaer, 'Golden Bough' 其他に、例多く擧げ、理由をも辨じたればこゝに繰り返さず、

［やぶちゃん注：「酉陽雜俎十六に云、鬼車鳥、相傳此鳥昔有十首、能收人魂、一首爲犬所噬、秦中天陰有時聲、聲如力車鳴、或言是水鷄過也」原文はもっと続く。

＊

鬼車鳥、相傳此鳥昔有十首、能收人魂、一首爲犬所噬。秦中天陰、有時有聲、聲如力車鳴、或言是水雞過也。

「白澤圖」謂之蒼鸆、帝嚳書、謂之逆鶬、夫子、子夏所見。寶歴中、國子四門助教史迥語成式、嘗見裴瑜所注「爾雅」言、鶬糜鴰是九頭鳥也。

＊

鬼車鳥、相ひ傳ふ、「此の鳥、昔、十首有り、能く人の魂を收す。一首、犬に噬まれたり。秦中、天、陰れば、時、有りて、聲、有り、聲、力車の鳴るがごとし」と。或いは是れ、「水雞の過ぐるを言ふなり」と。

「白澤圖」は、之れを「蒼鸆」と謂ふ。帝嚳の書は、之れを「逆鶬」と謂ふ。夫子［やぶちゃん注：孔子。］、子夏と見らる。寶歴［やぶちゃん注：八二五年～八二六年。中唐末期。］中、國子四門助教史たる迥、成式［やぶちゃん注：筆者段成式。］に語るに、『嘗つて見し裴瑜の注せる「爾雅」に言ふに、「鶬は糜鴰、是れ、九頭の鳥なり」と』と。

＊

ここに出る「白澤圖」の「白澤」は聖獣の名。人語を操り、森羅万象に精通する。麒麟・鳳凰同様、有徳の君子ある時のみ姿を現すという。一般には、牛若しくは獅子のような獣体で、人面にして顎髭を蓄え、顔に三個、胴体に六個の眼、頭部に二本、胴体に四本の角を持つとする。三皇五帝の一人、医薬の祖とされる黄帝が東方巡行した折り、白澤に遭遇、白澤は黄帝に「精気が凝って物体化し、遊離した魂が変成したものはこの世に一万千五百二十種ある」と教え、その妖異鬼神について詳述、黄帝がこれと白澤の姿を部下に書き取らせたものを「白澤圖」という（偽書以外の何物でもない）。因みに、本邦では江戸時代、この白澤の図像なるものは、旅行者の護符やコロリ（コレラ）等の疫病退散の呪いとして、甚だ流行した。

さて。私は実はこの十の頭（但し、一つは犬に食われて欠損しているか）を持つという如何にも中国大陸然とした過剰なハイブリッド妖鳥に、ある種の呆れを感じ（多けりゃ怖い的な物量至上主義はアメリカ軍と同じで心底、馬鹿にしたくなるのである）、あまり注する気が起こらないでいる。しかし、それでは今までのやっぱりマニアックになってしまった注と比

して、ここのバランスが悪くなるので、やはり、注せずんばならずなのである。

まず、熊楠に物申したいのは、この「酉陽雜俎」に出る「水雞」は鳥のクイナ（鳥綱ツル目クイナ科クイナ属クイナ *Rallus aquaticus* 或いはそれに似た同じ水辺にいる水鳥。次注参照）なんぞではないということである。「水」の中にいる「雞」（にわとり）のような味のする蛙のことである。則ち、この部分は、俗伝の中には「鬼車鳥なんていやしないよ！　蛙が鳴いて通り過ぎたのを化鳥の声と思っただけさ！」という否定論も含まれているということなのである（と私は読む、ということである）。

「鬼車鳥」及びそれと同類と思われる鳥の他の漢籍記載は、概ね、以上と変わらない。所持する東洋文庫訳注（今村与志雄訳。一九八一年刊。上の訓読は今村氏の現代語訳を参考にして独自に読んだものである）の注によれば、他の特異点は出口米吉のかの論文にも「梅園日記」の孫引きの形で引かれてある「北戸録」（「酉陽雜俎」の作者段成式の甥段公路の作）の「孔雀媒」記載で（原文全文を「中國哲學書電子化計劃」から丸ごと引いておく。但し、同書の影印画像で視認して電子化されたそれを敢えて字を正しておいた。下線は私が附した）、

＊

孔雀媒

雷羅數州收孔雀雛養之使極馴擾致於山野間以物絆足傍施網羅伺野孔雀至卽倒網掩之擧無遺者或生折翠羽以珠刀毛編爲簾子拂子之屬粲然可觀眞神禽也【又後魏書龜茲國孔雀羣飛山谷間人取養而食之字乳如鷄鶩其王家恒千餘隻】一說孔雀不【必疋】偶但音影相接便有孕如白鴞雄雌相視則孕或日雄鳴上風雌鳴下風亦孕見博物志【又淮南八公相鵠經曰復百六十年變止雌雄相視目睛不轉而孕千六百年形定也又稽聖賦豪豕自爲雌雄缺鼻曾無牝牡卽雌兔舐雄而孕是矣】又周書曰成王時方人獻孔鳥方亦戎別名山海經南方孔鳥郭璞注孔雀也宋紀曰孝武大明五年有郡獻白孔雀爲瑞者噫象以齒而焚麝因香而死今孔雀亦以羽毛爲累得不悲夫愚按說文曰率鳥者繫生鳥以來之名曰䍃字林音由今獵師有䍃也淮南萬畢術曰鴟鵂致鳥注云取鴟鵂折其大羽絆其兩足以爲媒張羅其旁衆鳥聚矣博物志又云鵂鶹休【留鳥】一名鴟鵂晝日無所見夜則目至明人截手爪棄露地此鳥夜至人家拾取視之則知有吉凶凶者輒更鳴其家有殃也莊子云鴟鵂夜撮蚤察毫末晝出冥目而不見丘山言性殊也陳藏器引五行書除手爪埋之戸內恐爲此鳥所得其鵂鶹卽姑獲鬼車鴞鵬類也姑獲玄中記云夜飛晝藏一名天帝少女一名夜行遊女一名隱飛好取人小兒食之今時小兒之衣不欲夜露者爲此物愛以血點其衣爲誌卽取小兒也又云衣毛爲鳥脫毛為爲女人昔豫章男子見田中有六七女人不知是鳥扶匐往先得其所解毛卽藏之卽往就諸鳥各走取毛衣飛去一鳥獨不去男子取爲婦生三女其母後使女問父知衣在積稻下得之衣而飛去後以衣迎三女兒得衣亦飛去鬼車一名鬼鳥今猶九首能入人屋收魂氣爲犬所噬一首常下血滴人家則凶荊楚歲時記夜聞之捩狗耳言其畏狗也白澤圖云昔孔子子夏所見故歌之其圖九首今呼爲九頭鳥也毛詩義疏曰鴞大如鳩惡聲鳥入人家凶其肉甚美可爲炙漢供御物各隨其時唯鴞冬夏施之以美也禮內則曰鴞胖莊子云見彈求鴞炙陳藏器又云古人重其炙尙肥美也又按說文曰梟不孝鳥至日捕梟磔之如淳曰漢使東郡送梟五月五日作梟羹賜百官以其惡鳥故食之愚謂古人尙鴞炙是意欲滅其族非爲其美也又淮南萬畢術甑瓦止梟鳴取破甑向梟抵之輒自止也

＊

で、「毛詩義疏」（恐らく「隨志」の引用）には、鬼車鳥と同類と考えられる鴞（きょう）は鳩ぐらいの

大きさで、『悪い声を出す。人家に入ると、凶である』としながらも、『その肉は、たいへん美味で、焼肉にしてよい』と俄然、実在する鳥の様相を示し、漢代に既に冬も夏も鴞の肉を供物として用意したが、それは一年を通して、『美味だからである』とあり、唐代の本草学者で明の李時珍の「本草綱目」にもよく引かれてある、陳蔵器は古人がこの鳥の炙り肉を好んだのは、脂が乗って『美味であることを尊んだのである』とあり、それは以上の原文からも判る。

さても！　ここでは、もう禍々しい首だらけの怪鳥なんぞではない、鳴き声が厭な感じだけれど、実在する鳥であることが判る。それは「彼らに外ならない」でないか！　一応、ウィキの「鬼車」を引いてみようか。『中国に伝わる怪鳥』で、『東晋の小説集『捜神記』には「羽衣女」として、以下のように記述されている。江西省のある男が、数人の女を見つけた』。一『人の女の脱ぎ捨てた毛の衣があったので、男がそれを隠して女たちに近寄ると、女たちは鳥となって飛び去ったが、毛衣を隠された』一『人だけは逃げられなかった。男は彼女を妻とし、後に子供をもうけた。後に女が隠されていた毛衣を見つけ、鳥となって飛び去り、さらに後に別の衣を持って子供たちを迎えに来て、皆で鳥となって飛び去った』。『西晋代の書『玄中記』によれば、この羽衣女が後に「鬼車」と呼ばれるようになったという』（**いやいや！　何で私の好きな「捜神記」の羽衣伝説マンマのしみじみした話が、何で！　九頭の醜い凶鳥になるんでしょうか？　と聴きたいのだよ！**）。『『太平御覧』には、斉の国（現・山東省）に頭を』九『つ持つ赤い鳥がおり、カモに似て』、九『つの頭が皆』、『鳴くとある』。『唐代の『嶺表録異』によれば、鬼車は』九『つの頭を持つ鳥で、嶺外（中国南部から北ベトナム北部かけて）に多くいるもので、人家に入り込んで人間の魂を奪う。あるとき』、『頭のうちの一つを犬に噛まれたため、常にその首から血を滴らせており、その血を浴びた家は不幸に苛まれるという』。『『正字通』では「鶬虞（そうぐ）」の名で記述されている。「九頭鳥（きゅうとうちょう）」ともいい、ミミズクの一種である鵂鶹（きゅうりゅう）に似たもので、大型のものでは』一『丈あまり（約』三『メートル）の翼を持ち、昼にはものが見えないが、夜には見え、火の光を見ると目がくらんで墜落してしまうという』（**いやいや！　それって！　フクロウ・ミミズク類、そのマンマでしょうが！？！**）『南宋代の書『斉東野語』では、鬼車は』十『個の頭のうちの一つを犬に噛み切られ、人家に血を滴らせて害をなすという。そのために鬼車の鳴き声を聞いた者は、家の灯りを消し、犬をけしかけて吠えさせることで追い払ったという』。『また、鬼車とはまったく別の伝説として、人の子供を奪って養子にするといわれる神女「女岐（じょき）」がある。『楚辞』には「女岐は夫もいないのになぜ』九『人もの子供がいるのか」とあり、この言い伝えが前述の『捜神記』での鬼車と子供にまつわる話と習合し、さらに「九子」が「九首」と誤って伝えられたことから、鬼車が』九『つの頭を持つ鳥として伝えられたものと見られている』。『前述の『玄中記』では、これらの鬼車、羽衣女、女岐の伝承を統合した形で「姑獲鳥（こかくちょう）」という鬼神として記載されているため』、『書籍によっては鬼車が姑獲鳥の別名とされていることもある』。『頭の』一『つは犬に噛まれたのではなく、周王朝の宰相・周公旦の庭師に撃ち落されたという説もある』とある。

私の憤懣は増大するばかりである。私が不満たらたらなのは、とどのつまりは、こうした中国で形成された畸形醜悪の「鬼車鳥」が何で我らの「七草粥」の穏やかな習俗に強引に結合

してしまいったのかという点にあり、しかも、その凶鳥の声も姿も古文では語られていない不審（鬼車鳥が本邦の妖怪伝承の潮流の中で全く進化していない点）にあるわけだ。私はその原因こそが、「多頭」性にあると睨んでいる。日本人には、この手の「コレデモカ・ハイブリッド」系妖怪は人気が出ないのである。正直、鳥の本体に十も九つも頭があっては、怖いどころか、滑稽なだけだからだ。しかも、犬に弱いときたもんだってえの！

小学館「日本国語大辞典」には、「鬼車」を立項するも、『頭が九つあり、幼児をさらうとされる想像上の妖鳥。「易経―睽卦［やぶちゃん注：「けいけ」。］」の「載二鬼一車二」の句による名という。鬼車鳥。』とあるだけだ。この解説、何も我々に有益な情報を与えて呉れてはいない。「何でそうなるの？！？」という痛切な期待を完全に裏切っている。

しかし、賢明な諸君は、もう、お判りだろう、「鬼車鳥」の正体、その実在が。

私の乏しい知識から考える「鬼車鳥」論を示す。

「鬼」は元来、中国語では既に示した通り、幎冒（べきぼう）を被せた「死者」の姿を表わす。死者以上でも以下でもない。本来は人の遺体である。しかし、されば、それは冥界の存在をシンボルライズする。「車」は「廻（めぐ）る」物である。人の死者の顔のように見えるもので、人の頭部とは異なり、ぐるりと車のように背後の方まで廻るのである。冥界は夜の闇に通ずる。夜の闇の中に跳梁し、不気味な人の顔のようなもので、ぐるりと回る顔のような「鳥」である。そ奴は家の中にも侵入する。家の中は屋根裏を含む。そうだ――これはフクロウやミミズクに他ならないのだ。十の首とは、古代人には足を動かさないで首だけを動かすとは思うことが出来ないから、十方に顔があるとしたのだ。しかし実際には彼らは真後ろは流石に向けない。そんな背後からの彼らを見た者が、そこに全数からマイナス一が生じた。それがしょぼくも犬に食われたとする一つの首だ。また、或いは、その妖鳥の魔力を事前に封ずる手だてとして、弱点としてのマイナス一を加え、而して絶対最大の陽数である「九」を「鬼車鳥」そのもののなかに負のシステムとして組み込んだのだとも言えるのかも知れない。彼らの博物誌は私の「和漢三才圖會卷第四十四　山禽類　鵂鶹（みみづく）　（フクロウ科の「みみづく」類）」及び、続く「和漢三才圖會卷第四十四　山禽類　鴞（ふくろふ）　（フクロウ類）」を参照されたい。

最後に、鬼車鳥を吸収合併して、本邦では消失させてしまった、張本人と思われる強力な日本の妖鳥のそれを示して、終わりとする。本文前の冒頭注でも触れた、そう、「和漢三才圖會卷第四十四　山禽類　姑獲鳥（うぶめ）　（オオミズナギドリ？／私の独断モデル種比定）」である。私の言いたいことはそちらで言い尽くしている。まさか「オオミズナギドリ」がモデル鳥というのも、誰も考えちゃあ、いないだろうから、どうぞ！　そちらをお読みあれかし！！！

「水鷄は Vanellus cristatus Mey. et Wolf. (Möllendorff, "The Vertebrata of the Province of Chihi," The Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society, New Series XI, Shanghai,1877, p. 97)」熊楠が参考にしたのは、ドイツの言語学者で外交官であったパウル・ゲオルク・フォン・メレンドルフ（Paul Georg von Möllendorff　一八四七年～一九〇一年：十九世紀後半に朝鮮の国王高宗の顧問を務め、また、中国学への貢献でも知られ、満州語のローマ字表記を考案したことでも知られる。朝鮮政府での任を去った後、嘗ての上海で就いていた中国海

関（税関）の仕事に復し、南の条約港寧波の関税局長官となり、そこで没した）が書いた、河北省の脊椎動物についての論文である。「Vanellus cristatus」はチドリ目チドリ亜目チドリ科タゲリ属タゲリ *Vanellus vanellus* のシノニムである。全長約三十二センチメートル。長い冠羽をもった大型のチドリで、ヨーロッパからシベリア南部にかけてのユーラシア大陸の中緯度地方で繁殖し、冬は少し南へ移動する。日本には主に冬鳥として渡来するが、石川・新潟・福井・茨城などでは少数が繁殖している。頭上・後頸・背・翼は黒く、光沢がある。上尾筒は橙栗色で、尾は基部が白く、先が黒い。翼の下面は風切が黒く、雨覆は白色で対照が著しい。鳴き声は猫のように怪しい。サイト「サントリーの愛鳥活動」の「タゲリ」で聴くことが出来る。そこには、『翼は金属光沢のある緑黒色。頭には後方へ伸びるかざり羽があり』、『「ミューウッ」あるいは「ミャーッ」と聞こえる猫の鳴き声に似た声を出』すとし、『冬鳥として北方から渡って来て、積雪のない地方で冬枯れの田んぼの刈りあとや』、『湖沼畔に群れを』作り、『飛ぶときは丸みのある翼をフワフワとはばたかせ、白と黒の模様をあざやかに浮き立たせ』るとある。**私は熊楠のように「鬼車鳥」の正体がタゲリだとは思わない。しかし、この鳴き声、空中をふわふわと人魂のように飛ぶ白黒のそれは、不吉な霊魂の象徴、冥界の禍々しい鳥と名指されても、必ずしも違和感は抱かないとは言っておこう。因みに、イギリスでは本種群を不吉な鳴き声の鳥として「wandering jew」（彷徨えるユダヤ人）という差別的呼称が残っている。**

「鵺」私の「和漢三才圖會卷第四十四　山禽類　鵺（ぬえ）　（怪獣／鳴き声のモデルはトラツグミ）」を参照されたい。なお、ここで熊楠は、文脈上は妖獣としてのそれを念頭に置いている。

「Knox,`An Historical Relation of the Island of Ceylon,` 1681, p. 78」イギリス東インド会社に属したイギリス海軍大尉ロバート・ノックス（Robert Knox　一六四一年～一七二〇年）が現地に赴いた際の記録に基づくもの。原本を綺麗に電子化したものが「gutenberg」にあるのを発見、少し手間取ったが、その「The Devil`s Voice often heard.」と頭書する条に、

＊

This for certain I can affirm, That oftentimes the Devil doth cry with an audible Voice in the Night; `tis very shrill almost like the barking of a Dog. This I have often heard my self; but never heard that he did any body any harm. Only this observation the Inhabitants of the Land have made of this Voice, and I have made it also, that either just before or very suddenly after this Voice, the King always cuts off People. To believe that this is the Voice of the Devil these reasons urge, because there is no Creature known to the Inhabitants, that cry like it, and because it will on a sudden depart from one place, and make a noise in another, quicker than any fowl could fly: and because the very Dogs will tremble and shake when they hear it; and `tis so accounted by all the People.

This Voice is heard only in Cande Uda, and never in the Low Lands. When the Voice is near to a Chingulaye`s house, he will curse the Devil, calling him Geremoi goulammah, Beef-eating Slave be gone, be damned, cut his Nose off, beat him a pieces. And such like words of Railery, and this they will speak aloud with noise, and passion, and threatning. This Language I have heard them bestow upon the Voice; and the Voice upon this always ceaseth for a while, and seems to depart, being heard

at a greater distance.

＊

とあるのが、当該部である。

「Fr.Jordanus,`Mirabilia descripta,` trans.Yule, 1863, p. 37」著者はインドに於ける最初の司教カタラーニ・ジョルダヌス（Catalani Jordanus　一二八〇年頃～一三三〇年頃）。当該書の「Internet archive」のリリの右ページに、

＊

35. What shall I say then?　Even the Devil too there speaketh to men, many a time and oft, in the night season, as I have heard.

＊

とある。

「ユール」前書の英訳者で、イギリスの軍人にして東洋学者であったヘンリー・ユール（Henry Yule　一八二〇年～一八八九年）。以下のそれは、上記のページにある彼の注の後半に現われる。

＊

The notion of catching Shaitan without any expense to Government was a sublime piece of Anglo-Indian tact, but the offer was not accepted. Our author had, however, in view probably the strange cry of the Devil-bird, as it is called in Ceylon.　"The Singhalese regard it literally with horror, and its scream by night in the vicinity of a village is bewailed as the harbinger of impending calamity."　" Its ordinary note is a magnificent clear shout, like that of a human being, and which can be heard at a great distance, and has a fine effect in the silence of the closing night.　It has another cry like that of a hen just caught ; but the sounds which have earned for it its bad name, and which I have heard but once to perfection, are indescribable, the most appalling that can be imagined, and scarcely to be heard without shuddering; I can only compare it to a boy in torture, whose screams are stopped by being strangled."　Mr. Mitford, from whom Sir E. Tennent quotes the last passage, considers it to be a *Podargus* or night-hawk, rather than the brown owl as others have supposed. (*Tennenfs Nat. Hist. of Ceylon*, 246-8.)

＊

「ミットフォード」イギリスの貴族で外交官のアルジャーノン・バートラム・フリーマン＝ミットフォード（Algernon Bertram Freeman-Mitford　一八三七年～一九一六年）か。幕末から明治初期にかけて外交官として日本に滞在した人物としても知られる。

「童子が經せられて」「選集」でも『經せられて』とあるが、これは上記原文の「**I can only compare it to a boy in torture**」の部分で、「**torture**」は「**折檻・拷問**」であるから、「**經**」では**おかしい**。これは思うに、**熊楠の誤記か誤植**（**但し、初出も「經」ではある**）**であって「縊せられて」で「首を絞められること」の意ではあるまいか？　「縛」でも何でもいいが、「息絶ゆるまで苦吟する如く、悽愴極りて聞くに堪ず」なのだから、私はそれで採りたいわけである。**

「テンネント」「Tennent, `Sketches of Natural History of Ceylon,` 1861, pp.246-8」イギリスの植

民地管理者で政治家であったジェームズ・エマーソン・テナント（James Emerson Tennent 一八〇四年〜一八六九年）のセイロンの自然史誌。「Internet archive」のこちらで、原本の当該部が視認出来る。「THE "DEVIL BIRD"」の挿絵もある。そのフクロウの絵の前後に、

＊

The Singhalese regard it literally with horror, and its scream by night in the vicinity of a village is bewailed as the harbinger of impending calamity.

＊

「古え錫蘭を虐治せし兄王キスツアカン、鬼車と同く十頭ありしと云は奇遇頗る妙也（James Low,in the Jouynal of the lndian Archipelago and Eastern Asia, vol.iv. p. 203, Singapore, 1850）」作者は正しくはジェームス・リチャードソン・ローガン（James Richardson Logan　一八一九年〜一八六九年）で、イギリスの弁護士で民俗学者。インドネシアやマレー半島の民俗を調べ、「インドネシア」という語を広めた人物でもある。「Internet archive」の原本のここ（右ページの改行された段落の冒頭部）に、

＊

The freed soul of Nontheok fell down to the earth, and was born again under the form of a Rakhsha. In process of time he was horn again as Kistsakan or Ravan, the ten handed tyrant of Ceylon styled Lanka.

＊

と確かにある。

「ミンチラ人が信ずるハンツ、サブロ（獵師鬼）は、湖及川の淵に棲み、體黑く、黑口と名たる三犬を隨ふ、此犬人家に近けば、住人は木片を打ち大噪ぎしてこれを驅り、小兒を緊く抱いて其去るを俟つ、マレー人が傳ふるソコム鬼、行くときは「ゞリゞリ」鳥先づ飛ぶ、此鳥、家に近くとき、家内聲限りに喧呼して之を厭す（Ibid.,vol.V, p. 308）」「Internet archive」の当該巻を調べたが、見つからない。他の巻も縦覧してみたのだが、お手上げ。ちょっと癪に触っている。

「姑獲が事は、倭漢三才圖會に本草綱目を引て、一名夜行遊女、又天帝少女鬼神類也云々荆州多有之、衣毛爲鳥、脫毛爲女人、是產婦死後化作、故胸前有兩乳、喜取人子、養爲己子、凡有小兒家、不可夜露衣物、此鳥夜啼、以血點之爲誌、兒輒病云々謂之無辜癲也、蓋此鳥純雌無雄、七八月夜飛害人、而して著者寺島氏之を西國海濱に多してふ「ウブメドリ」に宛て、九州人謂云、小雨闇夜、不時有出、其所居必有燐火、遙視之狀如鷗而大、鳴聲亦似鷗、能變爲婦、携子、遇人則請負子於人、怕之洟則有憎寒、壯熱甚至死者、强剛者諾負之、則無害、將近人家、乃背輕而無物、未聞畿內近國狐狸之外如此者と述ぶ」まあ、結局、こうなるとは思っていた。私の「和漢三才圖會卷第四十四　山禽類　姑獲鳥（うぶめ）　（オオミズナギドリ？／私の独断モデル種比定）」から私の訓読を全部引いておく。

＊

うぶめどり　夜行遊女

天帝少女

乳母鳥　譫語（いぎ）

姑獲鳥　無辜鳥　隱飛　鬼鳥　鉤星

タウフウニヤ。ウ

「本綱」、鬼神の類なり。能く人の魂魄を收む［やぶちゃん注：捕る。］。荊州［やぶちゃん注：湖北省。］に多く、之れ、有り。毛を衣て飛鳥と爲り、毛を脫げば、女人と爲る。是れ、産婦、死して後、化して作る。故に胸の前に兩乳、有り。喜んで人の子を取り、養ひて己が子と爲す。凡そ、小兒有る家には、夜、兒の衣物を露はにするべからず。此の鳥、夜、飛び、血を以つて、之れに點じ、誌と爲す。兒、輙ち、驚癇及び疳病を病む。之れを「無辜疳」と謂ふなり。蓋し、此の鳥、純ら、雌なり。雄、無し。七、八月の夜、飛びて、人を害す。△按ずるに、姑獲鳥は【俗に云ふ、「産婦鳥」。】、相ひ傳へて曰はく、「産後、死せば、婦、化する所なり」と。蓋し、此れ、附會の說なり。中華にては荊州、本朝にては西海の海濵に多く、之れ、有りといふときは、則ち、別に、此れ、一種の鳥たり。最も陰毒の因りて生ずる所の者ならん。九州の人、謂ひて云はく、「小雨り、闇き夜、不時に［やぶちゃん注：不意に。］出づること、有り。其の居る所、必ず、燐火［やぶちゃん注：鬼火。青白い妖しい火。］あり。遙かに之れを視るに、狀、鷗のごとくにして、大きく、鳴く聲も亦、鷗に似る。能く變じて婦と爲り、子を攜へて、人に遇ふときは、則ち、人に子を負せんことを請ふ。之れを怕れて逃ぐれば、則ち、憎み、寒・壯熱、甚だしくして死に至る者、有り。强剛の者、諾して、之れを負ふときは、則ち、害、無し。將に人家に近づくに、乃ち、背、輕くして、物、無し。未だ畿内・近國には、狐狸の外、此くのごとき者を聞かず。

＊

「吾國には例無き事なれど、實際梟族が嬰兒を殺すこと世にあると見る」当然です。フクロウは猛禽類ですから。

「Hasselquist, op. cit., p. 196」（2）に既出既注。

「鵂鶹」（きゅうりゅう）「ふくろう（梟）」の古名として本邦でも古くから用いられ、古語では「いひどよ（いいどよ）」とも訓じた。なお、現代中国では、フクロウ目フクロウ科フクロウ目スズメフクロウ属ヒメフクロウ *Glaucidium brodiei* の異名にこの漢字を当てている。されば、分布域その他は中文の同種のウィキを参照されたい。本邦には棲息しない。

「Strix otus」フクロウ科トラフズク属トラフズク *Asio otus* のシノニム。本邦にも基亜種トラフズク *Asio otus otus* が棲息する。名前で判る通り、耳角を持つ。

「梟の巣に時として羽毛を混ぜる異様の塊物ある」鳥類学用語の「ペレット・ペリット」（pellet）のこと。猛禽類や一部の鳥類などが、消化出来ない骨・羽・毛などを纏めて吐き出した塊り。ウィキの「ペリット」がよい。

「G. White, 'The Natural History and Antiquities of Selborne'」イギリスの牧師で博物学者のギルバート・ホワイト（Gilbert White　一七二〇年～一七九三年）が書いた、私の愛読書の一つである「セルボーンの博物誌」。彼はハンプシャーの小村セルボーンに生まれ、そこで副

牧師を務める傍ら、少年時代から興味を持っていた博物学の研究に殆どの時間を費やし、その成果を約二十年間に亙って、博物学者トマス・ペナント（Thomas Pennant　一七二六年〜一七九八年）と動物学者デインズ・バリントン（Daines Barrington　一七二七年〜一八〇〇年）に送り続けた。彼らとの親交は、ホワイトの弟ベンジャミン（Benjamin）が博物学書の出版を手掛けていたことによるものであった。後に両者に送られた書簡を纏め、一七八九年にベンジャミンの手で出版された。ウィキの「ギルバート・ホワイト」によれば、『流麗な文体と鋭い観察眼とを兼ね備えた『セルボーンの博物誌』は、博物誌の古典として今日まで受け継がれており、「たとえ英国が滅びても本書は永遠に残るだろう」と称えられることもあった』。『その特徴は、当時の標本主義の博物学とは対称的に、鳥や植物、昆虫などの生態や自然景観の観察を、当地の歴史や山彦、日時計、田舎の迷信といった風土とともに記録した点にある』。十八世紀から十九世紀にかけて『牧師らが』、『その居住地域の博物誌をまとめる習慣が流行したが』、その中でも『ホワイトの著作だけが古典となった所以でもある』とある。

＊

「陸佃爾雅新義一七」陸佃（りくでん）（一〇四二年〜一一〇二年）は北宋の博物学者で、王安石の弟子。主に動植物について解説した博物辞書「埤雅（ひが）」で知られる。当該書の指示するそれは、以下（「中國哲學書電子化計劃」の原本画像から起こした。そこに電子化されている文字列（機械判読で話にならないひどいものである）は致命的に誤っている）。

怪鴟梟鴟
長而食母悖類反倫可謂怪塞曩梟首木上一名土梟土梟抱塊爲兒其遭食有以也所謂酉莒人滅鄙鄶如此一名土梟［やぶちゃん注：以下略。］

＊

「梟の暖め土に毛がはえて、昔の情今の寇也」天明期を代表する文人で狂歌師として知られる大田南畝（寛延二（一七四九）年〜文政六（一八二三）年）が著したものを、後に文宝堂散木が補した、南畝没後の文政八年に刊行した随筆「仮名世説（かなせせつ）」の「上」に（吉川弘文館「日本随筆大成　第二期　第二巻」を所持するが、ここでは「古典籍ビューア」のこちらで視認して起こし、句読点や記号を施し、段落を成形した）、

＊

支唐禅師は、源子和が父の方外の友なり。諸國行脚の時、出羽國より同宗の寺あるかたへゆきて、其寺にしばし滞留ありしに、庭前に椎の木の大なるが朽て、半より、をれ殘りたり。一日、住持、此木を、人して、掘とらせけるに、朽たるうつろの中より、雌雄の梟、二羽、出て、飛さりぬ。其跡をひらきみるに、ふくろふの形を、土をもて作りたるが、三つ、有。其中に、ひとつは、はやくも、毛、少し生て、啄（クチバシ）、足（アシ）ともに、そなはり、すこし、生氣も、あるやうなり。三つともに、大さは、親鳥程なり。

住持、ことに怪しみけるに、禅師のいはく、

「これは、聞及びたる事なりしが、まのあたり見るは、いと、めづらし。古歌に、

ふくろふの　あたゝめつちに　毛がはへて
　　昔のなさけ　いまのあだなり

と、此事を、いひけるものなるべし。梟は、みな、土をつくねて、子とするものなり。」と。

住持も、禅師の博物を、感ぜり。

＊

私はこの古歌の出典を知らぬ。ただ、ここで注する以前に、以上は知っていた。それは、私の芥川龍之介の手帳の電子化注の「芥川龍之介　手帳３―７」で以上を示したことがあるからである。原拠を御存じの方は是非、お教え願いたい。

『歐人「ヂユゴン」を遠望して海女となし Tennent, p. 68』既注の「Internet archive」のこちらで、原本の当該部が視認出来る。ジュゴン（哺乳綱海牛（ジュゴン）目ジュゴン科ジュゴン属ジュゴン *Dugong dugon* ）の挿絵も添えてある。

「兎の陰部異常なるより悉く両性を兼ぬとし C. de Pauw, 'Recherches Philosophiques sur les Americaines,' Cleves, 1772, p. 92」ウサギの[illegible]の生殖器が幼年の場合に判別が至難であることは、かなり知られている（ウサギを飼ったことがない私でも聴き及んでいるから）。「アニコム損害保険株式会社」公式サイト内の「みんなのどうぶつ病気大百科」の「うさぎさんの繁殖生理学」によれば、『慣れた人であれば生後』二『ヶ月頃で生殖器の形から』、『うさぎさんの性別の判断も可能ですが、一般的にはとても難しいといわれています』。『男の子の場合は、女の子に比べると』、『肛門と陰部の距離が離れていて、陰部の形が丸く見えます。一方、女の子は肛門と陰部の距離が男の子に比べると近く、陰部が丸ではなく、やや細長く見えます』。『生後』三『ヶ月を過ぎると、男の子は包皮をお腹側にやさしく押すことでペニスを確認できますが、やはり慣れていないと難しいので、動物病院などで確認していただくと良いでしょう』。『なお』、六『ヶ月を過ぎると』、『睾丸が降りてくるので、はっきりと区別がつきます』とある。コーネリアス・フランシスクス・デ・パウ（Cornelius Franciscus de Pauw 一七三九年～一七九九年）はオランダの哲学者・地理学者で外交官。書名は「アメリカ人に関する哲学的研究」か。

「異物志、靈猫一體、自爲陰陽と謂ふ」「異物志」は後漢の広東出身の政治家楊孚（ようふ生没年未詳）の書いた地誌。但し、これは明の李時珍の「本草綱目」の孫引き。その巻五十一上の「獸之二」にある「靈貓」の「集解」に、

＊

藏器曰、靈貓生南海山谷。狀如貍自爲牝牡、其陰如麝。功亦相似。按「異物志」云、「靈貓一體自爲陰陽、刳其水道連囊以酒洒陰乾、其氣如麝。若雜入麝香中罕能分別用之亦如麝焉」。

＊

とある。「靈貓」は食肉目ネコ型亜目ジャコウネコ科 Viverridae のジャコウネコ類。詳しくは私の「和漢三才圖會卷第三十八　獸類　靈貓（じやかうねこ）　（ジャコウネコ）」を見られたい。但し、熊楠はアンドロギュヌス（雌雄同体）に惹かれて、ここに出したものと思われ、あんまり関係ない気がする。

「家外に露せる衣布、忽ち黴菌等を生じて、血點に酷似せる斑を生ずるは予も親く見たり」粘菌の王者南方熊楠ならではの実体験！　いいね！！！

「夜啼點血爲誌」「本草綱目」の巻四十九の「禽四」「姑獲鳥」の項の「集解」にある、

＊

凡有小兒家不可夜露衣物。此鳥夜飛以血點之爲誌、兒、輒病驚癎及疳疾謂之無辜疳也。

（凡そ、小兒有る家、夜、衣物を露すべからず。此の鳥、夜、飛つて、血を以つて、之に點じて、誌と爲す。兒、輒ち、驚癎及び疳疾を病む。之れを「無辜の疳」と謂ふなり。）

＊

の一節であるから、「啼」ではなく、「飛」が正しい。「選集」では訂してある。「無辜の疳」とは言い得て妙だ。小児自身の内因性・心因性の疾患ではなく、子に責任のない、干しっぱなしにした親に重大な責任がある外因性の「疳の虫」だという優れた鑑識だからである。さても、この際だから、この「姑獲鳥」の項の次の次（間に「治鳥」（私の「和漢三才圖會卷第四十四　山禽類　治鳥（ぢちやう）　（実は妖鳥「冶鳥（やちょう）」だ！）」を是非、参照されたい）とその附録の「獨足鳥」という妖鳥が入る）に出る、今まで抜粋だった「本草綱目」の「鬼車鳥」も全文をちゃんと示しておこうじゃないか。原文（句読点・記号は私が附した）・訓読は国立国会図書館デジタルコレクションの寛文九（一六六九）風月莊左衞門板行版の画像を視認し、参考にした（訓読では従っていない部分も多い。また、読みは独自に推定で歴史的仮名遣で附した）。太字は底本では囲み罫。

＊

**鬼車鳥**【「拾遺」。】

**釋名**　鬼鳥【拾遺「拾遺」。】九頭鳥【同上。】蒼鸆【「白澤圖」。】竒鶬【時珍曰、鬼車妖鳥也。取周易載鬼一車之義。似鶬而異。故曰竒鶬。】

**集解**【蔵器曰、鬼車晦暝則飛鳴。能入人家收人魂氣。相傳、此鳥昔有十首、犬嚙其一猶餘九首。其一常滴血。血着人家則凶。荆楚人夜聞其飛鳴但滅燈打門捩狗耳以厭之。言其畏狗也。「白澤圖」、蒼鸆有九首。及孔子與子夏見竒鶬。九首皆此物也。「荆楚歳時記」、以爲姑獲者非矣。二鳥相似故同名鬼鳥。時珍曰。鬼車狀如鵂鶹而大者翼廣丈許。晝盲夜瞭。見火光輒墮。按劉恂「嶺表錄」云、鬼車出秦中而嶺外尤多。春夏之交稍遇陰晦、則飛鳴而過。聲如刀車鳴。愛入人家鑠人魂氣。血滴之家必有凶咎。「便民圖」云、冬月鬼車夜飛鳴。聲自北而南。謂之出巣。主雨。自南而北、謂之歸巣。主晴。周密「齊東野語」云、宋李壽翁守長沙。曾捕得此鳥。狀類野鳧赤色、身圓如箕。十頸環簇有九頭、其一獨無而滴鮮血。毎頸兩翼、飛則霍霍並進。又周漢公主病。此鳥飛至砧石卽薨。嗚呼、怪氣所鍾、妖異如此。不可不知。

＊

**鬼車鳥**【「拾遺」。】

**釋名**　「鬼鳥」【拾遺「拾遺」。】・「九頭鳥」【同上。】・「蒼鸆」【「白澤圖」。】・「竒鶬」【時珍曰はく、鬼車は妖鳥なり。「周易」に鬼一車の義を載すといふ。鶬に似て異なり。故に「竒鶬」とも曰ふ。】

**集解**【蔵器曰はく、鬼車、晦暝なるときは、則ち、飛び鳴く。能く人家に入りて人の魂氣を收（をさ）む。相ひ傳ふ、此の鳥、昔、十首、有り、犬、の其一を嚙みて、猶、九首を餘す。其の一、常に血を滴らす。血、人家も着くときは、則ち、凶なり。荆楚の人、夜、其の飛び鳴くを聞けば、但だちに、燈を滅し、門を打ち、狗の耳を捩りて、以つて之れを厭ふ。言く、其れ、狗を畏るるなりと。「白澤圖」に、蒼鸆、九首有りと。及び、孔子、子夏と竒鶬

の九首あるを見ると。皆、此の物なり。「荆楚歳時記」に、以て姑獲と爲すは、非なり。二鳥、相ひ似たり。故に同じく鬼鳥と名づく。**時珍曰**、鬼車、狀、鵂鶹のごとくして、大なる者の翼の廣さ、丈許り。晝、盲し、夜、瞭なり。火光を見て、輒ち、墮つ。按ずるに、劉恂が「嶺表錄」に云はく、鬼車、秦中に出づ、嶺外に尤も多し。春夏の交にして稍く陰晦に遇ふときは、則ち、飛び鳴きして過ぐ。聲、刀車［やぶちゃん注：時珍の「力車」の誤記か誤写ではあるまいか？］の鳴るがごとし。人家に入ることを愛みて、人の魂氣を鑠す。血の滴れる家、必ず、凶咎有り。「便民圖」に云はく、冬月、鬼車、夜、飛び鳴く。聲、北よりして、南す。之れを「出巣」と謂ひ、雨を主る。南よりして北す。これを「歸巣」と謂ひ、晴を主る。周密が「齊東野語」に云はく、宋の李壽翁、長沙に守となる。曾て此の鳥を捕へ得。狀、野鳧に類して赤色、身、圓にして、箕のごとし。十頸、環簇して［やぶちゃん注：輪のように連なって群がり。］、九頭有り、其の一、獨り無くして鮮血を滴らす。頸毎に兩翼あり、飛ぶときは、則ち、霍霍として［やぶちゃん注：砥石でシュッシュッと音を立てて研ぐような音を立てて、或いは鋭角になって、の意か。］並び進む。又、周漢の公主、病ひす。此の鳥、飛びて砧石に至りて、卽ち、薨ず。嗚呼、怪氣の鍾れる所や、妖異、此くのごとし。知るべからず。

＊

「檳榔」単子葉植物綱ヤシ目ヤシ科ビンロウ属ビンロウ *Areca catechu* の実。長楕円形を成し、長さ五センチメートル前後で熟すとオレンジ色・深紅色となる。ウィキの「ビンロウ」によれば、『檳榔子を噛むことはアジアの広い地域で行われている。檳榔子を細く切ったもの、あるいはすり潰したものを、キンマ』（双子葉植物綱クレン亜綱コショウ目コショウ科コショウ属キンマ *Piper betle*）『の葉にくるみ、少量の石灰と一緒に噛む。場合によってはタバコを混ぜることもある。しばらく噛んでいると、アルカロイドを含む種子の成分と石灰、唾液の混ざった鮮やかな赤や黄色い汁が口中に溜まる。この赤い唾液は飲み込むと胃を痛める原因になるので吐き出すのが一般的である。ビンロウの習慣がある地域では、道路上に赤い吐き出した跡がみられる。しばらくすると軽い興奮・酩酊感が得られるが、煙草と同じように慣れてしまうと感覚は鈍る。そして最後にガムのように噛み残った繊維質は吐き出す』。『檳榔子にはアレコリン（arecoline）というアルカロイドが含まれており、タバコのニコチンと同様の作用（興奮、刺激、食欲の抑制など）を引き起こすとされる。石灰はこのアルカロイドをよく抽出するために加える』。『檳榔子には依存性があり、また国際がん研究機関（IARC）はヒトに対して発癌性（主に喉頭ガンの危険性）を示すことを認めている』。地面や『床に檳榔子を噛んだ唾液を吐き捨てると、血液が付着したような赤い跡ができ、見るものを不快にさせる。そのためか低俗な人々の嗜好品として、近年では愛好者が減少している傾向にあ』り、『台湾では現在、道路に檳榔子を噛んだ唾液を吐き捨てると罰金刑が課せられるため』、公道は概ね清潔になった、とある。

「Ratzel, `History of Mankind,` trans. Butler, 1896, vol. i, p. 474」ドイツの地理学者・生物学者リードリヒ・ラッツェル（Friedrich Ratzel　一八四四年～一九〇四年：社会的ダーウィニズムの影響の強い思想を特徴とし、政治地理学の祖とされる）の英訳本。「Internet archive」の英訳原本のこちらの左ページにある、

＊

The countless portents of death point to a life passed in a state of fear ; to these belong, among the Dyaks, the sight or the cry of an owl, snakes coming into the house, the falling of a tree in front of any one, a singing in the left ear, but most especially an abrupt change of mood.

Invisible spirits fill up the gaps which intervene in the substances of visible things. To them belongs in Javanese superstition the great race of the *Jurigs* ; when the other spirits have left a spot unoccupied you may be certain of finding *Jurigs*. They become visible only occasionally as tigers or fiery serpents, actually they are evil spirits. A milder form is found in the *Ganderuva* and *Veves*, who are equally indigenous to Java; mischievous cobolds, male and female, who torment men invisibly, most commonly by throwing stones, but also by bespattering their clothes with saliva dyed red by betel-chewing. Resembling both these the *Begus* are conspicuous among the Battaks, all the more that their spirit world is otherwise completely embodied. They are like a breath or bodiless air, to them belong the invisible spirits of disease, the only visible *Begu* is the dreaded *Nalalain*, the spirit of strife and murder, who may be seen creeping about in the evening with fiery eyes, long red tongue, and claws on his hands. Apparently resembling him is *Swangie* the most dreaded of the *Burungs* of Halmahera, the evil one who creeps on the earth. The *Begus* even try to take possession of corpses, and the incessant word -strokes of the *Ulubelang* or champions who surround the coffin in a funeral procession, are directed against them.

＊

が当該部である。「betel-chewing」が「キンマを噛むことで」の意である。

「ダイヤック人」、「カミヤック魔」、鳥の如く飛で孕婦を害し子生まるゝを妨げ、「クロアー魔」は、胸の正中に一乳房のみ有り、兒産まるゝや否、來て其頸を摑み、之を不具にすと信ぜるも似た事なり（T. F. Beeker, “The Mythology of the Dyaks,” The Journal of the lndian Archipelago and Eastern Asia, vol. iii, pp. 106, 113, 1849）」「Internet archive」で原本を見ることが出来、「106」はいいで、丁度、右手中央の段落から下部までがそれで、「ダイヤック人」の綴りは「the Dyaks」で「ダヤク族（Dayak／Dyak）はボルネオ島に居住するプロト・マレー系先住民の内でイスラム教徒でもマレー人でもない人々の総称である。以下、「カミヤック魔」は「第二の悪者」と称して「Kamak」とあり、「クロアー魔」の方はいちらの「113」の頭に出、「kloā」である。

「フェヤリース」fairies。妖精（英語：fairy／faery）の複数形。語源はラテン語「fata」（運命）に由来する。

「ネレイヅ」ネレイス。ギリシア神話で海に棲む女神ら或いはニュムペー（ニンフ）らの総称。

「Hazlitt, vol. ⅰ, p.102 」既出既注のイギリスの弁護士・書誌学者・作家ウィリアム・カルー・ハズリット（William Carew Hazlitt 一八三四年～一九一三年）著の「信仰と民俗学」。

「Bent, p. 14」既出既注のイギリスの探検家・考古学者・作家ジェームス・セオドア・ベント（James Theodore Bent 一八五二年～一八九七年）の「キクラデス諸島又は島内のギリシャ人たちの生活」（*The Cyclades; or, Life among the Insular Greeks*）。「Internet archive」で調べると、当該ページはいい頭。初行に出る「Nereids」がネレイスの英訳。

「老媼茶話十七章」作者は松風庵寒流或いは三坂春編（元禄一七・宝永元（一七〇四）年？〜明和二（一七六五）年）が記録した会津地方を中心とする奇譚（実録物も含む）を蒐集したとされる寛保二（一七四二）年の序（そこでの署名が「松風庵寒流」）を持つ「老媼茶話（らうあうさわ（ろうおうさわ））」。三坂春編は三坂大彌太とも称した会津藩士に比定されている。私は完全電子化注をカテゴリ「怪奇談集」で終えている。「老媼茶話巻之三　天狗」を、どうぞ。

「著聞集アコ法師の事」「古今著聞集」の巻第十七の「變化第二十七」の「御湯殿の女官高倉が子あこ法師失踪の事」。

＊

これも建保［やぶちゃん注：一二一三年〜一二一九年。］の比、御湯殿［やぶちゃん注：清涼殿の西北にあった帝の湯浴み所。］の女官高倉が子に、七歳になる「あこ法師」といふ小童ありけり。家は樋口高倉にてありければ、ちかぢかに小童部あそびともなひて、小六条へ行にけり。かいくらみ時［やぶちゃん注：夕暮れ時。］に、小六条にて、

「相撲とらん。」

とて、ねりあひたるところに［やぶちゃん注：ゆっくりと寄り合ったところが。］、うしろの築地のうへより、なにとは見えわかず、垂布のやうなるものの、うちおほふ、と見えける程に、この「あこ法師」、うせにけり。おそろしきこと、かぎりなし。かたへの童部、みな、にげぬ。恐れをなして、人にも、かくとも、いはず。

母、さはぎかなしみて、いたらぬ所もなく求むれども、見えず。

三日といふ夜の夜半ばかりに、女官が門を、ことごとく、たゝくもの、あり。恐れあやしみて、左右なくあけずして、内より、

「たそ。」

と問ふに、

「うしなへる子、とらせん。あけよ。」

と、いふ。

猶ほ、おそろしくて、あけず。

さるほどに、家の軒に、あまた、聲して、

「はあ。」

と、わらひて、廊の方に、物をなげたりけり。

おそろしながら、火をともしてみれば、げに、うしなへる子なりけり。

なへなへとして［やぶちゃん注：ぐったりとしてしまって。］、いける物にもあらず、物もいはず、ただ、目ばかり。しばたゝきけり。

驗者・よりまし［やぶちゃん注：「憑坐」。靈を移しとるための少女。］など、するて、いのるに、物、多く、つきたり。みれば、馬のくそなりけり。三たらひばかりぞ、ありける。

されども、なほ、物いふこともせず。

「よみがへり」のごとくにて、十四、五ばかりまでは、生きてありし。

「その後、いかがなり侍りけん。」

と、その時、見たりける人の、かたり侍しなり。

＊

「苗氏コラヴンバスクの諸民、産母に夫「クーヴード」して、妻と苦樂を俱にするの意を示し」「苗氏」はミャオ族。中国国内に多く居住する民族集団で、同系統の言語を話す人々はタイ・ミャンマー・ラオス・ベトナムなどの山岳地帯に住む。自称はモン族。「クーヴード」ウィキの「男のつわり」によれば、『未開社会では、妻が妊娠すると男性が産褥（出産用の寝床）につく真似をする風習をともなう地域があり、couvade』（クーバード。英語。）『（擬娩、擬産）と呼称される』とし、『妻が妊娠すると』、『夫の身体の調子が悪くなることをいう。福島県では「トモクセ」、岩手県沿岸地方では「男のクセヤミ」といい、ひどい人は妊婦と同じく汗をかいて衰弱し、嘔吐をもよおしたりもするが』、『妻の出産が終わると治る。「病んで助けられるのはクセヤミばかり」という民俗語彙もある。岩手県岩手郡では「クセヤマイ」、長野県下伊那地方では「アクソノトモヤミ（悪疽の共病み）」、奈良県高市郡地方では「アイボノツワリ」と呼ぶところがある』とあった。私は二十代の頃に読んだ、人類学の本で、ニューギニア辺りであったか、夫が実際の妻の産屋とは別に同じ形の贋の産屋を作り、そこで夫が出産の苦痛の叫びを挙げて、魔物を惑わすという同様の風習があることを読んだ（写し書きしたのだが、そのメモ帳自体が残念なことに書庫の底に沈んで出てこない）。これは、前にも書いた通り、民俗社会では、一つの人体に二つの魂が宿っている妊婦の状態は、魔物が侵入しやすい危険な状態と認識されるからで、非常に腑に落ちるのだが、本邦にも心因性の病的な状態として夫に起こるというのは初めて読んだ。興味深い。

「北ボルネヲには、産死の女、極樂え「やぶちゃん注：ママ。」直ぐ通りとす（Ratzel,:ii,p.479）」既出既注のドイツの地理学者・生物学者リードリヒ・ラッツェル（Friedrich Ratzel　一八四四年～一九〇四年：社会的ダーウィニズムの影響の強い思想を特徴とし、政治地理学の祖とされる）の英訳本。「Internet archive」の英訳原本のこちらの右ページ中央やや下にある一節。

＊

For this reason, also, in North Borneo some sago palms are felled for every person who dies, and the wine which the living drink at the funeral feast serves equally for his refreshment.　The man who commits robbery and murder without reason is punished there if he has died without undergoing a penalty, and punished too by being pierced with a lance by another soul.　But the souls of all those who have lost their lives by a spear wound or in any other violent, manner, **as well as women who have died in child-birth, arrive at a more desirable place, the residence of the gods. The Malagasies hold that their souls go into the air or on to the mountain, Ambongdrombe in the Betsileo country, which excites fear with its cloud-wrapped summit and the roaring of the storms. In their language we find echoes of a better hereafter; dead people are said to have gone to rest, among the Hovas indeed to have become divine.**

＊

太字部分が当該する。

「反踵」「はんしょう（はんしょう）」。初生児に見られる概ね先天性の奇形に外反踵足（がいはんしょうそく）がある。足が外側に捩じれるように変形している。

「廢壘墓塚」「はいるいぼちょう（はいるいぼちょう）」。崩れた古い砦や墓や塚。

「安南」ヴェトナム。

「Landes, ; Notes sur les Mœurs et Superstitions Populaires des Annamites,; Cochinchine Francaise, vol.:1, p. 448, Saigon, 1880」フランス人でベトナムの管理官であったアントニ・ランデス（Antony Landes　一八五〇年〜一八九三年）が一八八二年に刊行した「アンナンに於ける民俗と一般的迷信についての記録」。南方熊楠は「本邦に於ける動物崇拝」の「海豚（イルカ）」の条で引用している。

「今昔物語巻十三、平季武之に値ふ話あり」既に『柳田國男「一目小僧その他」　附やぶちゃん注　橋姫（3）　産女（うぶめ）』の私の注で電子化してあるので参照されたい。

「倭漢三才圖會巻六十七、鎌倉産女寶塔の談あり」「相模」の部の「大巧寺（だいぎやうじ）」の一節。所持する原本から訓読して電子化する。〔　〕は私が附した読み。

＊

大巧寺（ぎやう）　妙隆寺近處に在り。【法華。】　寺領七貫二百文。

當寺、初めは眞言宗にて、大行寺と號す。而るに、日蓮、妙本寺に在りし時、法華と成る。

日澄（うぶめ）上人を以つて、開山と爲す。卽ち、妙本寺の院家なり。

産女の寶塔　堂内に在り。一間四面、二重の塔。

相ひ傳ふ、當寺第五世日棟上人、毎夜、妙本寺の祖師堂に詣でて、或夜、夷堂橋の傍らより、産女の幽靈（ゆうれい）出でて、日棟の廻向を乞ふ。日棟、之れの爲めに廻向す。産女、覿金（しんきん）一包を投じ、之れを謝す。日棟、用ひて、造立する所の塔なり。

曼荼羅　三幅。共に日蓮の筆【祈禱の曼荼羅・瓔珞（やうらく）の曼荼羅・星降（ほしくだり）の曼荼羅。皆、珍寶と爲す。】

＊

「覿金」は施しのための金。ここでは、自身の廻向をして呉れたことへの謝礼の布施。**この一連の説話については、大功寺公式サイトの「沿革」に詳細な現代語の「産女霊神縁起」（PDF別ファイル）がある。一読をお薦めする。**しかし、この記載は、どうにも、しょぼ過ぎる。鎌倉史を手掛けている私としては大いに不満がある。私の水戸光圀の「新編鎌倉志巻之七」から、私の注も併せて丸ごと引き添えておく（リンク先は私の古い仕儀なので一部で表記を変えた）。

＊

○大巧寺　大巧寺（ダイギヤウジ）は、小町の西頰（ニシガハノチ）にあり。相ひ傳ふ、昔は長慶山正覺院大行寺と郷し、眞言宗にて、梶原屋敷（カジハラヤシキ）の内にあり。後に大巧寺と改め、此の地に移すとなり。梶原屋敷の條下に詳かなり。昔し日蓮、妙本寺在世の時、此の寺法華宗となり、九老僧日澄上人を開山とし、妙本寺の院家になれり。今二十四世なり。寺領七貫二百文あり。棟札に、延德二年二月廿一日とあり。

［やぶちゃん注：「梶原屋敷の内にあり」とあるのは「後に」「此の地に移す」で分かるように、この寺は元は十二所の梶原屋敷内にあった。寺伝によれば、源頼朝がこの十二所の大行寺で軍評定をして合戦に臨んだところ勝利を得たことから寺号を大巧寺と改め、その後にこの地に移転したとある。］

産女（ウブメ）の寶塔（ホウタフ）　堂の内に、一間四面の二重の塔あり。是を「産女の寶塔」と云ふ事は、相ひ傳

ふ、當寺第五世日棟と云僧、道念至誠にして、毎夜妙本寺の祖師堂に詣す。或夜、夷堂橋(エビスダウバシ)の脇より、産女の幽魂出て、日棟に逢ひ、廻向に預つて苦患を免れ度(マヌカタ)き由を云ふ。日棟これが爲に廻向す。産女、賜金一包(ヒトツヽミ)を捧げて謝す。日棟、これを受て、其の爲に造立すと云ふ。寺の前に産女幽魂の出たる池、橋柱(ハシバシラ)の跡と云て、今、尚、存す。夷堂橋の少し北なり。

寺寶

曼荼羅　三幅　共に日蓮の筆。一幅は、「祈禱の曼荼羅」と云ふ。「病則消滅　不老不死」の八字を書加ふ。日蓮、房州小湊(コミナト)へ還(カヘ)り、七十餘歳の老母に逢ふ。老母、頓死す。日蓮、悲哀にたへずして祈誓す。「弘法(グハフ)の功、むなしからずば、再び母の命(イノチ)を活(イカ)し給へ」と念じ了(ヲハ)つて此を書す。たちまちに氣を吐いて、よみがへる。命延ぶること、四年也、と云傳ふ。經文は散書(チラシガキ)也。妙本寺にも、是、あり。一幅は、「瓔珞の曼荼羅」と云ふ。上に瓔珞あり。一幅は「星下(ホシクダ)りの曼荼羅」と云ふ。日證、此を庭前の青木に掛て日天子を禮す。時に、星下る。故に名く。其の青木、今、猶を存す。

［やぶちゃん注：「妙本寺にも是あり」私の電子テクスト「鎌倉攬勝考卷之六」の「妙本寺」の「曼陀羅」の項に、日蓮の「臨滅度時の御本尊」と呼称される十界曼荼羅の画像を示してある。参照されたい。「瓔珞」は珠玉を連ねた首飾りや腕輪を言う。本来はインドの装身具であったが、仏教で仏像を荘厳しょうごんするための飾り具となり、また寺院内の蓮台などの宝華(ほうけ)状の荘厳全般をも指し、ここでは天蓋からぶら下げるタイプのものを指しているか。なお、上記の大巧寺公式サイトによれば、現在この二幅は本山の妙本寺霊宝殿に寄託されており、うち一幅が日蓮聖人による御真筆とされ、大巧寺が真言宗から日蓮宗に改宗した際のものと思われる、とある。そこには弘安二（一二七九）年のクレジットがあるらしい。「星下り」流れ星の出現は日蓮の奇瑞としてもしばしば語られている。］

無邊行菩薩の名號　壹幅　日蓮の筆。

［やぶちゃん注：「無邊行菩薩」日蓮宗や法華宗で言う「法華経」に登場する四菩薩（四士とも）の一人。上行(じょうぎょう)・無辺行・浄行・安立行(あんりゅうぎょう)。彼らは特殊な菩薩で、菩薩行の修行者ではなく、既に悟達した如来が末法救済のために再び再臨した大菩薩とされている。］

日蓮の消息　壹幅

曼荼羅　壹幅　日朗の筆。

舍利塔　壹基　五重の玉塔なり。

［やぶちゃん注：これは高さ約三十センチ程の、産女霊神神骨を収めたとされる水晶の五輪塔。非公開であるが、上記大巧寺公式サイトに画像がある。］

已上

濵名(ハマナ)が石塔　北條氏政(ホウデウウヂマサ)の家臣、濵名(ハマナ)豐後の守時成(トキナリ)、法名妙法、子息蓮眞、母儀妙節、三人の石塔なり。

［やぶちゃん注：「北條氏政」（天文七（一五三八）年～天正十八（一五九〇）年）は戦国期の相模国の大名で後北条氏の第四代当主。武田信玄の娘婿で、武田義信・武田勝頼は義兄弟。父氏康の後を継ぎ北条氏の関東での勢力拡大に務めたが、豊臣秀吉との外交策に失敗、小田原の役を招いて最後には降伏、切腹した。「濵名豐後の守時成」については、ネット上に大巧寺の譜代旦那であったこと、現在の横須賀市にあった相模国三浦郡森崎郷に関わって、天

正三（年二月十七日附の浜名時成証文写が現存し、「今度三浦森崎郷永代致買得候」とあり（「神奈川県史」による）、更に時成はこの森崎郷を買い取った後、鎌倉大巧寺に永代寄進しているという。さればこそ彼とその家族の墓がここにあるのも頷ける。」

番神堂（バンジンダウ）　濵名（ハマナ）時成建立すと云ふ。

［やぶちゃん注：「番神堂」とは三十番神を祀った堂のこと。三十番神は神仏習合の本地垂迹説による信仰で、毎日交替で一ヶ月（陰暦では一ヶ月は二十九か三十日）の間、国家や民を守護し続けるとされた三十柱の神仏を指す。鎌倉期に流行し、特に日蓮宗で重要視された。］

＊

因みに、この寺（「おんめさま」の通称で知られる）は、私の父が幼少の頃、初めて鎌倉に来た折り、この本堂に間借りさせて貰ったという貧しい時代の藪野家には甚だ因縁の深い寺なのである。さればこそ、敢えて詳しく添えた。

「耳袋中編に、産後死せる女、人に預たる嬰兒を抱きに來りし事を載す」紛らわしい書き方しておくれな、熊楠センセ！　これは巻之二の「幽霊なしとも難極（きはめがたき）事」でんがな！　「耳嚢」は江戸の南町奉行（寛政一〇（一七九八）年として名奉行の名の高い旗本根岸鎮衛（しづ（ず）もり　元文二（一七三七）年～文化一二（一八一五）年）が書いた十巻全一千話からなる随筆で、私は六年弱かけて二〇一五年に全話の電子化訳注を終わっている。

『肥後の人に聞けば、其地に「安からう」といふ怪あり、産婦の靈にして、雨夜に安かろうと呼ぶとこは難産を心配せし執念の残りしと云ふ意か』不思議なことに、どこにも見つからない。何らかの方法で記録を残しておかないと、忘れ去られてしまう。ご存知の方は、是非、御情報を戴きたい。ここに追記したく思う。

「蒼鷺など夜燐光を放つ」「古今百物語評判卷之三　第七　叡山中堂油盗人と云ばけ物附青鷺の事」の私の注で考証し、幾つかの怪談もリンクさせてあるので、そちらを読まれたい。なお、古くより怪を成すと誤認（真正の鷺の妖怪譚・怪奇譚は江戸以前のものでも――哲人の如く黙想しているかのように佇んでいる彼らにして予想外かも知れないが――実は極めて少ないのである）されたものは、「蒼鷺」とあっても、それは現在のペリカン目サギ科サギ亜科アオサギ属亜アオサギ亜種アオサギ *Ardea cinerea jouyi* ではなくて、サギ亜科ゴイサギ属ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* であることが多い。

「Bent, op.cit, p. 181 にも希臘のシキノス島にて、夜戸外に乾せし衣は、香爐にて薫べし後ならでは、決して産婦と嬰兒に着せず、此島濕氣甚ければ、全く無稽の冗談に非じ、と云り」既出のイギリスの探検家・考古学者・作家ジェームス・セオドア・ベント（James Theodore Bent　一八五二年～一八九七年）の「キクラデス諸島又は島内のギリシャ人たちの生活」（*The Cyclades; or, Life among the Insular Greeks*）。「Internet archive」で調べると、原本の当該ページはここ。

＊

For many days to come no one is allowed to enter the house after sunset, and mother and babe are strictly forbidden to wear clothes which have been exposed to the stars unless they have been

fumigated by a censer. There is something practical in this rule, for in damp Sikinos everything that is exposed to the night air becomes impregnated with moisture.

＊

『今昔物語二十七巻三十章に、「今は昔、ある人方違えに、下京邊に幼兒を具して行けり、……』「今昔物語集」巻第第二十七の「幼兒爲護枕上蒔米付血語第三十」（幼き兒、護らんが爲めに、枕上に蒔く米に、血、付く語第三十）。「□」は欠字。

＊

今は昔、或る人、方違へに下邊［やぶちゃん注：下京附近。］なりける所へ行きたりけるに、幼き兒を具したりけるに、其の家に、本より靈有りけるを知らで、皆、寢にけり。

其の兒の枕上に、火を近く燃して、傍らに、人、二、三人許り寢たりけるに、乳母、目を悟して、兒に乳を含めて、寢たる樣にて見ければ、夜半許りに、塗籠の戸を細目に開けて、其より長五、六寸許りなる、五位共の、日の裝束［やぶちゃん注：束帯姿。］したるが、馬に乘りて、十人許り次きて、枕上より渡りけるを、此の乳母、

『怖ろし。』

と思ひ乍ら、「打ち蒔きの米」を、多らかに搔き㪷みて、打ち投げたりければ、此の渡る者共、

「散」

と、散りて、□□失にけり。

其の後、彌よ怖しく思ける程に、夜嗟けにければ、其の枕上を見ければ、其の投げたる「打ち蒔きの米」毎に、血なむ、付きたりける。

『日來、其の家に有らむ』［やぶちゃん注：予定では、その家での「方違え」は数日に及ぶはずだったのである。］

と思ひけれども、此の事を恐れて、返りにけり。

然れば、

「幼き兒共の邊には、必ず、『打ち蒔き』を爲すべき事也。」

とぞ、此れを聞く人、皆、云ひける。亦、

「乳母の心の賢くて、『打ち蒔き』をばしたる也。」

とぞ、人、乳母を讃めける。

此れを思ふに、知らざらむ所には、廣量して［やぶちゃん注：うっかりとして。］、行き宿りすべからず。世には此る所も有る也、となむ語り傳へたるとや。

＊

実際、京の市街はおろか、内裏の中でさえも、古くからゴースト・スポットが意想外に甚だ多くあったことは御承知の通りである。しかし、私は、この枕元を過ぎて行く「小人の五位の行列」となると、即座に私の偏愛する「病草紙」（絵巻。平安末から鎌倉初期頃に描かれた詞書附きの疾患や治療法を描いたもので、作者未詳）の、一般に「小法師の幻覚を生ずる男」と通称される一枚を真っ先に思い出してしまう（ネットにはいい画像がないね。yamasan氏の「桃山日記」の「病草子を読む　その2」のこちらのブログ主のキャプション入りの画像をリンクさせておく）。さすれば、怪しくて「危険が危ない」のはマイクロ五位ゴブリンなん

**ぞではなくして、この乳母自身である。視覚的幻覚を見るのは、かなり進行した統合失調症の可能性が高い。この童子も彼女のためにどうなったものか……判らぬぞ……**

『御伽草子の「一寸法師」に、一寸法師「或時みつ物のうちまきとり、……』一寸法師の本格展開のプレ部分。岩波古典文学大系版を参考にして示す。一寸法師のゴブリン的な悪巧み部分で、元を読まれたことのない方は、結構、一寸法師が嫌いになるやも知れぬ（正直、私はこれで大学時代に「御伽草子」は嫌いになったのを思い出す。演習で一年掛かりで「物くさ太郎」だけを延々と講義されたのも別な原因の一つである）。

＊

かくて年月送る程に、一寸法師、十六になり、せいはもとのまゝなり。さる程に、宰相殿に、十三にならせ給ふ姫君おはします。御かたちすぐれ候へば、一寸法師、姫君を見奉りしより思ひとなり、

『いかにもして、案をめぐらし、わが女房にせばや。』

と思ひ、ある時、みつものゝうちまき取り、茶袋に入れ、姫君の臥しておはしけるに、はかりことをめぐらし、姫君の御口（おくち）にぬり、さて、茶袋ばかり持ちて、泣きゐたり。

宰相殿、御覽じて、御尋ねありければ、

「姫君の、わらはが、このほど、取り集めて置き候（さふらふ）うちまきを、取らせ給ひ、御參り候。」

と申せば、宰相殿、大きに怒らせ給ひければ、案のごとく、姫君の御口に、つきてあり。

「まことは。いつはりならず。かかる者を都に置きて何（なに）かせん。いかにも、失（うしな）ふべし。」

とて、一寸法師に仰せつけらるる。一寸法師、申しけるは、

「童が物を取らせ給ひて候ほどに、とにかくにもはからひ候へとありける。」

とて、心のうちにうれしく思ふこと限りなし。姫君は、ただ、夢の心地して、あきれはててぞおはしける。

＊

この「みつ物のうちまき」の「みつ物」はよく判らない。岩波では『みつきもの（貢物）の誤りか』と頭注（市古貞次校注）する。さすれば、次の注と連結する。

『「つゝを」米』現代仮名遣「つつおごめ」。「筒落米」。年貢米は「サシ米」（刺米・差米・指米）と呼ばれた品質検査を行った。竹筒の先を斜めに切った「サシ」と呼ばれる道具を用い、これを米俵へ突き挿し、その竹筒へ零れ入った米を調べた。その検査の後の、竹筒の米や、その作業の途中で俵から零れ落ちた米を「つつを米」と呼んだ。熊楠はその現実風俗としての落ち零れ散る米に、鬼を打ち払うために撒き散らす米という呪的機能が「今昔物語集」の話にも、「一寸法師」のそれにも（後者はその意味が二重に顕在化しており、このシークエンスの直後に奇体な島へ姫と二人して向かい、鬼退治が行われるのである）掛けてあるのを、甚だ興味深い、非常な古えより魔除けとして米を散布する習慣があったことを指示しているのである。この米の霊力「稲霊（いなだま）」のそれを用いた呪（まじな）いは、既に「源氏物語」にも見られるのである。

「Frazaer, 'Golden Bough'」イギリスの社会人類学者ジェームズ・ジョージ・フレイザー（James George Frazer　一八五四年～一九四一年）が一八九〇年から一九三六年の四十年以上、まさに半生を費やした全十三巻から成る大著で、原始宗教や儀礼・神話・習慣などを比較研究し

た「金枝篇」（*The Golden Bough*）。私の愛読書の一つである。］

［やぶちゃん注：冒頭のそれは、出口米吉の初出の一四三ページ（最終コマ）から、一四四ページ（2コマ目）にかけての部分を指す（PDFは分離している）。私の電子化はこちら。］

（一四三頁兒啼を止るに偉人の姓名を呼ぶ事）歐州各部、古來タークキン、ブラックダグラス、ハンニアデス、マールポロ、那翁［やぶちゃん注：「ナポレオン」。］、ウエリントン、英皇リチヤード一世、ナルセス、ラミア、リリツス、ジヨン、ニツコルソン［やぶちゃん注：底本は、「ジヨン」の後の読点に下線を含まないが、初出で訂した。］、タルボツト卿抔の名を以て兒啼を止め、ケンタツキー州の一部にクレーヴーハウス［やぶちゃん注：底本は「ヴ」を「ゾ」とするが、初出で訂した。］、墨西哥［やぶちゃん注：「メキシコ」。］でドレークと呼で、躁兒を靜むる（N. and Q., 10th ser., x, p. 509, 1908; xi, p. 53, 1909; Rundall, `Memorials of the Empire of Japan,` 1850, p. 54）風今に殘れり、近時の小說にグラツドストーンと呼で兒をおどすことすら有り、吾輩幼時、殿樣、親爺抔來れりと聞いて、騷動を止めしこと每度なりき Rundall, l. c. に、慶長十八年六月、英艦長サリス、平戶侯に饗せらるゝ記あり（此時、英艦長の私室に、羅［やぶちゃん注：羅馬（ローマ）。］の姪神キヌス美童クピツトと戲るゝ圖を揭たるを、日本上流婦人、葡人［やぶちゃん注：ポルトガル人。］に天主敎化され居たるもの、歸命頂禮して、マリアと基督母子也とせる珍談有、百家說林第一板所收、司馬江漢の春波樓筆記八十八頁にも摘出せらる）中に、平戶人、英吉利黑船とて歌唄ひ、劒舞して、英人西班牙［やぶちゃん注：「スペイン」。］船を掠むる［やぶちゃん注：「かすむる」。］奪わんとする。］の狀をなし、小兒輩を威す［やぶちゃん注：「おどす」。］と有、後年難波に黑船忠右衞門有しも、人に怖らるゝこと黑船の如くなりし故ならん、多少の誇張は有るべきも、近年石川縣の遠藤秀景氏、名兒啼を止むるに足れりと云事新紙［やぶちゃん注：新聞記事。］にて見たり、蒙昧の蕃民、敵襲來するを憚り默靜を重んずるは、サビムバ人の祖先、鷄鳴の爲に在處を知られて、度々海賊に犯されし故、全く林中の浪民となり、鷄を忌むこと甚しく（Logan, ‘The Orang Binua of Johore,’ The Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia, vol. i, Nov., p.296, 1847）、ブラジルのツピ族の一酋長、朝早く村中の廬［やぶちゃん注：「いへ」。家。］を廻りあるき、鋭き魚齒もて、小兒の脛をヒツカク、是れ小兒從順ならぬ時、父母、酋長搔きに來ると言て之を脅さんが爲なり（Hans Stade, `Captivity in Brazil in A. D. 1547-1555,` 1874, p. 144）、近世伊太利の山賊ビツツアロが、官軍を寒洞中に避けし時、兒啼て止ざるを怒り、其脚を操て［やぶちゃん注：「とつて」。］腦を岩壁に打付け、碎て［やぶちゃん注：「くだきて」。］之を殺しければ、其妻之を恨で、翌夜夫の睡に乘じて、之を銃殺し、其首を獻して重賞を得、更に他人に嫁して良婦慈母たりしと云ふ（D. Hilton, `Brigandage in S. Italy,` 1864, vol. i, pp. 171-2）、古スパルタ、又殊に我邦など尙武の俗、男は泣ぬものと幼少より敎えしは［やぶちゃん注：ママ。］、主として女々しき振舞無なからしめんとの心がけ乍ら、兼て輕躁事を敗らざる可き訓練にて、戰鬪多き世には、兒啼を戒めて敵寇に見顯されぬ事、一人にも一社會にも、大緊要の件なるべし、趙の始祖と源義滿、幼少乍ら啼ずして身を全せし由、風俗通と碧山日錄に出づ、今、三國志舊注、倭漢三才圖會、世事百談などを案ず

るに、張遼合淝の戰に吳人を震懾［やぶちゃん注：「しんしやう」。震えおののくこと。］せしめし故、其名を呼んで兒啼を止し迄にて、上述の諸例と比較して、理は能く通ぜり、別に出口氏の言の如き、兒の爲に魔を威し去るの意と見えず、加之［やぶちゃん注：「しかのみならず」。］支那に麻胡希臘にラミア（Bent, p. 98）抔、鬼來ると言て兒を脅し靜むること少なからず、之をも魔を去らんがために、更に小兒が好まざる他の魔の名を呼で、之を招くと云はば、其辨は迂にして、その說は鑿せりとやいはまし、事物紀原には、會稽有鬼、號麻胡、好食小兒腦、遂以在小兒啼、則謂麻胡來恐之、乃啼聲絕と有て、鬼なれども、空華日工集一には廣記を引て、石勒の將、太原の胡人麻姓のもの大惡人なりし故、母其名を號して啼兒をおどすとせり、吾邦に元興寺［やぶちゃん注：「がこじ」。］と唱て小兒をおどすも此類にて、若し元興寺の鬼を呼來て、他の兒に害ある鬼を嚇すと言ば、直ちに其元興寺の鬼を平げたる道場法師［やぶちゃん注：「だうぢやうほふし」。］の名を呼で、强弱の諸鬼を合せて之を驅るの手段を、何故其時代の父母が氣付かざりしにや（群書類從卷六十九道場法師傳參看）、因に云ふ、嬰兒をあやして「レロレロ」と云ふは、今も紀州一汎に行はる、これは英語に所謂 Tongue-Twister（舌捩り［やぶちゃん注：「したもじり」。］）の最も簡單なる者で、小兒に早く言語を發せしめんとの一助なり、吾邦の小兒、親を困らすほど成長せんに、「レロレロ」位で啼止むべきかは「レロレロ」と遼來と稍や音近き故、博識を衒わん［やぶちゃん注：「てらはん」。］とて、前者後者に出づと說き出せるなるべし、實際「レロレロ」と呼で小兒を怖し賺す［やぶちゃん注：「おどしすかす」。］こと有しに非じ、

［やぶちゃん注：「タークヰン」セクストゥス・タルクィニウス（英語：Sextus Tarquinius　？～紀元前五〇九年）。王政ローマ最後の王ルキウス・タルクィニウス・スペルブス（タルクィニウス傲慢王）の三番目の末子。ローマ神話によれば、彼が人妻ルクレティアを陵辱したことが、結果として王政の崩壞と共和政の設立を招いたとされる。同じ姓であり、先王セルウィリウスを殺害、ラティウム地方に覇権を伸ばしたという凶惡な父もそれらしく見えるが、後に示す原拠記事から、伝説的人物（実在は疑われている）ルクレティアに纏わる一五九四年に書かれたシェイクスピアの物語詩「ルークリース凌辱」（*The Rape of Lucrece*）に基づくとあるから、やはり、子の方である。

「ブラツクダグラス」Black Douglas。十二世紀のスコットランドで最も強力な一族の一つであったブラック・ダグラス家。特にその創始者にして、スコットランド国王ロバートⅠ世の筆頭副官の一人であったジェイムス・ダグラス卿（James Douglas　一二八六年～一三三〇年）の異名。聖地への埋葬を望んだ主人の最後の望みを果たすために、その心臓を携えて、ムーア人相手の十字軍遠征に従軍したという逸話が知られており、部下の兵たちは、そうした彼を恐れ、「ブラック・ダグラス」と呼んだ。

「ハンニアデス」ハンガリー国王マティアス・ハンニアデス（Matthias Hunniades　一六二一年～一二五〇年）

「マールボロ」イングランド貴族の公爵位マールバラ公爵（Duke of Marlborough）か。この爵位は一七〇二年に「スペイン継承戦争」でイングランド軍司令官を務めた初代マールバラ伯爵ジョン・チャーチル（John Churchill　一六五〇年～一七二二年）に授与されたことに始

まる。後のイギリス首相ウィンストン・チャーチルやイギリス皇太子妃ダイアナ・スペンサーの先祖でもある。

「ウエリントン」ウェリントン公爵（英: Duke of Wellington）は、イギリスの公爵位で「ナポレオン戦争」の英雄初代ウェリントン侯爵アーサー・ウェルズリー（Arthur Wellesley　一七六九年〜一八五二年）が一八一四年に叙されたのに始まる。連合王国貴族の中では筆頭爵位。

「英皇リチャード一世」第二代イングランド王リチャードI世（Richard I　一一五七年〜一一九九年）。彼のウィキによれば、『生涯の大部分を戦闘の中で過ごし、その勇猛さから獅子心王』（Richard the Lionheart／フランス語：Cœur de Lion）と称され、中世ヨーロッパに於いて騎士の模範と称えられたが、十年の在位中、イングランドに滞在したのは、僅か六ヶ月で、『その統治期間のほとんどは戦争と冒険に明け暮れた』とある。

「ナルセス」東ローマ帝国の政治家で宦官のナルセス（ラテン文字転写：Narses　四七八年〜五七三年）か。ユスティニアヌスI世に仕え、東ゴート王国を征服した人物。

「ラミア」Lamia。古代ギリシア伝説の女の妖怪。子供を攫うとされ、言うことを聞かない子供を嚇す際、この名を出す。元はゼウスに愛された美女であったが、嫉妬したヘラに子を殺されてより、妖女に変じたとされ、若者を誘惑し、血肉を飲食したとも言われる（中経出版「世界宗教用語事典」に拠る）。

「リリツス」Lilith。ユダヤの伝承で、男児を害すると信じられていた女性の悪霊。「リリト」とも表記される。ウィキの「リリス」によれば、通俗語源説では「夜」を意味するヘブライ語「ライラー」と結びつけられるが、古代バビロニアの「リリートゥ」（シュメール語の「リル」、「大気」「風」の意）とも言われる。旧約聖書では「イザヤ書」に言及があるのみで、そこでは夜の妖怪或いは動物の一種とされる。また、『古代メソポタミアの女性の悪霊リリートゥがその祖型であるとも考えられている。しばしば最初の女とされるが、この伝説は中世に誕生した。アダムの最初の妻とされ、アダムとリリスの交わりから悪霊たちが生まれたと言われ』、『そのリリスの子どもたちはヘブライ語でリリンとも呼ばれる』。『アダムと別れてからもリリスは無数の悪霊たち（シェディム）を生み出したとされ』、十三『世紀のカバラ文献では悪霊の君主であるサマエルの伴侶とされた』。『サタンの妻になったという俗説もある』とある。私は「新世紀エヴァンゲリオン」に登場する呼称として、気になって調べたことがある。

「ジョン、ニツコルソン」アイルランド出身で東インド会社所属の軍人ジョン・ニコルソン John Nicholson　一八二二年〜一八五七年）か。一八五七年のインド反乱を冷酷に鎮圧する中で亡くなったが、イギリスでは讃美を受けた一方、インドでは悪名を馳せた。

「タルボット卿」イングランドの貴族・軍人で初代シュルーズベリー伯爵ジョン・タルボット（John Talbot, 1st Earl of Shrewsbury　?〜一四五三年）であろう。「百年戦争」中のイングランド軍の主要な指揮官の一人で、ランカスター朝に於ける唯一のフランス軍総司令官であった。

「クレーヴーハウス」スコットランドの貴族・軍人で初代ダンディー子爵ジョン・グラハム・オブ・クレーヴァーハウス（John Graham of Claverhouse, 1st Viscount Dundee　一六四八年〜

一六八九年）はステュアート朝に仕え、ジャコバイトに与し、名誉革命政権に反乱を起こし、「流血のクレーヴァーズ（Bluidy Clavers）」とも呼ばれる。
「ドレーク」フランシス・ドレーク（Francis Drake　一五四三年頃～一五九六年）であろう。エリザベス朝のイングランドのゲール系ウェールズ人航海者にして海賊・海軍提督で、イングランド人として初めて世界一周を達成した人物として知られる。彼のウィキによれば、『ドレークはその功績から、イングランド人には英雄とみなされる一方、海賊行為で苦しめられていたスペイン人からは、悪魔の化身であるドラゴンを指す「ドラコ」の呼び名で知られた（ラテン語名フランキスクス・ドラコ（Franciscus Draco）から）』とある。
「N. and Q., 10th ser., x, p. 509,1908; xi, p. 53, 1909」「Internet archive」で原本が見られ、前者はいちらの左ページの、

＊

NAMES TERRIBLE TO CHILDREN. —In many a crisis in history the name of some conqueror or tyrant has been used to still unruly children. I am conscious of having read of many such, but not having the fear of ` N. & Q.` before my eyes, I failed to make the necessary notes, and now plead guilty
in an apologetic query. Can anybody add to my brief list, and give serious, not mere
farcical, authorities ?

Tarquin. Shakespeare, ` Rape of Lucrece ` (` Poems,` ed. R. Bell, p. 111).

Black Douglas, 1319. Sir W. Scott,
` History of Scotland,` 1830, i. 137.

Hunniades, 1456. Hallam, * Europe during Middle Ages,` 1872, ii. 106.

Marlborough.

Napoleon Bonaparte.

Wellington.　　W. C. B.

＊

という投稿で、後者はいちらの右下から次のページにかけての、

＊

NAMES TEBRRIBLE TO CHILDREN (10 S. x. 509 ; xi. 53, 218, 356, 454).— To the names that have appeared surely Morgan should be added. See Prof. Rhys`s ` Celtic Folklore,` 1901, vol. i. p. 372. It is about the lake of Glasfryn in Wales : —

" Mrs. Williams-Ellis`s own words : ` Our younger boys have a crew of three little Welsh boys who live near the lake, to join them in their boat-sailing about the pool and in camping cm the island, &c. They asked me once who Morgan was, whom the little boys were always saying they were to be careful against. An old man living at Tal Llyn, " Lakes End," a farm close by, says that as a boy he was always told that " naughty boys would be carried off by Morgan into the lake." Others tell me that Morgan is always held to be ready to take off troublesome children, and somehow Morgan is thought of as a bad one.`"

There is more, but any one interested had better see the book.

S. L. PETTY.

Ulverston.

The name of Grimshaw was a bugbear to children in the latter part of the eighteenth century. He was Incumbent of Haworth, near Bradford, the home of the Brontës.

Macaulay in his essay on Warren Hastings tells us :

" Even now, after the Lapse of more than 50 years, the natives still talk of him as the greatest of the English ; and nurses sing children to sleep with a jingling ballad about the fleet horses and richly caparisoned elephants of Sahib Warren Hastein."

JOHN PICKFORD, M.A.

Newbonrne Rectory, Woodbridge.

＊

という記事があるものの、そこから熊楠は引いてはいない。

「Rundall,`Memorials of the Empire of Japan,` 1850, p. 54」作者はトマス・ランドール（Thomas Rundall）なる人物であるが、書かれている内容は江戸初期に徳川家康に外交顧問として仕えたイングランド人航海士三浦按針の日本名で知られるウィリアム・アダムス（William Adams　一五六四年～元和六（一六二〇）年）から得た部分が多いようだ。当該書「Internet archive」で原本が読めるが、ここの左ページの頭から四行目に、フランス人が子供を嚇すために「Lord Talbot」の名を出す習慣が書かれてある。

「近時の小説」事例不詳。

「グラッドストーン」Gladstone。近頃の小説と言うところから思うには、イギリスの政治家で貿易商にして黒人奴隷農場主であった初代准男爵ジョン・グラッドストン（John Gladstone, 1st Baronet　一七六四年～一八五一年）か。彼のウィキによれば、一七九二年『以降、イギリスはフランスと二十数年に渡る戦争に突入したが（フランス革命戦争、ナポレオン戦争）、これによって貿易は賭博的事業となり、貿易商は極端に成功する者と極端に失敗する者の二極分化し』、『グラッドストンスは成功者の側に入った』。『彼は』当初、『東インドでの貿易を主としていたが、後には西インド貿易にも手を伸ばした。また西インド、英領ギアナ、英領ジャマイカなどにおいて広大なサツマイモ耕地、コーヒー耕地を所有した。イギリス本国においては奴隷貿易は』一八〇七年に『禁止されたが、大英帝国植民地においては』、『奴隷貿易は未だ合法であり、グラッドストン』『も大量の黒人奴隷を自身の農地で酷使した』。一八二三年には、『ギアナでイギリス農場主の支配に抵抗する黒人奴隷の一揆が発生したが、その一揆の中心地はグラッドストンス所有の農場だった』とある。

「慶長十八年」一六一三年。先の書のこちらに一六一三年六月十一日（慶長十八年五月四日）に平戸に到着した旨の記載があり、以下の「平戸人、英吉利黒船とて歌唄ひ、劒舞して、英人西班牙船を掠むるの狀をなし、小兒輩を威す」というのは先の「Rundall,`Memorials of the Empire of Japan,` 1850, p. 54」で示した原本の左ページとその前の部分に相当する。

「英艦長サリス」イギリス船として初めて日本に来航したイギリス東インド会社の貿易船「クローブ号」（Clove）の指揮官ジョン・セーリス（John Saris　一五七九年或いは一五八〇

年〜一六四三年）。イギリス東インド会社はアダムス（三浦按針）がイギリス本国に送った書簡によって日本事情を知り、国王ジェームズI世の許可を得て、彼を仲介人として日本との通商関係を結ぶ計画を立て、艦隊司令官であった彼を日本に派遣したのであった。

「姪神ヰヌス」ローマ神話の愛と美の女神ウェヌス（古典ラテン語：Venus）。言わずもがな、本邦では現在は英語読みの「ヴィーナス」が一般。

「美童クピット」Cupid。キューピッド。

「百家説林」明治後期に作られた江戸時代の学者・文人らの随筆・雑考等、八十六部を集録した叢書。今泉定介・畠山健の校訂。明治二三（一八九〇）年から三年掛かりで十巻本として刊行し、同三十八から翌年には既刊を正編二巻とし、続編三巻と索引一巻を刊行している。

「司馬江漢の春波樓筆記」江戸後期の蘭学者で画家として知られる司馬江漢（延享四（一七四七）年〜文政元（一八一八）年）が著した随筆集。文化八（一八一一）年成立。一巻。著者の目に映じた江戸末期の社会風俗についての所感や、人間観・死生観・学問観を記したもので、当時の世相を窺う上でも貴重な資料。約二百項目の全体に、著者の鋭い世相批判があふれ、近代に通じる観点が見られるのが興味深い（平凡社「世界大百科事典」に拠った）。

まず、幸いにして、小泉八雲がこの話を記しているので、私はそれとは別に既に知っていた。

「神國日本　戸川明三譯　附やぶちゃん注（６０）　ジェジュイト教徒の禍（Ⅴ）」に、「キアプテイン・サリスは一六一三年に日本から手紙を送つて、極めて暗示的な感傷的な一事件を記してゐる。彼は言つて居る。『私はやや上注の多くの婦人に、私の船室に入つてもよいといふ許を與へた。この室にはヴイナスが、その子息のキユウピツドをつれてゐる繪が、大きな額縁に嵌められて、幾分だらしない飾り方で懸かつてゐた。彼等は之をマリヤとその子であると思つて、ひれ伏し、非常な信仰を表はして、それを禮拜した。そして私に向つて囁くやうに（信徒でなかつた仲間の誰れ彼れに聞こえないやうに）自分達はキリスト教徒であると云つた、之によつて吾々は彼等がポルトガルのジエジユイト派によつて改宗させられたキリスト教徒であることを知つた』と」とある。八雲のそれは、元書簡の英訳からの引用である。さて、「春波樓筆記」から引く。所持する吉川弘文館随筆大成版を参考に、漢字を恣意的に正字化して示す。一部に無関係な記載があるので、前を略してある。探す方は、「随筆大成」第一期第二巻の五十八ページの「〇予が近隣に八十余の老人あり」で始まる条々の中間にある。

＊

又曰く、壱岐守松浦侯［やぶちゃん注：松浦（まつら）静山。私は彼の「甲子夜話」の電子化注を手掛けている。］予に向つて曰く、朽木隱岐守に蘭書あり。ウエイレルドベシケレイヒングと云ふ、此の書を求めん事を欲す、余爾を以てす。余江漢諾して應命、則朽木侯に謁して此の事を話す、竟に其の書を松浦侯に贈る。其の中イギリス船平戸島に入津したる事を誌す。其の頃松浦法眼と云ふ人隱居して政治を取る。或時婦女を從へ、イギリスの船に乘る。船の内數品の額あり。其の中に春畫ありけるを、婦人是を熟視せずして拜す。イギリス人おもへらく、嚮［やぶちゃん注：「さき」。］の頃吾國の佛法［やぶちゃん注：キリスト教のことをかく言っているので注意されたい。］、此の日本に來る事あり、其ならん事を思ひて春畫を拜するかと。［やぶちゃん注：以下略。］

*

「黒船忠右衛門」これ自体は歌舞伎男伊達狂言の主人公の名で、モデルは宝永・享保年間（一七〇四年〜一七三六年）頃に実在した大坂堂島の男伊達であった根津四郎右衛門こと、沖仲仕住吉屋四郎右衛門とされる。上町の町奴（片町の馬士頭とも）茶筌庄兵衛との新町橋での達引を、当時、侠客役で古今独歩の初代姉川新四郎が自ら脚色し、新町橋の船宿の黒船の行灯から黒船忠右衛門の名で演じ、大当たりをとった。以後、歌舞伎・浄瑠璃に「黒船忠右衛門」物と総称される一連の作品が書かれ、明治期まで上演された。新四郎が、この役でかぶった投頭巾は黒船頭巾、一名、姉川頭巾と呼ばれ、一世を風靡し、新四郎は後年、頭巾を中山新九郎に譲ったが、没後、三途の川を頭巾姿で渡河中、鬼に出会ったという伝説が生まれたという（「朝日日本歴史人物事典」に拠る）。

「遠藤秀景」（安政元（一八五四）年〜明治四四（一九一一）年）は政治家・漁業家・自由民権運動家。石川県立中学卒。彼のウィキによれば、『加賀藩士で素封家の父、遠藤柳の長男として加賀国河北郡浅野村（石川県河北郡中口村、小坂村を経て現金沢市小橋町および昌永町）に生まれる』。『幼くして関兵次郎、矢野三内、太田清蔵、秦秀植、南部虎之助などに』ついて、『剣術や槍術を学んだ』。『ついで』、『島田定静の門に入り』、『文学を修め、同門の塾長となった』。明治一〇（一八七七）年、『西南戦争が勃発すると』、『島田一郎らが西郷隆盛を援けることを主張したが、これに反対した』。『翌年、西郷に与したとして一時投獄されるが赦され』、明治十三年、『内務省より就官するよう声が掛かる』も、『これを辞し、同年』、『父の訃報と共に郷里に戻り、金沢区選出の石川県会議員となった』。『この頃、盈進社を設立』、『以降』、『国会開設請願運動に関与』した。『ついで』、『旧藩主前田家に士族授産金を要請し』、『北海道に渡り、岩内に前田村を拓』いて、『漁業事業に着手』し、『千島海域などで操業した』。後、『再び石川県会議員となり、同議長を歴任した』。明治二十三年）七月に行われた第一回『衆議院議員総選挙では石川県第』一『区から出馬し』、『当選』、『衆議院議員を』一『期務め』ている、とある。

「Logan, “ The Orang Binua of Johore,” The Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia, vol. i, Nov., p.296, 1847」既注であるが、再掲すると、作者ジェームス・リチャードソン・ローガン（James Richardson Logan　一八一九年〜一八六九年）は、イギリスの弁護士で民俗学者。インドネシアやマレー半島の民俗を調べ、「インドネシア」という語を広めた人物でもある。指示すると思われる当該原本（但し、発行年が違う）部分を見い出せない。されば、

「サビムバ人」もお手上げ。

「ブラジルのツピ族」ポルトガル語「tupi」。南アメリカ大陸で用いられる七十ほどの言語からなる語族トゥピ語族。狭義にはその中のトゥピ語を用いる一族。分布域はウィキの「トゥピ語族」を見られたい。因みに、「カシューナッツ」（cashew nut）の木（ムクロジ目ウルシ科カシューナットノキ属カシューナットノキ *Anacardium occidentale* ）は南米ブラジル並びに西インド諸島が原産地とされているが、「カシューナッツ」の名の由来は、このブラジルのツピ族の言葉でそれを指す「アカジュ」が十六世紀にポルトガル人に伝わり、「カジュー」と訛ったのが元で、広く伝えられたものらしい。

「Hans Stade」綴りが違う。Hans Staden（一五二五年〜一五七六年）が正しい。ドイツの航

海士で探検家。ブラジルを踏査したが、そこで出会ったトゥピ族のある集団がカニバリズムをすると書いて、大ベストセラーとなった。この人肉食を嘘とする学者もいたが、現在は民俗的事実として支持されているようである。

「ビッツァロ」Bizzarro。「ビッツァロ」はイタリア語で「奇抜な・風変わりな」という意であるから、綽名であろう。以下に示す原本を見ると、一八〇一年から一八一〇年頃に荒らしまわった山賊のようである。

「D. Hilton, `Brigandage in S. Italy,` 1864, vol. i, pp. 171-2」正式書名は「*Brigandage in South Italy*」（南イタリアの山賊）で、作者は学者・新聞記者・大学学長にしてリンカーン政権下で大使を務めたウィラー・デヴイッド・ヒルトン（Wheeler David Hilton　一八二九年～一九〇二年）。本書はイタリア史に関する彼の著作でも最も知られた著作である。当該部は「Internet archive」の原本のここ。それを見ると、恨んだ母親（ビッツァロの部下の妻と子であるようだ）は眠っているビッツァロの頭を銃で撃ち、首を切断して、盗賊団を掃討していた司令官のもとに持って行き、報酬を得、三十五年後までミレット（Mileto）という町に幸福に暮らした、と記されてある。但し、ビッツァロのことは前の「168」から、ずっと書かれてある。

「趙の始祖」戦国七雄の一つである趙（紀元前四〇三年～紀元前二二八年）の始祖は趙無恤（ぶじゅつ／むじゅつ　？～紀元前四二五年）。

「源義満」室町幕府第三代将軍足利義満（正平一三／延文三（一三五八）年～応永一五（一四〇八）年／在職：正平二三（一三六八）年～応永元（一三九四）年十二月）のこと。

「風俗通」後漢末の応劭の撰した「風俗通義」の略称。さまざまな制度・習俗・伝説・民間信仰などについて述べたもの。但し、散佚しており、現行の纏まっている断片にはそれらしい記載が見あたらないから、熊楠が見たのは、何かに引用されたもののように思われる。

「碧山日録」南方熊楠「本邦に於ける動物崇拜（追加発表「補遺」分）」に既出既注。

「世事百談」随筆家で雑学者の山崎美成（よししげ　寛政八（一七九六）年～安政三（一八五六）年）の書いた考証随筆。天保一二（一八四一）成立で同十四年の板行。当該部は巻之二の以下。「日本古典籍ビューア」で原本当該部を視認して示す。句読点と記号を添えた。

*

○児啼を止る諺　手々甲

「籠耳」といふ冊子に、小児の啼を止るとき、「むくりこくりの鬼が來る」といふこと、後宇多院の弘安四年［やぶちゃん注：一二八一年。］、北條時宗が執權のとき、唐土元の世祖、たびたび日本をせめけることあり。元の國を蒙古國とも、いふなり。世祖よりこのかた大元と号せり。さるによつて、「むくりこくり」といふは、「蒙古國裏」といふことの、いひあやまりなり。「鬼がくる」とは、この夷賊をいふなり。又、いとけなき子を威謙ときに、顔をしかめて、「元興寺」と、いふことあり。むかし、大和國元興寺といふ寺に、鬼すみて、人をなやます、とて、世間、さはがしきこと、あり。「本朝文粹」に見えたり。これよりして、「元興寺」とて、顔をしかめておどせば、小児、なきやむ、と、いへり。又、小児をすかしゆぶる［やぶちゃん注：「揺ぶる」。揺り動かす。］とき、「虎狼來々々々」と、いふこともあり。もろこしにては、「張遼來」といへば、小児、なきやむ、とあり。張遼といふもの、たけき兵にてありし、となり。又、日本にて、手をくみ、顔にあて、「手々甲」と、いふ

て、小児をおどすこともあり、といふこと、見えたり。「むくりこくり」のことは、「櫻陰腐談」に見ゆ。「元興寺」のことは、「南畝莠言」**[やぶちゃん注：現行では「なんぽしゅうげん」と読んでいるが、正しくは「なんぽゆうげん」が正しいので、歴史的仮名遣はこれでよい。]**にありとおぼえたり。「手々甲」といふことは、今、土佐國にて、児女などの常の遊戯にすることとて、その國人祖父江氏の、過しころ、訪ひ來られしをりの物がたりに、『その戯れは、左右の手を組合せて、手の甲を、たがひに、うち鳴らしながら、となへて、その詞の終るところに、あたれるものを、「鬼」と、さだむる』よし。その唱へ詞、

むかいの河原で土器やけば、
五皿六皿七皿八皿、
八皿めにおくれて、づでんどつさり、
それこそ鬼よ、これこそ鬼よ、
蓑きて、笠きて、くるものが鬼よ。

＊

「張遼」（一六五年或いは一六九年～二二二年）は後漢末から三国時代の武将。後漢末の動乱期に丁原・董卓・呂布に仕えた後、曹操の配下となり、軍指揮官として活躍した。

「合淝の戰」「合肥の戰ひ」でよい。地名の読みは「ごうひ」或いは「がつぴ（がっぴ）」。曹操領の南方の要衝の合肥を巡って、魏と呉の間で行われた戦いで、後に三国時代を通じて、この方面では攻防が続けられたが（二〇八年から二五三年まで実に四十五年も間歇的に続いた）、ついにこの戦線の決着がつくことはなかった。孫権が劉備に荊州の一部を返還する代わりに曹操を攻めるという依頼から始まったもので、二一五年に起こった戦いが最も知られ、十万人の孫権軍が僅か七千の曹操軍に大敗を喫した。その時、活躍したのが、この張遼である。詳しくはウィキの「張遼」の「合肥戦線」がよい。

「麻胡」後注「事物紀原」参照。

「ラミア」（ラテン文字転写：Lamiā）はギリシア神話に登場する古代リビュアの女性で、ゼウスと通じたため、ヘーラーによって子供を失い、その苦悩のあまり、他人の子を殺す女怪と化した。眼球を取り出すことが出来るが、これはヘーラーに眠りを奪われた彼女にゼウスが憐れんで与えた能力ともされる。「ラミア」は、ここに出る通り、古くから、子供が恐怖する名として、躾けの場で用いられた（ウィキの「ラミアー」に拠る）。

「Bent, p. 98」イギリスの探検家・考古学者・作家ジェームス・セオドア・ベント（James Theodore Bent　一八五二年～一八九七年）の「キクラデス諸島又は島内のギリシャ人たちの生活」（*The Cyclades; or, Life among the Insular Greeks*）。「Internet archive」のこちらの左ページから。ラミアは「Lamiæ」「Lamia」と出、水の女怪サイレン（Sirens）の仲間のように記されてある。

「事物紀原」宋の高丞の撰になる類書（百科事典）。原本は二十巻二百十七事項であるが、現存本は十巻千七百六十五事項。成立年は未詳。事物を天文・地理・生物・風俗など五十五部門に分類し、名称や縁起の由来を古書に求めて記したもの。巻十「麻胡」に、

＊

朝野僉載曰後趙石勒將麻胡性虎險鴆毒有兒啼每輒恐之麻胡來啼聲絶本草拾遺曰煬帝將幸江

都命麻胡濬汴河以木鵝試波深淺止皆死毎兒啼言麻胡來卽止人畏若是演義曰今俗以麻胡恐小兒俗傳麻胡祜爲隋煬帝將軍開汴河甚毒虐人多懼之胡祜聲相近以此呼之耳誤矣會稽錄云會稽有鬼號麻胡好食小兒腦遂以恐小兒若麻祜可以恐成人豈獨小兒也

＊

とある。熊楠は最後と前の方を合成して作文していることが判る。熊楠のそれは、勝手な合成なれば、それを気持ちよく手前勝手に訓読しておく。

＊

會稽に鬼有り、「麻胡」と號し、好んで、小兒の腦を食ふ。遂に以つて小兒の啼く在れば、則ち、「麻胡（まこ）、來たれり」と謂ひて之を恐（こはが）らすに、乃（すなは）ち、啼き聲、絶ゆ。

＊

後注で示すが、これは胡人であった残酷な武将麻秋（ましゅう）のことである。

「麻胡來」は現代中国語で音写すると、「マァー・フゥー・ラァイ」である。

「空華日工集」（くうげにっくしゅう：現代仮名遣）本邦の南北朝時代の禅僧で詩人としても知られた義堂周信（ぎどうしゅうしん）の日記。正しくは「空華日用工夫略集」或いは「空華老師日用工夫集」と呼ぶ全十巻。正中二（一三二五）年の誕生から元中五／嘉慶二（一三八八）年の晩年にいたるまでを、日記形式で要点を抄出したもの。その生涯を知るに便利なばかりでなく、当時の禅宗の様相及び将軍足利義満の行状や、室町幕府の政治を知る上で有益にして貴重な史料である。同書巻一の応安二（北朝の元号で、南朝は正平二十四年でユリウス暦一三六九年）年追抄（月不詳）に、

＊

才侍者問麻龜、引廣記答之、後趙石勒將麻龜者、太原胡人也、植性虓險鴆毒、有兒啼、母輒恐之曰麻胡來、啼聲絶、至今以爲故事。

＊

とある。「廣記」は「太平廣記」。北宋時代に成立した類書の一つで、太宗の勅命を奉じて李昉（りぼう）ら十二名が、九七七年から翌年にかけて編纂したもの。全五百巻・目録十巻。その二百六十七巻「酷暴一」の冒頭に出る「麻秋」。国立国会図書館デジタルコレクションの画像を視認した。句読点を打った。

＊

麻秋

後趙石勒將麻秋者、太原胡人也。植性虓險鴆毒。有兒啼、母輒恐之麻胡來、啼聲絶。至今以爲故事。出「朝野僉載」。

＊

麻秋（？～三五〇年）は五胡十六国時代の後趙の武将で太原出身の胡人。彼のウィキに経歴が詳しいが、その後に、『麻秋は凶悪で残酷な性格であり、しばしば毒酒を以て人を害していた。築城の為に百姓に労役をさせていた時は、昼夜関係なく休み無しで働かせ続け、ただ鶏が鳴いた時（夜明け時）にのみわずかな休息を取らせていたという。この為、周囲からも大いに恐れられ、泣く子に対して母が「麻胡が来る」と言うと、子は泣き止む程であったという』また、「列仙全伝」に『よると、彼の娘は麻姑という名であり、仙人であったとされ

ている。父が百姓に過酷な労役を課す事に心を痛め、複数の鶏を代わる代わる鳴かせる事で休息の時間を伸ばしていた。後にこの事が麻秋に発覚し、麻秋より暴行を受けそうになったので、逃走を図ってそのまま入仙したという』とある。**さても、熊楠は「石勒の將、太原の胡人麻姓のもの」と、この「秋」を「姓」と誤判読している**ことが判る。

「元興寺」これで「がごじ」の他「がごぜ」「ぐわごぜ」「がんごう」「がんご」とも読み、「元興寺の鬼」の意。飛鳥時代に奈良の元興寺（グーグル・マップ・データ）に現れたとされる妖怪。ウィキの「元興寺（妖怪）」によれば、平安時代の「日本霊異記」（私の愛読書の一つ）の「雷の憙［やぶちゃん注：好意。］を得て生ましめし子の強き力在る縁」（以下にシノプシスが語られる）や、「本朝文粋」などの文献に話がみられ、『鳥山石燕の「画図百鬼夜行」などの古典の妖怪画では、僧の姿をした鬼の姿で描かれている』。『敏達天皇の頃』、『尾張国阿育知郡片輪里（現・愛知県名古屋市中区古渡町付近）のある農夫が落雷に遭う。落雷と共に落ちてきた雷神はたちまち子供の姿に変化した。農夫が杖で殺そうとすると雷神は命乞いをし、助けてくれれば恩返しとして、雷神のように力強い子供を授けると言った。農夫は雷神の求めに応じて楠の船を作ると、雷神は農夫の見守る中それに乗って空中を昇り、雲や雷とともに空へ帰って行った』。『やがて農夫の妻が、雷神の申し子とでも言うべき子供を産んだ。それは頭には蛇が巻きつき、頭と尾を後頭部に垂らしているという異様な姿だった。雷神の言う通り』、『生まれついて怪力を持ち』、『歳の頃には力自慢で有名な皇族の王（おおきみ）の』一『人と力比べで勝つほどだった』。『後にこの子供は元興寺の童子となった。折りしも元興寺の鐘楼の童子たちが毎晩のように変死する事件が続き、鬼に殺されたものと噂が立っていた。童子は自分が鬼を捕まえて見せると言い、鬼退治をかって出た。あらかじめ鐘堂の四隅に灯を置いて蓋をしておき、自分が鬼を捕まえたら四人の童子たちに蓋を開けさせて鬼の姿を実見しようということになった。ある夜に鐘楼で待ち構え、未明の頃に鬼が現れるや、その髪の毛を捕えて引きずり回した。四人の童子たちは仰天して蓋を開けずに逃げてしまった。夜が明けた頃には鬼はすっかり頭髪を引き剥がされて逃げ去った。血痕を辿って行くと、かつて元興寺で働いていた無頼な下男の墓まで続いていた。この下男の死霊が霊鬼となって現れたのであった。この霊鬼の頭髪は元興寺の宝物となった。この童子は後にも怪力で活躍をした末に得度出家し、道場法師』（どうじょうほうし）『となったという』。『山折哲雄は、日本古来の神（カミ）の観念の本質を論じる文脈の中で、この説話の背景となる世界観に注目している。すなわち、前半の落雷が「小子」に変身して直ちに昇天してしまう点、後半の「霊鬼」が夜のみ登場し』、『灯に寄せなければ』、『その実体を確かめられない点を挙げ、ともに神霊の正体というものが本来そなえている秘匿性（隠れ身）をよく示すものであると指摘している』。『江戸時代の古書によれば、お化けを意味する児童語のガゴゼやガゴジは』、『この元興寺が由来とされ、実際にガゴゼ、ガゴジ、ガンゴジなど、妖怪の総称を意味する児童語が日本各地に分布している。しかし』、『民俗学者・柳田國男はこの説を否定し、化け物が「咬もうぞ」と言いながら』、『現れることが起因するとの説を唱えている』とある。

「若し元興寺の鬼を呼來て、他の兒に害ある鬼を嚇すと言ば、直ちに其元興寺の鬼を平げたる道場法師の名を呼で、强弱の諸鬼を合せて之を驅るの手段を、何故其時代の父母が氣付か

ざりしにや」少し意味がとりにくくなっているが、――もしも「元興寺の鬼」を呼んできて、他の児童にも害のある鬼を以って諌め嚇すと言うのならば、どうして、手っ取り早く、「直ちに」、「元興寺の鬼」を平らげた、かの怪力無双のゴースト・バスター「道場法師」の名を呼んで、ありとある「强弱の諸鬼を」も「合せて」これらを総て駆逐するという最も有効な児童の保護「手段を、何故」、その「時代の父母が氣付か」なかったのだろう？　と、私（熊楠）は思うのである――というのである。

「群書類從卷六十九道場法師傳」国立国会図書館デジタルコレクションの画像のここ。次の頁で終了している短いものである。日本漢文であるが、字も明瞭で、頗る読み易い。

『嬰兒をあやして「レロレロ」と云ふ』あなたもやるでしょう？　幼児をあやすに際して、舌で上顎を弾いて出す音や、そのさまを表わす語。「れろれろばあ」などとも言う。

「Tongue-Twister（舌捩り［やぶちゃん注：「したもじり」。］）」若干、違和感を持つ人がいるやも知れぬ。「Tongue Twister」というのは「早口言葉」のことで（「Twister」は、日本のツイスト・ドーナツのイメージのように「捩じれる」という意がある）、「舌捩り」というのも、言葉遊びの一つで、発音しにくい言葉を続けて普通に或いは早く言わせる、やはり早口言葉のことを指す。「れろれろ」はしかし、確かに早く言葉を喋らせようとする、最も始原的なものであり、早口言葉との親和性はあるのである。**因みに、私は、子どもが――最初に覚える身体表現としての言語的行為は――「さよなら」を意味する手を開いて振るところの「ばいばい」である――と考えている。そうだ……人間は誰もが……「愛してる」でも「好きよ」でもなく、宿命的に「さよなら」を最初の教え込まれるのである……**

『「レロレロ」と遼來と稍や音近き』張「遼」が「來」るで、「遼來」（リョウライ）、歴史的仮名遣だと「レウライ」、現代中国語音写だと「リィアォ・ラァイ」である。あんまり似てないと思いますがね、熊楠先生……。

［やぶちゃん注：冒頭の「一四四頁狼を魔除とする事」は出口米吉の「小兒と魔除」の初出論考の末尾部分（PDFの2コマ目）。私の電子化から引くと、『狼は和名オホカミ（大嚙）と稱して、一般に恐怖する所なりと雖も、未だ魔除として用ゐられたることを聞かず［やぶちゃん注：「聞かず」の初出の誤植。］。恐らくは虎を呼ぶの本意忘却せられ、俗に小兒を威嚇するが如く解するに至りて、更に狼をも添ふるに至りしならんと思はる。張遼來も鬼魔を逐ふが爲に唱せし者にして、鐘馗石敢當加藤清正等の武勇絶倫の豪傑の名を借りて惡鬼を驅逐すると趣旨を同くするなり。』の部分。思わず、そこで私が割注を入れたように、これは、しかし、埼玉県秩父市三峰にある三峯神社の狼を描いた護符を知らない出口氏の不勉強と言わざるを得ない。南方熊楠の「本邦に於ける動物崇拜（5：狼）」を見られたい。］

（一四四頁狼を魔除とする事）此邊に、今もさびしき所にて、狼來たとて小兒ををどす［やぶちゃん注：ママ。］こと多し、歐州にも有りと覺ゆ、世事百談に言る、虎狼來るとて小兒をすかすも、上の張遼麻胡と同く、單に啼ば狼來り噬む［やぶちゃん注：「かむ」。］といふに過ず、但し出口氏、狼は一般に恐るゝ所なれど、未だ魔除として用られたるを聞ずとはいかゞ、狼に大噬［やぶちゃん注：「おほかみ」。］の意あると同時に又大神の義を具ふ、書紀

卷十九、秦大津父［やぶちゃん注：「はだのおつち」。］、山中に狼の血鬪するを解くとき、下馬口漱手、祈請曰、汝是貴神云々今も此邊に送り狼とて、人を害せず、守衞せし狼の古語殘り、大臺原山に、神使の狼現存すと云、突厥高昌二國の祖は、人と狼と、狼と人との間種と稱し（淵鑑類函四二九卷）、歐州にも狼の子孫といへる人ある事、ハーバート、スペンサー［やぶちゃん注：底本では読点部で下線が切れるが、繫げた。］の社會學原理に見え、北米の印甸［やぶちゃん注：「インデアン」。］族、造世主を狼形とするもの多し（Ratzel, op. cit., vol. ii, p. 148）、此地（紀州田邊）に寡聞なる吾輩名を聞きしことなき物語繪を藏する人あり、土佐繪にて屏風に貼せるが［やぶちゃん注：「ちやうせるが」。］、前半計りのみ存し、山神なる狼、海中の「オコゼ」魚の美なるに懸想し、之を娶るに臨み、鮹の入道大に之を憤り、烏賊などを賴んで軍を起し、「オコゼ」姫の駕を奪んとする話なり、大和本草に見ゆる通り、舟師山神を祈て風を求むるに、今も「オコゼ」を捧ぐること、希臘海島の山神に捧るとて、麪包［やぶちゃん注：「パン」。］を海に投じ、以て漁を乞ふに同じ（Bent, p .65）、近頃迄熊野地方にて、狼を獸類の長とし、鼠に咬れて重患なる時、特に狼肉を求て煮喫せしを參するに、古え吾邦に狼を山神とする風有しならん、虎骨虎爪と等く、狼皮狼牙狼尾辟邪の功ありといふ支那說、上の邪視と視害の序に言へり、大和吉野郡十津川の玉置山は海拔三千二百尺と云、予も昨秋末詣しが、紀州桐畑より上るは、道頗る險にして水無く、甚き難所也、頂上近く大なる社あり、其神狼を使ひ者とし、以前は狐に附れしもの、いかに難症なりとも此神に祈り蟇目を行ふに退治せずと云事なく、又狐人を魅し［やぶちゃん注：「ばかし」。］、猪鹿田圃を損ずるとき、この社に就て神使を借るに、或は封の儘或は正體のまゝ渡しくれる、正體のまゝの場合には、使の者の歸路、之に先ち［やぶちゃん注：「さきだち」。］神使狼の足跡を印し續くるを見、其人家に達する前、家領の諸獸悉く逃畢るといふ、又傳ふるは、夜行する者自宅出るに臨み、「熊野なる玉置の山の弓神樂」と歌の上半を唱ふれば、途上恐ろしき物一切近かず、扨志す方え着したる時「弦音きけば惡魔退く」とやらかす也と、前述送り狼の譚は、之を言へるか、社畔に犬吠の杉あり、其皮を削り來て、田畑に插み［やぶちゃん注：「さしはさみ」。］惡獸を避けしと云、守禦の功犬に等しといふ意か、事體斯の如くなれば、虎狼を以て小兒をすかすは、魔除と何の關係なきと同時に、吾邦從來狼を魔除に用る風有しは、疑を容れずと斷云し置く、

［やぶちゃん注：「世事百談に言る、虎狼來るとて小兒をすかす」（6）で既出で当該部を電子化してある。但し、「世事百談」では「虎狼來（ころこん）」とルビしている。そこから考えれば、少なくとも南方熊楠も「ころくる」と読んでいると考えなくてはなるまい。平凡社「選集」では『虎狼来たる』としているが、これは如何にも発音として「ころきたる」は脅し賺す語として私は間が抜けているし、発音し難いと思うのである。**ここで遂に言っておくと、平凡社の「南方熊楠選集」の書き変えは、かなり編者による恣意的な、言わせて貰うなら、「読み易けりゃ、どう操作したって構わない」的な、読みや送り仮名が頻繁に見られ、確かに総体としては原本よりも現代人には読み易くなっているものの、実際には熊楠はそんな読み方はしていないと断言出来る部分が、もう今までの電子化での比較対象にあっても、腐るほど、あるのである。私が今回、熊楠の正字正仮名の底本で電子化しようと考えた意図の中には、たとえ読**

**み難くても、熊楠の肉声を電子的に再現すべきではないか、という強い思いがあるからである。**

「書紀巻十九、秦大津父、山中に狼の血鬪するを解くとき、下馬口漱手、祈請曰、汝是貴神云々」「南方熊楠　本邦に於ける動物崇拜（5：狼）」の私の注で電子化済み。

「大臺原山に、神使の狼現存すと云」奈良県と三重県の県境にある大台ヶ原山（おおだいがはらやま：グーグル・マップ・データ。以下同じ）は標高千六百九十五・一メートル。大台ヶ原から北の高見山（たかみやま）にのびる台高（だいこう）山脈は、事実、ニホンオオカミが最後まで棲息していたと言われる山域で、人跡稀な森であった。

「突厥高昌二國の祖は、人と狼と、狼と人との間種と稱し（淵鑑類函四二九巻）」「淵鑑類函」は清の聖祖（康熙帝）の勅撰により編纂された類書（百科事典）。一七一〇年成立。四百二十九巻に、

＊

後周書曰突厥之先匈奴之別種也爲鄰國所破其族有一小兒棄草澤中有牝狼以肉飼之及長與狼交合遂有孕焉逃於高昌國北山洞穴生十男其後各爲一姓阿史那卽其一也

＊

とあり、その少し後の「嚙宮人　配二女」の条にも、

＊

江都易王非卒子建立宮人有過縱狼嚙殺之觀以爲樂爲北史單于二女甚美置高堂上有老狼守臺遂狼妻産子後遂爲高昌國

＊

とあった。「突厥」はモンゴル高原で活動したトルコ系の遊牧民で、五五二年にユーラシアの東西にまたがる突厥帝国（第一帝国）を建設し、西ではササン朝、東では隋・唐帝国と同時期であったが、五八三年に東西に分裂し、東突厥は隋の支配を受けた。一方の高昌は隋・唐と突厥の間に挟まれたオアシス都市国家で、中国の南北朝から唐にかけて現在の新疆ウイグル自治区トルファン市に存在した。

「歐州にも狼の子孫といへる人ある事、ハーバート、スペンサーの社會學原理に見え」南方熊楠「本邦に於ける動物崇拜」（9：梟）で既出既注。但し、調べた限りでは、同第三巻の、

＊

Hence when we read：that the ancestor of the Mongol royal house was a wolf;" and that the family name was Wolf; and when we remember the multitudinous cases of animal-names borne by North American Indians, with the associated totem-system; this cause of identification of ancestors with animals, and consequent sacredness of the animals, becomes sufficiently obvious.

＊

しか見当たらない。しかも、これは前後で熊楠が指摘する内容に酷似したモンゴル人及びアメリカ・インディアンの伝承であって、ヨーロッパにおけるそれではない。容易に想起されるのは、ローマの建国神話に登場する双子は狼によって育てられた双子の兄弟ロムルスとレムスが浮かぶ限りで、後代の所謂、「狼男」（人狼）、「ウェアウルフ」（英語：werewolf）・「ヴァラヴォルフ」（ドイツ語：Werwolf）や「ルー・ガルー」（フランス語：loup-garou）は

多分に悪魔的な色づけがなされ、しかも多分に、異常なモンスターどころか、古くから多くの学者たちから、精神疾患や妄言として早くに退けられてさえいるもので、狼の血の持つ強力な超自然のそれは、欧州の伝承ではそれほどメインに登場していないようである。

「北米の印甸［やぶちゃん注：「インデアン」。］族、造世主を狼形とするもの多し（Ratzel, op. cit., vol. ii, p. 148）」既出のイツの地理学者・生物学者リードリヒ・ラッツェル（Friedrich Ratzel　一八四四年～一九〇四年：社会的ダーウィニズムの影響の強い思想を特徴とし、政治地理学の祖とされる）の「`History of Mankind,` trans. Butler, 1896」とあった英訳本の第二巻で、「Internet archive」の英訳原本のこちらの左ページの本文の（三行の脚注を除く）下から11行前にある、

＊

Where beasts appear as the makers of men, a creator-god is hidden in them ; manifesting himself by preference in the form of a wolf or a dog.

＊

が相当する。あぁっつ！　「ダンス・ウィズ・ウルブズ」（*Dances with Wolves*：一九九〇年・アメリカ／監督・主演・製作ケビン・コスナー　Kevin Costner）は良かったなあ！

『此地（紀州田邊）に寡聞なる吾輩名を聞きしことなき物語繪を藏する人あり、土佐繪にて屏風に貼せるが、前半計りのみ存し、山神なる狼、海中の「オコゼ」魚の美なるに懸想し、之を娶るに臨み、鮹の入道大に之を憤り、烏賊などを賴んで軍を起し、「オコゼ」姫の駕を奪んとする話なり』所持する一九九〇年八坂書房刊の「南方熊楠アルバム」（中瀬嘉陽・長谷川興蔵編）の中に、七枚あるその屏風の四つの箇所がモノクロで掲載されており、その屏風は田辺の熊楠の友人湯浅富三郎の家にあったもので（屏風絵と詞書があった）、熊楠はそれを材として、この二年後の明治四四（一九一〇）年二月発行の『東京人類学会雑誌』二十六巻二百九十九号に「山神オコゼ魚を好むということ」ことを発表している（リンク先は私の「選集」版で電子化した古いもの。初出はこれ（「J-stage」のPDF）。近い将来、新たに正字正仮版をここで公開する）。そのキャプションによれば、土佐絵で、彩色もなかなかに精密で、『狼神とオコゼ姫の祝言の宴会を中心に』『山や海のさまざまな動物が描かれて』あるもので、私も甚だそそられる逸品である。原屏風は、現在は東京に移転した湯浅家の所蔵になるものとある（熊楠は知人の画家広畠幾太郎に模写させたともある。そちらでよいから、是非見たい、まっこと、面白い絵なのである）。なお、「オコゼ」は条鰭綱新鰭亜綱棘鰭上目カサゴ目カサゴ亜目フサカサゴ科（又はオニオコゼ科）オニオコゼ亜科オニオコゼ属オニオコゼ *Inimicus japonicus* で、同種は単に「オコゼ」とも呼ぶ。

『大和本草に見ゆる通り、舟師山神を祈て風を求むるに、今も「オコゼ」を捧ぐる』「大和本草巻之十三　魚之下　をこぜ　（オニオコゼ）」に（〔　〕は私が添えたことを意味する）、

＊

をこぜ　ふぐに似て、かど、あり。背には、はり、あり。赤色まだらなり。其の長さ一寸ばかりなるを、海人、用ひて、山〔の〕神を祭り、日和（ひより）と得ものあらん事を祈る。

＊

とある。そこで私が注したものを引いておく。

＊

「得もの」は獲物。民俗学的記載を入れてくれた益軒に拍手をしたいが、ただ、「海人」というのはちょっとまずい。これは「山人」、山林を仕事場とする猟師や伐採に従事する者たちがこの儀式をするのである。山の神は女神とされるが、容貌が醜いとされ、しかも山の幸を持ち去る者には厳しい。そこで、醜悪なオコゼの顔を見ると、安心して静まり、仕事を許して守って呉れるとされるのである。現在でも、地方によっては、山入りの際に、実際のオコゼの類を仕入れて奉納し、山の神に許諾と安全を祈願している。

＊

「希臘海島の山神に捧るとて、麪包［やぶちゃん注：「パン」。］を海に投じ、以て漁を乞ふに同じ（Bent, p .65）」既出のイギリスの探検家・考古学者・作家ジェームス・セオドア・ベント（James Theodore Bent　一八五二年～一八九七年）の「キクラデス諸島又は島内のギリシャ人たちの生活」（*The Cyclades; or, Life among the Insular Greeks*）。「Internet archive」で調べると、当該ページはここで、右ページ中央の以下の段落の最後に現われる。

＊

Accordingly next morning we set off in a boat to cross the harbour.　As we went we had a better opportunity of realising its beauty and extent: it could hold all the navies of the world within it, and it is protected by an island at its mouth. On the western point is a mountain called the Vanis, a wild, bleak spot, on which our boatman told us that it was the custom to throw bread when they sailed out, that Vanis might eat and send them fish in return.

＊

「虎骨虎爪と等く、狼皮狼牙狼尾辟邪の功ありといふ支那説」(3) の本文と私の注を参照。

「大和吉野郡十津川の玉置山は海拔三千二百尺と云」奈良県吉野郡十津川村にある大峰山系の最南端の玉置山（たまきやま）。標高千七十六・四メートル（「三千二百尺」は九百六十九・七メートルで違いが甚だしい。当時の測量技術が低かったか）。

「紀州桐畑」**和歌山県田辺市本宮町切畑の誤り**であろう。玉置山の南西山麓に当たる。

「大なる社」玉置神社。サイド・パネルの神社画像でリンクさせた。公式サイトを調べたが、狼信仰は払拭されているようである。しかし、調べてみると、**玉置山の北山麓の奈良県吉野郡十津川村高滝にある高滝神社が狼信仰を伝えている**ことが判った。サイト「十津川探検～瀧洞夜話」のこちらに「十津川村字高瀧神社使狼のこと」として、『高瀧神社は昔より狼を使狼となす傳へあり。明治に至るまで、所々の部落民、猪の害に困憊すれば、この宮に至り、神主に祈らせ、幣を入れた箱を白布に包み〔何人か人員を要す、途中大小便を忌む〕負はせてもらひ、帰村して之を祭る。忽ちにして、次の朝あたり、所々に猪の屍ありたるよし。中作市老に聞く』とあった。**ニホンオオカミを絶滅させてしまった今、せめても、彼らを神の一員として後代に伝え残すべき義務が我々には、ある。**

「以前は狐に附れしもの、いかに難症なりとも此神に祈り蟇目を行ふに退治せずと云事なく」玉置神社公式サイト内の解説に、境内内の摂社三柱神社について、『玉置神社境内に古くより鎮座されております三柱神社については謎が多く、説明が難しい』としつつ、『三柱神社は別名「稲荷社（いなりしゃ）」とも呼ばれ』るものの、『稲荷信仰が盛んになる前から

地主神（じぬしのかみ）としてお祀りをされており、厄除けや心願成就さらに精神の病（ノイローゼなど）また海上安全にも特別の霊験があるとされてい』るとある。私は、ここに狼の臭いを嗅ぎ取った。

「熊野なる玉置の山の弓神樂」「弦音きけば悪魔退く」玉置神社例大祭は、毎年十月二十四日に行われるが、そこでは男性の神子が巫女の衣装を身につけて、白い弓矢を手にし、舞楽を奏する「弓神楽（ゆみかぐら）」が奉納され、その折りの歌詞が、

熊野なる玉置の宮の弓神樂
弦音（つるおと）すれば悪魔退（しりぞ）く

である。強力な悪魔封じの特異的な神社として中古より知られていた。悪鬼に対抗するには、私は是非とも狼が必要だと思うのである。

「犬吠の杉」**玉置神社の参道の近くに「犬吠檜（いぬぼえひのき）」という枯れた株が現存する。**大昔に熊野浦を襲った襲った巨大津波を告げて亡くなった「白い犬」の伝承が、かわじー氏のブログのこちらに記されてあり、oinuwolf氏のブログ「狼や犬の、お姿を見たり聞いたり探したりの訪問記―主においぬ様信仰―」にも同じ伝承が記されてある（孰れも株の写真がある）が、後者はそれを「白い狼」と記しておられる。これであろう（スギ（裸子植物門マツ綱マツ目ヒノキ科スギ亜科スギ属スギ *Cryptomeria japonica* ）とヒノキ（ヒノキ科ヒノキ属ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* ）は同じヒノキ科 Cupressaceae で、しばしば混同されやすい）。］

序に一言するは、今日は知ず、二十年ばかり前迄、紀伊藤白王子社畔に、楠神と號しいと古き楠の木に、注連結びたるが立りき、當國、殊に海草郡、就中予が氏とする南方苗字の民など、子產まるゝ毎に之に詣で祈り、祠官より名の一字を受く、楠、藤、熊など是也、此名を受し者、病ある都度、件の楠神に平癒を禱る、知名の士、中井芳楠、森下岩楠抔皆此風俗に因て名られたるものと察せられ、今も海草郡に楠を以て名とせる者多く、熊楠などは幾百人あるか知れぬ程也、予思ふに、こは本邦上世「トテミズム」行はれし遺址の殘存せるに非るか、三島の神池に鰻を捕るを禁じ、祇園の氏子胡瓜を食はず、金毘羅に詣る者蟹を食はず、富士に登る人鰶［やぶちゃん注：「このしろ」。］を食はざる等の特別食忌と併せ攷ふるを要す、上文玉置山の狼も亦、其地に多き玉置一族の「トテム」たりしに非るか

［やぶちゃん注：「藤白王子社」厳密には現存しないと言うべきである。「若山県神社庁」公式サイト内の「藤白神社」を見られたい。いろいろと書いてあるが、『藤白王子社跡』とある。現在は海南市藤白にある藤白神社内に跡がある。結局、消失したのは、恐らく、忌まわしき神仏分離・廃仏毀釈（もともとあったのだから、熊楠が戦った神社合祀の結果ではない）のためであろう。その解説に、『境内の千年楠を子守楠神社（熊野杼樟日命）として祀り、古来畿内各地から子が生まれた時、祈願して、楠・藤・熊の名を受けると長命して出世するといわれた』。『紀州が生んだ巨人、南方熊楠もその一人である』とあり、指定文化財の項に『藤白神社クスノキ群（市指定）』とある。しばしばお世話になるMotohiko Tanida氏のサイト「巨樹と花のページ」のこちらを見るに、**五本の大楠が現認出来る。熊楠が見上げたそれは今も健在だ。**楠は被子植物門双子葉植物綱モクレン亜綱クスノキ科ニッケイ属クスノキ

*Cinnamomum camphora*　である。

「號し」「なづけし」。

「中井芳楠」（なかいほうなん　嘉永六（一八五三）年〜明治三六（一九〇三）年）は銀行家・教育者。元和歌山藩士。明治八（一八七五）年、慶應義塾卒業。和歌山藩校にて教鞭を取り。第四十三国立銀行支配人となる。明治一三（一八八〇）年、横浜正金銀行に入行、ロンドンに派遣され、支店長となる。南方熊楠と親しくしており、ロンドンから送った文章を文庫に寄贈している。

「森下岩楠」（いわくす　嘉永五（一八五二）年〜大正六（一九一七）年）は官僚・教育者・実業家・ジャーナリスト。紀伊生まれ。明治三（一八七〇）年、慶應義塾を卒業後、「三菱商業学校」を創立。大蔵省書記官となるが、明治十四年の政変で辞職し、時事新報に入社。北海道庁の後援で「帝国水産」「帝国生命保険」等に勤務。明治二九（一八九六）年に探偵社「東京興信所」の所長に就任している。

「海草郡」現在はここであるが、旧郡域は、その周辺の和歌山市の大部分・海南市の大部分・有田市の一部を含む地図画面全体に広がる広域である。

「三島の神池に鰻を捕るを禁じ」「南方熊楠　本邦に於ける動物崇拝（22：鰻）」を参照されたい。

「祇園の氏子胡瓜を食はず」この話はよく知られている京都八坂神社の古い習俗であるが、私にはどうもその解明を記すものに未だ出逢っていないと感じている。例として、短いながら、多くの習俗を纏めてある「祇園商店街」公式サイト内の「神紋　胡瓜、それとも瓜　祇園さんの神紋」を引く。『京の夏野菜の代表格で、もろきゅうよし、うざくよし、浅漬けよしの胡瓜が祇園社の神紋かもという説、ご存知でしょうか』。『祇園社の神さまが胡瓜の上に降臨したので』、『その切断面を模したは俗伝で、真説は、織田信長の幟印の木瓜であるなどと、こもごも』あり、『『和漢三才図会』には、「祇園神、胡瓜の社地に入る事を禁ず。産土（うぶすな）の人、これを食ふ事を忌む」との記載があり、昔の京都では胡瓜を食べる人が少なかったようです』。『「祇園会や胡瓜花さく所まで　超波」という句があるほどで、祇園祭の行列も胡瓜畑の手前で止まるのがしきたりだったようです』。『胡瓜のさなご［やぶちゃん注：瓜類の種のこと。］の形と、祇園さんの棟や神輿についている瓜の紋と類似していることから、「さわらぬ神に」と食べるのを遠慮したのでしょう』。『もっとも』、『江戸時代には、牛頭天王への供物として、初なりの胡瓜は川へ流したものとか。取って食おうと天王を追いかけてきた鬼が、胡瓜の蔓に足を取られて転倒』し、『以来』、『胡瓜は祇園の神の神使となったと伝える地方もある一方、祇園神は大の好物だったが、夢で目を傷められたから、仇の胡瓜は食べませんと、きらう地方もあります』とあるのが眼を引く。ここで判るのは、ここでは、動物ではなく、食物である植物の胡瓜そのものが「トーテム」であったことになる。因みに、胡瓜を好む動物というのは、生態学的にはホンドタヌキやにニホンアナグマがおり、日本各地に人型妖獣としての河童の好物として胡瓜を食うことを禁忌とするという伝承は多いものの、祇園神と狸・穴熊・河童の関係性は全くない。但し、「トーテム」は植物の場合もあるので、これは問題ない。

「金毘羅に詣る者蟹を食はず」「南方熊楠　本邦に於ける動物崇拝（26：蟹）」参照。但し、

そこで私は注をつけながら、何故、蟹なのか？　という疑問の解明には至らなかったことを言い添えておく。

「富士に登る人鰶を食はざる」私の『山中笑「本邦に於ける動物崇拜」（南方熊楠の「本邦に於ける動物崇拜」の執筆動機となった論文）』に、『鰶（コノシロ）　駿河山宮の淺間の氏子、鰶を食せず。鰶を身代に葬禮して病氣快復を祈願す』とあり、さらにその後の方で、『鰶（コノシロ）　子の代（シロ）として、小兒成長を祈願し、鰶を身代りに、葬式する者あり。又、駿河富士郡大宮、及、山宮淺間の氏中は、鰶を食せぬ者あり。神女の身代りになりし魚と云ふ傳説ありて、食せぬなり』とある。**しかし、この禁忌は、鰶（条鰭綱新鰭亜綱ニシン上目ニシン目ニシン亜目ニシン科ドロクイ亜科コノシロ属コノシロ *Konosirus punctatus*）が「トーテム」であるとは言えない。詳しくは「大和本草巻之十三　魚之下　鯖（コノシロ）」の本文及び私の考証を読まれたいが、古くから鰶を焼く臭いが人の亡骸を焼いた臭いに似ている（そんな事実は全くないが）という話から、穢れとして禁忌となっているもの、或いは、フレーザーの謂う類感呪術的なものが発生の根っこにあると私は考えるからである。山中の言う「神女の身代りになりし魚と云ふ傳説」は後付けに過ぎぬと思う。**

「玉置一族」玉置氏は中世以降、紀州に強い勢力を持った一族であることは確かであるが、サイト「戦国大名研究」の「玉置氏」によれば、『玉置氏は、家伝によれば』、『平資盛の子が熊野に逃れ、大和吉野郡十津川村の玉置山上に鎮座する玉置社の神官となったと伝える。『太平記』には玉木荘司とみえ、その本拠は大和国十津川村折立付近であったといい、いまも十津川には玉置姓が多い』。『一説によれば玉置氏は尾張連の流れを汲むともいうが、確かな系図が伝来していないこともあって出自に関しては不明というしかない』とある。以下、南北朝以降の玉置氏勢力の詳しい経緯が記されているので読まれたい。」

［やぶちゃん注：以下は、底本では全体が一字下げ。］

**後筆**、本文認め畢て後 Ulrich Schmidt, 'The Conquest of the River Plate,' trans. Dominguez, 1891, pp. 42,43　を繙くに、ラプラタに鰐あり、兵刃破る能はず、其氣人にかゝれば必［やぶちゃん注：「かならず」。］死す、此魚、井中に在る時、鏡を示し、自ら其影を見て、其顔の獰惡なるに驚き死せしむと有り、鰐の在る處瘴氣ある故、邪氣人を殺すと看做せしならん、（本草、鼉［やぶちゃん注：「だ」。］卽ち鰐、長一丈者能吐氣成雲致雨）、邪氣と邪眼の兩信一源なるを見るべし、但し、此話白人入らぬ先已に南米に行はれしにや、或は歐人、上文に述たる「コツカトリス」鏡を見て死する談を齎來［やぶちゃん注：「せいらい」。「もたらしきたった」の意か。］して、ラプラタの鰐に附會せるに非るを得んや、後考を俟つ、又三州奇談三、加賀白山、群梟と人と相詈て［やぶちゃん注：「あひののしりて」。］、聲先づ止む人は死する話あり、故に梟鳴に答へぬことゝ見えたりパンジヤブにも梟鳴に應ずれば必ず人死すと云（North India Notes and Queris, ap. Folklore, vol. v, p. 84, 1890）狸腹鼓打つに應じて、人火鉢をたゝき、續け勝つとき狸死すと云は之に似たり、爾雅に、市人爭作犬聲逐鬼車、本文に引るマレー人大喧呼して、ベリベリ鳥を厭［やぶちゃん注：「まじなひ」。］する抔同樣の迷信より出たるか、

本文、兒啼が其身と父母一族の安危に大影響を及す事を述るに、次の吾邦に於る好例を引くを遺したれば爰に附記す、塙保己一の螢蠅抄卷四に云く、「日蓮注畫賛云、弘安四年五月、又蒙古高麗已下國兵軍兵、驅具七萬餘艘大船乘責來云々壹岐高麗船五百艘、自壹岐對馬下、見合者打殺、人民、不堪、脫將妻子逃隱深山、聞赤子泣聲押寄打殺、父母惜我命、刺殺赤子隱居云々、八幡愚童訓云々高麗の兵船五百艘、壹岐對馬に上て見合者をば打殺す、人民堪兼て、妻子を引具し深山に逃籠る處に、赤子の鳴聲を聞付て押寄殺しける程に、片時の命惜ければ、さしも愛する嬰兒を、我と泣々差殺してぞ隱れける、失子親計り、いつ迄有ん命ぞと、身ながらうたてしく泣歎く心中をいかにせん、世の中に、糸惜しき物は子也けり、其にまさるは我身也けりと讀置し、人のすさみを今ぞ知る云々、

（明治四十二年五月、人類二四卷）

［やぶちゃん注：「Ulrich Schmidt, 'The Conquest of the River Plate,'」ネット検索で「The Conquest of the River Plate (1535-1555)」「Voyage of Ulrich Schmidt to the Rivers La Plata and Paraguai, from the Original German Edition, 1567.」と書誌が出るが、作者ウルリッヒ・シュミットの事蹟や内容は不詳。

「ラプラタ」アルゼンチンとウルグアイの間を流れるラプラタ川（スペイン語：Río de la Plata：リオ・デ・ラ・プラタ）。ここはワニ目正鰐亜目アリゲーター科 Alligatoridae のアリゲーター類の南限である。但し、以下の記載も、実際に人を襲撃していない呪力的な記載であることで判るが、アリゲーターは他のワニ類に比すと、おとなしく、人を襲う確率は比較的少ないとされる。

「瘴氣」（しやうき（しょうき））は熱病を起こさせるとされた山川の毒気のこと。古くから漢籍に見られる語で、実態は感染症の風土病であることが殆どである。

「本草、鼉卽ち鰐、長一丈者能吐氣成雲致雨」「本草綱目」の巻四十三の「鱗之一」の「鼉龍」の「釋名」の下線部。折角なので「集解」まで引いておく。

＊

**鼉龍**【「本經中品」。】

**釋名**　鮀魚【「本經」。】土龍　藏器曰、本經鮀魚、合改作鼉。鼉形如龍、聲甚可畏。長一丈者、能吐氣成雲致雨。既是龍類、宜去其魚。時珍曰、鼉字象其頭、腹、足、尾之形、故名。「博物志」謂之土龍。鮀乃魚名、非此物也。今依陳氏改正之。

**集解**　別録曰、鮀魚甲生南海池澤、取無時。弘景曰、卽鼉甲也、皮可冒鼓。性至難死、沸湯沃口、入腹良久乃剝之。藏器曰、鼉性嗜睡、恒閉目。力至猛、能攻江岸、人于穴中掘之、百人掘、須百人牽之、一人掘、亦一人牽之。不然、終不可出。頌曰、今江湖極多。形似守宮、鯪鯉輩而長一二丈、背尾俱有鱗甲。夜則鳴吼、舟人畏之。時珍曰、鼉穴極深、漁人以篾纜繫餌探之、候其呑鈎、徐徐引出。性能横飛、不能上騰。其聲如鼓、夜鳴應更、謂之鼉鼓。亦曰鼉更、俚人聽之以占雨。其枕瑩淨、勝于魚枕。生卵甚多至百、亦自食之。南人珍其肉、以爲嫁娶之敬。陸佃云、鼉身具十二生肖肉、惟蛇肉在尾最毒也。

＊

**鼉龍**【「本經中品」。】

**釋名**　鮀魚【「本經」。】　土龍　藏器曰はく、「本經」鮀魚、改して「鼉」に作し合す。鼉、形、龍のごとし。聲、甚だ畏るべし。長さ一丈の者は、能く氣を吐き、雲を成し、雨を致す。既に是れ、龍の類なり。宜しく其の魚を去るべし。時珍曰はく、鼉の字、其の頭・足・尾の形を象る。故に名づく。「博物志」に之れを「土龍」と謂ふ。鮀は乃ち、魚の名にして、此の物に非ざるなり。今、陳氏に依りて之れを改正す。

**集解**　「別録」曰はく、「鮀魚甲」、南海の池澤に生ず。取るに、時無し。弘景曰はく、卽ち、「鼉甲」なり。皮、鼓を冐ふべし。性、至つて死し難し。沸湯、口に沃ぎて、入ること、腹、良久しくして、乃ち、之れを剝ぐ。藏器曰はく、鼉、性、睡るを嗜み、恒に目を閉づ。力、至つて猛なり。能く江岸を攻す。人、穴中に之れを掘る。百人、掘れば、須らく、百人、之れを牽く。一人、掘れば、亦、一人、之れを牽く。然らざれば、終に出づべからず。頌曰はく、今、江湖に極めて多し。形、守宮・鯪鯉［やぶちゃん注：センザンコウ。］の輩に似て、長さ一、二丈、背・尾、倶に、鱗甲、有り。夜、則ち鳴き吼え、舟人、之れを畏る。時珍曰はく、鼉の穴、極めて深し。漁人、篾纜［やぶちゃん注：竹を細く割って縄状にしたもの。］を以つて餌を繫ぎて、之れを探し、其の鈎を呑む候て、徐徐に引き出だす。性、能く横飛びして、上に騰ること能はず。其の聲、鼓のごとし。夜、鳴きて、更に應ず。之れを「鼉鼓」と謂ふ。亦、「鼉更」と曰ふ。俚人、之れを聽きて以つて雨を占ふ。其の枕、瑩淨［やぶちゃん注：艶があって清浄なこと。］にして、魚枕に勝れり［やぶちゃん注：魚の皮或いは浮袋などで作った枕か。］。卵を生むこと、甚だ多くして、百に至る。亦、自から之れを食ふ。南人、其の肉を珍として、以つて嫁娶の敬と爲す。陸佃云はく、鼉の身、十二生肖［やぶちゃん注：十二支。］の肉を具ふ。惟だ、蛇の肉は、尾に在りて最も毒あり。

＊

下線部はもう、龍でやんす！

『上文に述たる「コツカトリス」』（バジリスクと同じ、或いは同じ仲間）『鏡を見て死する談』（2）参照。

「三州奇談三、加賀白山、群梟と人と相詈て、聲先づ止む人は死する話あり、故に梟鳴に答へぬことゝ見えたり」私の「三州奇談卷之三　白山の梟怪」を参照されたい。金沢の伊勢派の俳諧師で随筆家堀麦水（享保（一七一八）年～天明三（一七八三）年）の「三州奇談」は加賀・能登・越中、即ち、北陸の民俗・伝承・地誌・宗教等の奇談を集成したもの。私は既にカテゴリ「怪奇談集」で全電子化注を終えている。

「爾雅に、市人爭作犬聲逐鬼車」「爾雅」は現存する中国最古の字書。現在は十九編が伝わる。元は四書五経を正しく読むために作られた字書とされたが、実際には「五経」に見える語は全体の三～四割に過ぎないとされる。周公の作とも伝え、遅くとも紀元前二世紀には成立していたと思われる。訓読しておくと、「市人、爭ひて犬の聲を作し、鬼車を逐ふ」であるが、但し、**この文字列は「爾雅」にはない。全く同じものも他に見出せない。敢えていうなら、「広雅」（「博雅」とも呼ぶ字書。三国時代の魏の張揖によって編纂されたものであるが、「爾雅」の増補版に相当する。隋代に煬帝の名の「広」を避諱して「博雅」と改題されたが、後に原書名に戻った）の巻四十五に（下線太字部は私が附した。この同じ内容は前に何度か出した）、**

＊

九頭鳥、姑獲、渠逸、皆、鬼車也。「白澤圖」之蒼鸆孔子所見之竒鶬也。「白澤圖」言、蒼鸆有九首孔子與子夏見。竒鶬九首而歌或作九尾。此鳥海上多有智在、松江親聞之、**市人爭作犬聲相逐**。相傳、一頭流血、著人家卽凶。「夷堅志」言、李壽翁得之呼爲渠。逸鳥十脰環簇、其一無頭、而滴血。「玄中記」、姑獲、一名天帝少女、好取人小兒養之。點血其衣以爲誌。「荊楚記」言以爲、姑獲、一名勾星。衣毛爲鳥、脫衣爲女。聞者、捩犬耳滅燭禳之。

＊

**とあるのを、熊楠が合成作文したものと思われる。**

「本文に引るマレー人大喧呼して、ベリベリ鳥を厭する抔同様の迷信より出たるか」(5)を参照。

「塙保己一の螢蠅抄」「群書類従」「続群書類従」（後者は没後に弟子たちが継いだ）の編纂者として知られる盲目の国学者塙保己一（はなわ ほきいち 延享三（一七四六）年～文政四（一八二一）年）武州児玉郡保木野村（現在の埼玉県本庄市児玉町保木野）生まれで、出自は百姓とされる。五歳の時に罹患した激しい「疳の病い」（胃腸疾患）に罹患したのが原因で、七歳の春に失明した。十五の時、江戸に出、歌を萩原宗固、国学を賀茂真淵・山岡明阿弥に学んだ。勾当・検校・和学講談所教授を務め、安永八（一七七九）年に国学・国史を主とする一大叢書「群書類従」の大事業に着手した。同正編の叢書は寛政五（一七九三）年から文政二（一八一九）年に板行されている。晩年は総検校となった。贈正四位。「螢蠅抄」（「けいようしょう」（現代仮名遣））は蒙古襲来を中心に、外国から本邦が受けた侵攻に関する資料を集成したもの。文化八（一八一一）年自序。書名は文末に「螢火のかゝやく神五月蠅なすあしき神のあらひにてえみしらの此國にあたすることありともやかて神風に吹やふられて遂にうれひなからむ理りを世人にしらせむとてなむ」とるのに基づく。「国文学研究資料館」のオープン・データの原本を当該部（まず「日蓮注畫賛」）を見ると、熊楠の引用はかなりのカットと引用不全があることが判った。以下に原文を示し、我流で書き下す（一部の返り点には不審があるので従っていない）。

＊

日蓮注畫賛云弘安三年庚辰蒙古襲来於二筑前州志賀嶋一合戰大元兵三百七十万騎大舩七万餘艘込乘責來九州人民悉逃失【按是年襲来諸書无所見恐本書誤】同弘安四年辛巳五月又蒙古髙麗已下國ニ軍兵ヲ驅具七萬餘艘大舩乘責來爲二居住一持二世路具一爲二耕作一貯二鋤類一髙麗舩五百艘自二壹岐對馬一下見合者打殺人民不レ堪レ脫將二妻子一逃二隱深山一聞二赤子泣聲一押寄打殺父母惜二我命一刺二殺赤子隱居一

＊

「日蓮注畫賛」に云はく、弘安三年庚辰、蒙古筑前州志賀嶋に襲来し、合戰す。大元兵、三百七十万騎、大舩七万餘艘に乘り込みて、責め來たる。九州の人民、悉く逃げ失す【按ずるに、是の年の襲来、諸書に、所見、无し。恐らくは本書の誤りか。】。同弘安四年［やぶちゃん注：一二八一年。］辛巳五月、又、蒙古・髙麗已下、國に軍兵を驅り具すこと、七萬餘艘、大舩に乘り、責め來たる。居住を爲し、世路の具［やぶちゃん注：生計に使う農具。］を持ちて、耕作を爲し、鋤の類ひを貯ふ。髙麗舩五百艘、壹岐・對馬より下り［やぶちゃん注：

下船して上陸し。]、見合はせる者は、打ち殺す。人民、脱るるに堪えず、妻子を將て、深山に逃げ隠る。赤子が泣聲を聞かば、押し寄せ、打ち殺せば、父母、我が命を惜みて赤子を隠居に刺殺すと。

＊

途中の「居住を爲し、世路の具を持ちて、耕作を爲し、鋤の類ひを貯ふ。」は唐突で不審。壱岐・対馬にいた農民のことと解しておく。文脈からは、攻めて来た兵が上陸後に長期戦に備えて一時的に農耕を行ったともとれなくもないが、孰れにせよ、前後の文からどうも浮いている。元々の詞書が判らないので何とも言えないが、島民の者であることを示す脱字が私には疑われる。

以下、「八幡愚童訓」の部分。原本はここ。これは、熊楠、かなりしっかりと正しく引いている。後に自己流に訓読文を添えて終わりとする。

＊

八幡愚童訓云弘安四年ノ比蒙古ハ大唐高麗已下ノ國〻ノ兵共ヲ駈具シテ三千余艘《十万七十八百余ィ[やぶちゃん注：上記の右傍注。「イ」は「異本」の略号。]》ノ大船ニ數千万人乘列テコソ来ケレ其中高麗ノ兵船五百艘壹岐對馬ニ上テ見合者ヲハ打殺ス人民堪兼テ妻子ヲ引具深山ニ逃篭ル處ニ赤子ノ鳴聲ヲ聞付テ押寄殺ケル程ニ片時ノ命惜ケレバサシモ愛スル嬰兒ヲ我ト泣〻差殺シテゾ隠レケル失レ子親計リイツ迄アラン命ソト身ナカラウタテシク泣歎心中ヲイカニセン世中ニ糸惜キ物ハ子成ケリ其ニマサルハ我身ナリケリト讀置シ人ノスサミヲ今ソシル

＊

「八幡愚童訓」に云はく、弘安四年の比、蒙古は大唐・高麗已下の國々の兵共を駈せ具して、三千余艘《異本「十万七十八百余」》の大船に數千万人、乘せ列ねてこそ、来りけれ。其の中、高麗の兵船、五百艘、壹岐・對馬に上がりて、見合す者をば、打ち殺す。人民、堪え兼ねて、妻子を引き具し、深山に逃げ篭るる處に、赤子の鳴き聲を聞き付けて、押し寄せ、殺しける程に、片時の命、惜しければ、さしも愛する嬰兒を、我と[やぶちゃん注：自ら。]泣々差し殺してぞ隠れける。子を失ふ親計り、「いつ迄あらん命ぞ」と、身ながら[やぶちゃん注：我ながら。]、うたてしく、泣き歎く心中を、いかにせん。「世の中に糸惜き物は子成けり　其れにまさるは我が身なりけり」と讀み置きし、人のすさみを、今ぞしる。

＊]

南方熊楠　小兒と魔除　　附　藪野直史注　完